
END IF;

Mercurius

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

END IF；

【Nコード】

N6563H

【作者名】

Mercurius

【あらすじ】

「大間のマグロ漁船に乗るよりも、手軽に短時間で一攫千金を狙える職業。それが退魔士なのです！」案件が一段落した美咲小隊に、意外な所から仕事の依頼が舞い込んだ。手渡されたメモリーチップ。それは音楽麻薬といわれる物だった。現代ファンタジー『A++』の続編。

『00-Configure A++』

前作A++を未読の読者様へ、簡単な背景、人物紹介をさせていただきます。

既読の方も整理の意味でこー読いただければ幸いです。

時代

2008～2009年頃の現代

舞台

京都まで新幹線で2時間の距離にある地方都市

退魔士

霊能力や超常能力で人に災いをなす霊、妖怪、魔物を退治する職。

守人

江戸時代初期、数万の犠牲者を出した振袖火事。

混乱した霊的状况を鎮めた者達、またはその末裔。

三室薫

カオル。子供の頃から霊を見る見鬼の力に優れる。

幼少の頃それが原因で奇異の対象とされ、極度の人間不信に陥る。

同じ能力を持つ天野美咲と出会い、退魔士の世界を知る事になる。

一応A++の主人公。

愛車はSDR-200。見た目は50ccと変わらない街中最強のマシン。

天野美咲

守人の末裔。長髪長身の少女。端正な顔立ちで学園でも人気が高い。

乃江というしっかり者を幼馴染に持つ為か、ちょっと天然な部分がある。料理が出来ない。

霊力を歌に乗せ放出するのが得意。戦闘時ギターを所持する為か、体術は足技メイン。

仲間を束ねる隊長にして会計係。怒ると怖い。

愛車はDRZ-400オフロード仕様。

真倉乃江

守人の系譜天野家を守護する土族の末裔。

ショートカットでさばさばした性格で考え方や行動が男っぽい。その為女生徒に人気。

その一方で料理と掃除は神レベル。あだ名は完璧超人。

沖縄古流の空手使い。拳に霊気を乗せて叩き込む。

愛車はアプリリアRS-250、ハイパワーレーサーレプリカ。

山科由佳

メガネ関西弁の女の子。情に厚い。

マニア受けする特徴も手伝って、男子生徒の人气が高い。

神道系の退魔士で、京都出身。実家はお金持ちらしい。

風の精霊グラビティを手懐け、大気の密度を瞬時にコントロールする。

宮之阪まりえ

英国籍で英日のクォーター。イギリスのハンター（退魔士）

本名「marie miyanosaka」マリーミヤノサカ。

日本国籍へ登録する際に「まりえ」としたらしい。

現代の魔法使いといわれる祖母より、後継者として育てられた。

日本語を習得中にて、たどたどしい会話しか出来ない。漢字習得

率は小学生レベル。

本国ではスキップして大学に籍を残している才媛。

愛車はマニセンマキ。魔法の筈。

山科真琴

旧姓 藤森真琴。山科由佳を姉のように慕い、由佳の母にも寵愛される。

魂喰い案件で父を亡くし天涯孤独の身だったが、山科家の養女として引き取られる。

トートタロットの絵柄を具現化する特殊能力者。

未熟ゆえ小アルカナの「剣」とペンタグラムの一部しか習得できていない。

小学生と見紛う風体だが、実は中学二年生。彼女の成長期はまだ先である。

カナタ

カオルの守り刀。藤原国助に宿る刀の精霊。

魔を抜う力に優れる。魔の瘴気、人の霊気をエネルギーにして姿を顕現させている。

甘い物でもエネルギー変換できる。和三盆が大好き。なによりカオルが大好き。

トウカ

桃源境の主。齢数千年の神木から芽吹いた桃の花の仙女。

カオルのナイフに紋様を刻み、桃源境との出入り口として度々顔を出す。

恋に臆病なカナタを影から応援？ している。

桃花行によると、桃の樹は桃源郷と俗界を区切るものとされている。

ゆえに本作では桃源”郷”と表現せず、桃源”境”と表記。

東雲、紅、珊瑚、撫子

トウカの妹達。紅は乃江に拳法を伝授中。珊瑚と撫子はカオルの妹、葵に懐いてる。

桃の花の色によって名前が付けられている。

牧野健太郎

カオルの唯一無二の友。

カオルと友達関係になったのは監視する為と告白するが、雨降って地固まる。今尚良好な関係。

身長が高くモデル体系。一見優男に見られがちだが、合気道部の猛者である。

道教の霊符と棍を使う。中国（台湾）系のクォーター。

祖母は東アジア退魔士を取り仕切る重鎮。

別所静音、綾音

通称名双子の剣道娘。父母は売れっ子の少女漫画家兼道場主。

幼い頃から剣術を学び、退魔士としてデビューした。

静やかな姉、烈火の妹と見られがちだが、激昂すると立場が逆転する。

精華女子というお嬢様学校に通う。高校三年生。

八瀬春菜

カオルとは小学生の同級生。唯一の理解者だった。

カオルが忌み嫌い捨て去りたいと願った能力を引き継ぎ、特殊能力に目覚める。

解離性同一障害。心の中に別人格ハルナが住まう。

春菜として未来を視る予知能力。ハルナとして現実を変化させる能力を宿す。

個々の能力が二律背反し、結果的に未来を不安定にさせてしまう

パラボックスを抱えている。

チェンジリング

アメリカのハンター。アイルランド系アメリカ人。

見た目は小さな子供だが、年齢を読み違えるほど蠱惑的。

妖精イリスを従え、広範囲の索敵、能力行使を得意とする。

いつも薬箱のようなものを持ち歩いている。中には……。

天野響、真倉綾乃

バカップル。

天野美咲の兄と真倉乃江の姉である。

キヨウの退魔士ランクはA++、近接格闘戦では最高峰の戦闘力を持つ。

和泉守兼定二尺二寸とそれに憑く刀精の芙蓉を従える。弱点は

綾乃。

綾乃は退魔士ランクA+。一步下がって影を踏まずとA+以上の資格取得を固辞している。

顔立ちは妹の乃江とそっくりだが、見分け方は胸のサイズ。大なら綾乃、小なら乃江となる。

年齢に過敏、弱点はキヨウ。

三室葵

カオルの妹、中学三年生。

かなり母親似で学内でも人気が高い。

ジョー東の飛び膝蹴りをマスターした格闘少女。

チェスなどのボードゲームでは世界戦を経験しており、かなりの実力者。

桃の仙女珊瑚と撫子と仲良し。

三室静

旧姓嵯峨野静。江戸の大火を鎮魂した守人の系譜。

主人公三室カオルの母。

医療用のメスを武器として扱うが、作中では語られていない。

親父

カオルの父。女癖が悪いと評判だが、カオルは波長の合う良い父
と
思
っ
て
い
る
。

楽器屋の店主。

『00-Recconfigure A++』(後書き)

BGM Lia . 鳥の詩

『01 - Melancholy』

百貨店で事足りる小さな地方都市にあって、そのショッピングモールは『街』と呼べるほど巨大だった。

休日ともなれば人が溢れ、子供連れの家族や恋人達で埋め尽くされる。

だが今は平日の午後、街を訪れる人の数はまばらだった。

学校の帰り道に閑寂の街を訪れ、私はある店を目指して歩いていた。

『Sound Wing M』

最初この店に足を運んだキツカケは、ちょっとした好奇心からだった。

カオルさんの事を知れば知るほど、もっと彼の事を知りたくなかった。

好きな食べ物は……、嫌いなものはあるのだろうか、どんな音楽を好むのか、どんな家族に囲まれて育ったのだろうか。

そして気が付くと店の前に立っていたのだ。

ストーカー紛いの行為に自己嫌悪し、中を見ずに立ち去ろうと踵を返そうとした。

だがギターの弦を切らせていた事を思い出し、背を向けたまま足を止めてしまった。

そして何食わぬ顔で買って帰ろうとしたところで、お父様と出会ってしまったのだった。

「失礼を承知ですいません。制服と高等部のリボンカラー、特徴的な容姿、それよりなによりZO-3の専用弦を手に入れている。君は天野さんじゃないだろうか？」

特徴的な容姿って所が腑に落ちなかったが、引き攣る口元を手で隠して微笑を返した。

そういえばお父様の情報を聞き出した時、カオルさんは気を利かせてこう言ってくれたっけ。

「ギター的事と特徴を親父に伝えておくよ。きっと悪いようにはしないと思うから」

約束を忘れずにしてくれた事が素直に嬉しかった。

それより何よりお父様の言葉が、迷える子羊に救いの手を差し伸べてくれたのだ。

「息子と変な所が似ているんだ。車やバイクの好み、音楽の方向性。そして女性の好みなんかは、特にね？」

お父様曰く、ど真ん中のストレート……なのだそう。聞かされた時には不覚にも赤面してしまった。

社交辞令とわかっていたが、私の背中を押してくれたのは間違いない。

それをキツカケに………といっっては何だけど、暇を見つけてここへ足を運ぶようになった。

Sound Wing M、カオルさんのお父さんが経営するお店。

広々とした売り場には所狭しと楽器が展示され、興味のない者でも覗いてみたくなる何かがある。

「うふふ、違うわね。好奇心を掻き立てるのは……」

売り場に立つ一風変わった女性スタッフ達に目を奪われるからだ

ろう。

サイレントギターを抱え、繊細な音を爪弾いているショートカットの女性。

ジェフベックを思わせる繊細な指先。気が付くと体が素直に反応してしまふ。

もう一人は長髪の女性。白い鍵盤に指を走らせるだけで、心地よい音色を奏で出す。

驚異的なのは掃除の合間、立ったままで、鼻歌交じりに二台の鍵盤を同時に扱うのだ。

目を惹くのは奏でた音色だけではなく、端正な顔立ちと抜群のスタイル。それよりなにより内なるオーラが人を魅了するのだろう。

陶醉しているスタッフを横目に見て、客の方が逆に気遣って話しかけるタイミングを計っている。相談に乗って貰っている固定のファンも多いのだろう。

その奥、レジで頬杖を付き、その音色に耳を傾けているのがカオルさんのお父様。

お母様似と聞かされていたが、こうして見ると双方のいい所を引き継いだんだなあ。

「こんにちは」

私はレジに向かい会釈をして、いつもの定位置へと歩き出した。

お父様はニコリと微笑みを返すだけ、それ以上干渉しようとしな

い。

適切な距離感がこの店の良さである。

高価な楽器に手を触れ、確かめて買う事が出来る。

乱雑になりがちな展示方法だけど、手荒に扱われている様子はない。むしろその逆、美しいまでに整然と並べられている。

この店が商品を大事に扱っているのが見て取れる。

楽器達は調律された状態で展示され、手垢一つない光沢を保って

いた。

「能力に見合った報酬を払ってるとしたら、あの二人の人件費は大変だろっな」

私はお父様の気苦労を察して苦笑し、店の奥へと足を運んだ。

私のお気に入りの場所、壁面に飾られた一本の『非売品』と書かれた無骨なギターを見つめ、胸のモヤモヤを手で押さえた。

形はごく普通のレスポール、だけどボディ素材が特殊。チタンとジュラルミンの削り出しで出来ている。

ボディとネックはボルトで止められ、見るからに硬そうなフォルム。普通に考えれば良い音など絶対出ないと言い切れる。

金属製のエレキギターならカスタムでも存在する。けれどこれはアコースティック……、セミアコなのだ。

サウンドホールが切り取られ、反響不足をピックアップユニットで増幅し補っているようだ。

薄いボディでは必然的に反響不足に陥る。それを電氣的にアシストしているのだろっ。

そう……、私の武器ウェポンに近いコンセプトで作られている。

「いつもそれを見てるよね」

いつのまにか私の背後で優しい声が発せられた。

静さんにも驚かされたけど、素人と聞かされていたお父様にまで背後を取られるとは。

余程熱中して魅入っていたのか、それとも……。

「盾……ですよね。ギターに刻まれた無数の傷が語っています。大切なものを守る、いや……守った、成し得た証。何か……憧れます」

背後の人影は私の横に並び、それを見上げ顎髭を人差し指で動かしている。

そして壁に飾られたギターに手を伸ばし、ピンにストラップを通した。

「ここに足を運んでくれる時は、いつも不安げな表情をしているよね」

「そう見えていますか。やっぱり……」

ブリッジ近くにあるツマミを回して電源を入れ、サウンドホール内で反響しあう共鳴を殺した。

ストラップを肩に掛け、確かめるように弦を爪弾いた。

チタンボディとは思えないふくよかな音色が響き渡り、その圧倒的な存在感は周りの音を押しさえ込んでしまった。

子守唄のような緩やかな旋律だったが、店内に居た客の目を釘付けにし、二人のスタッフの手を止めてしまった。

それよりなにより驚いたのは、音色に乗せて霊気が放出されていた事だった。

「ギタリストは音色に魂を乗せるんだ、命を削りながら……ね。選ばれた人ならば息をするように出来る事だけ」

「……魂を乗せる」

退魔士は霊気と引き換えに、命の一部を手放しているといわれている。

命の営みに必要な力を変換して、魔を祓うのだと。

同時に霊気のコントロールに長け、それが当たり前だと思えるのが退魔士だ。

私は本当に歌に魂を籠めていただろうか。能力に頼った歌を口にしていなかっただろうか。

「弾いてみるかい？」

ストラップを肩から外し、無造作に手渡される『盾』

私は戸惑いながらも手を伸ばし、冷たい金属の触感を指先に感じた。

両手にしっかりとギターを掴ませ、一步下がって戸惑う私を見つめている。

私はその重みをしっかりと抱き留め、緊張した指先を弦に触れさせた。

弦の震えは魂の音色。体の奥に染み込み熱くさせる。

同時に我慢しきれなくなった喉が、腹の奥から声押し出していく。

私の喉から発せられたのは、初めて口にする歌だった。

同時に胸が熱くなって涙が零れた。満足に歌うことが出来ず、出だしから喉を詰まらせた。

きつと心の奥底で何度もリフレインしていたのだろう。私の中のモヤモヤを代弁してくれる曲なのかも知れない。

そんな不甲斐ない私を支えるように、静かなピアノの音色と、もう一つのギターの個性が鳴り響いた。

『あなたと共にいたい』

そんな気持ちを籠めて歌い切った。

観客はお父さんと二人の店員さん。そして歌が終わっても私を見つめてくれるお客さん達だった。

そしてお客さん達は遠慮がちに手を打ち鳴らし、拙い歌へ最大の
賛辞を贈ってくれた。

『01・Melancholy』(後書き)

BGM Mr. Big - To Be With You
ZO - 3専用弦 GSZ - 500 > i1425
— 18 <

『02・Consultation』

放課後。

俺は乃江さんからのメールに応じ、靴を履き替え校舎前で待っていた。

乃江さんからまともなメールが来るなんて滅多に無い事だ。

いつもは「ここに何時」「了解した」「ではまた」なんて一呼吸で打てる内容ばかり。

おざなりに扱われているのかと少しへこんだりもした。

だが今回のメールは違う。文字数が多いのだ。

「相談したい事がある。だがメールでは駄目だ、会って話そう。場所と時間は」

簡潔な文章に隠された切迫感も見逃せなかった。

このメールに断りの返事を送る奴はいないと思う。俺なら地雷とわかっていても踏む。

メールの内容を再確認し携帯をしまい込んだ時、校舎の昇降口から乃江さんと美咲さんがやって来た。

軽く手を振って二人に挨拶すると、乃江さんが軽く頭を下げ、美咲さんがびっくり目で俺を見返した。

「……呼び出して済まなかった」

乃江さんと美咲さんの対比を見て、美咲さんには知らされていないなかつたのだと理解した。

美咲さんに言えない事って、よっぽどの事情だと思う。ここは乃江さんの出方を待つのが得策だろう。

俺は無言のまま二人の前に立ち、嫌な予感が渦巻く胸を押さえた。

乃江さんはチラリと横目で美咲さんを見て、言いくそくに眉を顰めた。そして一呼吸を置いて、やっと言葉を紡ぐに至った。

「カオル、折り入って話したい事があるんだ。今日……、家にお邪魔してもいいだろうか」

「ひわっ！」

ちなみに奇声を上げたのは美咲さんだ。

「ひい」と「うわっ」が合体する程驚いたという事だろう。

俺もある程度の情報を得ていなければ、同じ様にテンパッていたに違いない。

「良いですよ。大したおもてなしは出来なさそうですが」

「いつ！」

ちなみに再び奇声を上げたのも美咲さんだ。今回は解読不能だが、いい様に思われていないのは確か。

美咲さんは俺と乃江さんを交互に睨み、ほっぺたを膨らませている。

だが美咲さんの前で言うって事は、隠し事をしたくない気持ちの表れでもある。

男らしいっていうか、真っ直ぐと節目正しい竹のような性格だな。

話の内容は秘匿せざるえないが、それほどの事情を抱えていると素直に告白している訳だから……。

俺の返答を聞いて、乃江さんは表情を崩しホツとした様子。そして振り返り頭を下げ、申し訳なさそうに口を開いた。

「美咲お嬢様、今日はカオルと帰宅しようと思います。込み入った話ですので遅くなるかも知れません。よろしければ外食で済ませて

」

「わかったもん！ 一人で帰るもん！」

美咲さんは乃江さんの言葉を最後まで聞かず、不機嫌な表情のままスカートを翻し帰ってしまった。

少しテンパッているのか、幼児退行しているように思える。

対する乃江さんは、なにか言いたげな表情で美咲さんを見送り、喉元まで出掛かった言葉を飲み込んだ。

俺はそんな乃江さんの気持ちを察し、背中をポンと叩き勇気付ける事しか出来なかった。

「んで、乃江さんがそこまで覚悟を決める話の内容って何？ 触りだけでも聞かせてくれないか？」

乃江さんは俯き意気消沈したまま、ボソボソと話をしてくれた。それは俺にとっても重要な事で、とても頭の痛い話だった。俺は帰宅途中、電車に乗るまでに妹の葵にメールを入れた。

”乃江さんが遊びに来るから、音速で帰ってくるように”と。そして家にいる母に電話を入れた。

うちの母は結構メールに無頓着だ。大事なメールを見逃す事が多い。仕方なく重要な話は電話で伝えるようになっていた。

「あ、カオルだけだ。今日家に真倉乃江さんって子を連れていこうと

」

ここで電話の向こうで母が盛大に咽た。

恐らくソファーに寝転んでテレビを見つつ、冷蔵庫に冷やしてお

いた我が家のビタミン、ポソジューズを飲んでいたのだろう。

一度やった事があるが、あれで咽るとかなりキツイ。

俺は頭を掻きながら、電話先の咳が治まるのを待った。

「あー、もう。大事な話があるから、どこにも出掛けずに家にいるように！」

咳こんだ母の回復の見込みは薄く、端的に用件を伝え電話を切った。

その様子を心配そうに見つめていた乃江さんだったが、電話の内容を察したのか笑顔を作った。

電車に乗り家までの道すがら、俺は乃江さんと話し合った。

問題の解決に向けどうするべきか、最良の方法を見付たそうとした。

俺の結論は手の中にある紙袋。駅近くの店で買ったアクセサリーだった。

その結論に対し、乃江さんだけでなくカナタとトウカも賛成してくれた。

満足のいく答えが聞けたら渡す。そうでなければ永久に机の肥しにする……と。

「実際ランク的にどうだと思います？」

「体術はそこそこのレベルまで到達してるが、それだけでは凡庸」

「乃江さんのように体術を極めれば、Aになれるんだよな。俺なんてカナタとトウカがいなきゃ、とても……」

率直な気持ちを吐き出した。

カナタの刀での攻撃、トウカのナイフから発する盾がなければ…

…。

正直みんなに鍛えられて、ある程度の動きは出来るようになったけれど「ある程度」からもう一步高みに登るのが、こんなに厳しいものだとは思わなかった。

まあ例えると、フルマラソン走る事は訓練次第で可能。だがタイムを削り、より速く走るのは難しい、そんな感じか。

最初は慣れも含め、数十分、よくすると一時間速く走れる。だがある程度を超えると、一分、一秒速く走るのが大変になる。

正直今、俺は壁にぶち当たっていると実感している。

「カオルは真倉の家では中伝レベル。だが決して恥じるレベルではない」

「中伝…：ねえ。実感湧かないよ」

「たった半年で中伝レベルに到達出来る者はそういない。門下の者でも数年、数十年かかる道程だ」

それは教え方が良いからだと思う。

事切れる一歩手前まで追い込み、追い詰められ、そこからの組み手が体に染み込んでくる。

あと一発貰ったら逝けるって所で、体を癒され、また死ぬ寸前で追い詰められる。エンドレスでだ。

ドラゴンなんたらってアニメの、仙豆とカリン様の修行のようだ。格闘術も手取り足取り教わった訳ではない。貰うと致命的な拳、蹴りを体が覚えているだけだ。

当たりたくないからより良く見る。誰よりもその拳や蹴りを知る

うとする。気が付けばそれなりの体術が身についていた。

「飴と鞭っすもんね」

「最近は何もそんなに必要なくなった。鞭も十打って一つ当たるかどうか」

「それが中伝レベルって事ですね。なんとなく立ち位置がわかった様な気がする」

乃江さんの攻撃を完全に見切れる事は、真倉流の手の内を知り尽くしたという事。

そしてそこから一步高みに登れば……。

けれど乃江さん自身も成長を続けている訳で、その努力を上回らなければならぬ……と。

「カオル……、あれ」

考え込んで立ち尽くした俺のシャツを引っ張り、乃江さんが俺の家を指差した。

指の先には家の前でうろつくと、母が落ち着かない様子で行ったり来たりしていた。

静なんて名前なのに本性は真逆の性格をしている。

小うるさく、料理は下手、家事も苦手、唯一の褒め所は、若々しく（自称）美人という所だけ。

まあ父兄参観の時は、そんな母を誇らしく感じたけれど。

実の所、引退したけど凄腕の退魔士でもある。

ブランクが長く、たまに息切れするけれど、腕の方は錆付いていない。俺の手に負えるレベルでないは確かだ。

「母さん、なにやってんの？ 鍵を失くして家に入れないのか？」

「アホ！ 愚息が家に女の子連れてくるいうから、なんかそれなりの、ホレ、見栄えのええ夕食でもと思ったんや。せやけど家にいれて言うし、出るに出れんかったんや」

なるほどな。普段買い物も飯作るのも億劫、有り合わせで作っている皺寄せが来たか。

昨日時点で冷蔵庫にはポソジュースと葵の焼きプリンしかなかった。後はマーガリンと味噌、ポン酢の類。

電話の後冷蔵庫を開けて愕然とし、野菜室を開け萎びた人参を見て絶望したに違いない。

俺は恥ずかしい想像を止め、横に立つ乃江さんを紹介しようとした。

乃江さんもそれに気付いたのか、阿吽の呼吸で一步前に出て頭を下げた。

「母さん、真倉乃」

「あっ、冷やししろこ 白玉増量の子やないの！ 駆けつけ三杯食うた真倉の姫さんやん！」

頭を下げつつあった乃江さんが盛大にずっこけた。

真倉の姫さんって……、紹介するまでもなかったって事か。

乃江さんは慌てて手をじたばたを動かし、顔を真っ赤にして困惑している。

「三杯目をそつと出す。あの時の顔 もごっ」

神速の動きを見せ、乃江さんは母さんの口を塞いだ。

左手首を背後で捻り上げ、暴れる母さんを引き摺って歩き出した。

「カオル、……いや、カオルさん。お母様と買い物に行ってください。その間に家の」

はいはい。掃除しとけって事ですね。

ついでに見つかりとヤバそうなものを押入れに隠しておきます。気を利かせてくれた乃江さんに感謝しつつ、ズルズルと遠ざかって行く二人を見送った。

「話は買い物ついでにするって事か。あの二人結構……仲が良いのか？」

俺の知らぬ所で暗躍する母を想像し、ありえぬ話では無いと溜息を吐いた。

俺は乃江さんのくれた時間を無駄にする訳にいかず、足早に着替えを済ました。

えっと、ベッドの下にあるアレを押入れに入れて、机の上、ベッドの乱れを整えた。

「本良し！ 机の上良し！ ベッド良し！」

たまたま数日前に掃除をしていたのが功を奏した。

カナタに説教を食らって片付けたのだ。俺は頭の上に座るカナタに心から感謝をした。

さてと……リビングのあられもない状況を何とかするか。

と、その時家の表で、タイヤの鳴く音が響き渡った。

後輪にのみブレーキをかけて、直角に向きを変える高等技術^{ドフテク}。

中学三年生にして自転車通学を始めた変わり者、妹の葵が帰ってきたようだ。

「おわっ！」

後輪を滑らせすぎたか、修行不足だ。
にしても、ちゃんと言いつけ通りに音速で帰ってきたか。感心感
心。

まもなくして玄関の扉が勢い良く開かれ、靴の転げる音が響いた。
大股でダッシュして部屋の前まで来た葵。勢い良く部屋の扉を…
…。

と思っただが、予想に反してシンと静まり返った。いや、むしろ息
を殺して中を窺っている気がする。

「お兄ちゃん……」

「どうした？」

「まだ開けても大丈夫？」

どんな日本語なんだとツツコミを入れたくなった。
葵の奴……なにか勘違いしている気がするが、気を利かせるなら
ブレーキングドリフトの時からやってくれ。手遅れだ。

「いや、駄目だ。俺は今猛烈に忙しい」

「嘘つき」

ガチャリと扉が開き、葵が顔を覗かせた。
素早く部屋を見回して首を傾げ、リビングの方へ走り出した。
そしてその勢いで取って返し、もう一度顔を覗かせた。

「乃江さんは？」

「母さんと買い物に行ったよ」

俺の返答に満足いかないのか、しかめっ面になり眉間に手を当てた。

そして芸掛かった溜息を吐き、可愛いそうな目を俺に向けた。

「あのねえ、お兄ちゃん。そういう時は二人で買い物、食材を手にとってキャツキヤ、ウフウフするもんでしょ？」

「アホか気持ち悪い。誰が大根でキャツキヤするか」

再びかわいそうな目で俺を見つめる葵。

俺は葵の足元から頭の先までじっくりと見つめ、手まねいて部屋に入れた。

葵は俺の指差す先、机の椅子に腰掛けて、なんだと言わんばかりの目で見つめ返してくる。

黙って葵の前に立ち、心の目を開いて体を取り巻く霊気を見つめた。

黒っぽい青、蒼の霊気を身に纏う葵。彼女の属性は水と木。かなり水寄りに位置している。

癒しと成長、物の始まりと芽生え、癒しの属性だ。

「何……、どうしたの？ お兄ちゃん、ちょっと怖いよ……」

無言で見つめる俺に、何時もには無い雰囲気を感じ取ったのだろう。こつこつとした察知の速さも葵のいい所だ。

ボードゲームに無類の強さを示し、オセロや将棋、チェスの類では勝てた例が無い。

靈気の強さ、体術もそこそこ、勘の良さと戦略性。客観的に見ても退魔士向きだが。

「お前、怪我してるだろ。右腕と左足……。靈気の量が尋常じゃなく薄いぞ」

「……………」

「経験があるが、骨折した後の感じだな」

「……………うん、折れた。治したけどまだ痛い」

「最近自転車通学にしたのも、隠れて修行をする為か？」

「……………うん」

「そうか」

俺は葵の頭をくしゃくしゃと撫で、丸くなった背中を思いつきり叩いた。

痛みの余り涙目になりキツと見返してきたが、何も言わずにもう一度俯いた。

「お前の気持ちは良くわかる。何の取り得も無いお前が、唯一見つけた才能を試したいって思う気持ち」

「誰が取り得無しやねん！」

「顔もアレだし、性格はガサツだし、勉強も平均点路線、おまけに胸も無いし」

「これでも学校では、割とカワイイって評判なんだよ！ 勉強と胸は言い返せ無いけど」

「割と？」

「うん、割と……」

俺はいつもの調子に戻ってきた葵を見つめ、ホッと胸を撫で下ろした。

そしてテンションの上がって来た葵に向かい、ある使命を言い渡した。

「よし、戦闘美少女葵！ お前に任務を言い渡す！」

「はっ！ 何でございましょうか、指令」

「リビングを掃除しとけ」

「……不可能です」

「乃江さんが来るんだぞ。恥ずかしくないのか？」

「恥ずかしいです。指令」

「では行け。大きな物は親父の寝室にでも放り込んでおけ」

「了解！」

なんだかしおらしくいう事を聞く。

骨折した事を知られ弱みを握られたと思ったか……。俺が見てわかるもの、母が見てわからぬ筈が無いというのに。
俺は去り行く葵の背中を見つめ、次なる掃除ポイントを模索した。

『02・Consultation』（後書き）

BGM ランカ・リー 星間飛行

三室家のビタミン ポソジューズ > i 1 4 3 6 — 1 8 <

『03・Bracelet』

葵と協力して家の掃除に励み、リビングは居住空間としての役割を取り戻した。

それもこれも葵と、トルネード掃除機タイソン君のおかげだ。

俺はといえば、怪我している葵には任せられない重い物を持ち上げ、親父の部屋へ放り込む程度しか働いていない。

「うわあ、うちってこんなに広がったっけ」

タイソン君を納戸に片付け終えた葵が、部屋を見回して声を上げた。

それもその筈、うちは元々二世帯共有型として建てられた家だ。

それ故に部屋数が普通より多く、共有部分のキッチンとリビングが広い。

実際俺には、小さい頃婆ちゃん達と暮らした記憶が残ってる。

なんでまた婆ちゃん達が元の家に戻ったかというと、本人達の言い分はこうだ。

「ここにおつたら静しずかの為にならん」

掃除、洗濯、料理に育児。全てがお婆ちゃん任せ。

娘として脛を齧られるのは百歩譲ってよしとする、けれど母として失格だと烙印を押されたのだ。

かくして実家に戻った祖父、祖母達。同時に我が家の生活は危機的状况に陥ったそうだ。

ぐうたら母はそこで身の危険を感じ、一念発起して料理を覚え今に至る……と。

生活サイクルの違う母と父、それぞれが別々の寝室を陣取り、俺

と葵は一人部屋を与えられた。

それでもまだ客間ともう一部屋余らせてるのだから、四大家族には贅沢な造りだ。

「さっ、ポーっとしてないで。お兄ちゃんはお風呂と玄関先、私はトイレと台所を掃除するから！」

真新しい便座カバーとマットを抱きかかえ、右へ左へと動き回る葵。

泊まりにきた訳じゃない、風呂はいいだろうと思ったが、言われるとそう……可能性はゼロではない。本日の議題はそれほどまでに難しいのだ。

「玄関、風呂の順で攻めるか」

玄関先に向かい乱雑に並べられた靴を揃え、玄関脇に新しいスリッパを用意した。

使用感漂う玄関マットを洗濯済みの物と交換した所で時間切れ。玄関の扉が開かれ、母さんと乃江さんが帰ってきた。

「おっ、カオル、無駄なあがきをしとるね。いつもこうやと嬉しいんやけど」

「お……、お邪魔します」

両手一杯に買い物袋を引っ下げた母と乃江さん。

他所の家に招かれ、乃江さんの表情は若干硬いようだ。母の後ろに控え戸惑い立ち尽くしている。

逆に母はそんな乃江さんに構いもせず、掃除された家を満足そうに見つめている。

所在無い乃江さんに申し訳ない気持ち我先に立ち、新しいスリッパを揃えお出迎えをした。

「遠慮せんと上がってや〜」

「その根拠の無い自信はどこから出るんだ？」

乃江さんを招き入れ、綺麗になったリビングでお茶を用意する葵を見つめた。

母は無言で俺達を指差し、最初に話を切り出す順を目配せした。

俺は母と乃江さんを交互に見つめ、仕方なく自分を指差して二人を納得させた。

そして本日の主役である葵が登場した。

「葵、ここに座ってくれ」

床に正座でもさせようかと思ったが、足を痛めていると知ってはそれも出来ない。

一人掛けのソファを指差して、極力平静を装った。

葵はキョトンとした表情で、人数分の湯呑みをテーブルに置き、ソファーに腰掛け肩を窄めて丸くなった。

勘の良い奴……。これから何が起るのか、なんとなく察知している。

「俺に怪我を看破されるようでは、この先母さんを謀り続けられるとは思えん。正直に言ってしまう。退魔士を志して、試験の事を乃江さんに相談しているとな」

「えっ……、あっ、う、うん」

「退魔士試験には制約があって、一般からの受験者は、他の退魔士の推薦が必要になるのだ」

「え〜っ、そうなの〜」

「その役割、私が……とも思ったが、ご両親に内密にするのはいただけない。それでカオル……さんに相談したのだ」

「乃江ちゃん……カオルでええ。普段通りにしとり。無理せんでええで」

三者三様に口を開き、葵の返答を待とうとした。

けれどこれでは蛇に睨まれた蛙、萎縮してしまつて口を開く事もままならないだろう。

ここは上手く話をさせてやる必要があるらうだ。

「才能を開花させてから、葵は変わったと思う。珊瑚と撫子のお陰でもあるだろうが、自分に自信が持てる様になつたのだろう」

「うん……、そうかな……」

「それで俺は考えた。試験の推薦が必要なら、俺がなつてやること思う」

「お兄ちゃん！ 本当？」

「ただし、推薦人である以上、納得できる実力を示せたららの話だ。母さんや乃江さんに頼むより、俺ならハードルは低いと思う、好条件だろ？」

名前を出させて貰ったけど、この役目を乃江さんに任せる訳には
いかない。本人は否定するだろうが、これ以上迷惑は掛けられない。
それに母さんの目利きだと、俺すら認めて貰えない可能性がある
し、苦慮した上での折衷案だ。

ただし受験を認める以上の譲歩はしない、それが俺の考えだ。
葵もその譲歩案を理解したようだ。何もいわずに俺の目を見つめ
返している。

「もう一つ！ 大切な条件がある」

「えっ、まだあるの？」

「キヨウさんに教えを請うのは無し、……というか迷惑掛けんな」

「迷惑掛けてないもん、誤解だもん」

葵はほっぺたを膨らませ、膝を抱え背中を丸めて拗ねた。

友達の家にお泊りしてくる、そう嘘をついて二週続けて外泊した。
引つ込み思案の葵には珍しいと思っていたが、京都にいるキヨウ
さんの所に行っていたらしい。

聖人君子のキヨウさんだから、間違いは200パーセント無い。
それでも男一人のマンションに泊まり込むって不味いだろう。

葵の腕と脚、恐らくキヨウさんとの修行中に怪我したのだと思う。
キヨウさんは男、女の区別はつけない。どれだけの実力があるか
で人を判別する。

腕と脚を折られる程、高いレベルで教えてくれていたという事だ。

「キヨウさんはなんて言っていた？」

「志は高くあれ、目指すなら頂点を。試験など必ず受かり、その先

を見つめよって」

うはっ、キョウさんらしい厳しい言葉だ。

自分で実力に天井を設けるくらいなら、退魔士になっても先は無
い。

目指すならランクA++、師を越えるくらいの心構えで挑めつて
事だな。

「だが実際には多大な迷惑を掛けた。葵が泊り込んだ夜、綾乃さん
とかち合つて修羅場になつたらしいじゃないか？」

乃江さんの相談事つてこの事だ。美咲さんに言えなかったのは、
兄のキョウウさんが絡んでいるから……。

姉の綾乃さんは俺達の学校に先生として潜入している。前回の魂
喰い案件の後見人として、無理やり先生として連れて来られたのだ。
実際は教員免許を所持しているかすら怪しい。

けれど事件が解決した今、彼女がここに残る理由は無い訳だが、
一向に戻る気配は無いそうだ。

乃江さんは葵との修羅場が原因で不仲になり、戻るに戻れないの
ではないかと心配しているのだ。

「違うもん。一人でも寂しくないうって意地を張るから、彼女さんの
代わりに見るだけだけど、どうぞ……つて」

「どうぞつて、何を見せた」

「制服にエプロン、チラつて……。違うもん、ちゃんとスパッツ履
いてたもん」

乃江さんが盛大に茶を噴いた。

母はテーブルに額を打ちつけ、俺は目の前が真っ暗になった。そんな状況で綾乃さんがマンションに帰ってきた訳だ。

葵の制服エプロンでスカートをヒラリ、キョウさんは顔を真っ赤にして狼狽、それを見て石化する綾乃さん……、怖、怖すぎる。

綾乃さんって年齢の事を異常に気にするからなあ……。葵の制服姿を見て、何か思う所があったのかも知れない。

「怖いもの見たさで聞くが、その後どうなった？」

「キョウ様のバカあって、泣きながら出て行った。慌ててキョウちゃんやんが追いかけたけど、駐車場の辺りで言い合いになって、最終的に」

「キョウさんは鉄拳制裁、綾乃さんは車で走り去った……と？」

「そう、正解」

恐ろしい位に安易な展開だ。

俺は申し訳ない気持ちで一杯になり、乃江さんに頭を下げた。気を取り直して葵に向き直り、隠し持っていた紙袋を突き出した。

「その代わりといっては何だが、秘密兵器をやるっ」

「わっ、なに？」

葵は子犬のように反応し、紙袋を奪い取って中を見た。

紙袋から包装された小箱を取り出し、はやる気持ちを抑えつつ中を見た。

「なにこれ……」

不思議そうに見つめた物は、銀製のブレスレットだった。
俺が駅前の宝飾店で、急ぎ買ったものだ。

「ブレスレット？ 可愛くないし継ぎ目が無いじゃないの……コレ」

店の店主が曲げ加工ではなく、削り出しでブレスレットを作ろうとした物らしい。

なんの飾りも無い、無垢の輪っか。店主に無理を言って譲ってもらった。

逆に飾りがあれば支障が出るからな。

「珊瑚、撫子出て来い。仕事だ」

「あわわ……」

葵の薄い胸元付近から、撫子と遅れて珊瑚が舌打ちしながら顔を出した。

話がややこしくなって、出るに出不れなかったのだろう。同時にふくよかに見えた葵の胸が、ぺったりと萎れてへこんだ。

「珊瑚、撫子よ。カオルのナイフや乃江のペンダントの様に、桃源境の紋様を刻んでやるがよい」

俺の頭の上でトウカの声が響いた。

珊瑚と撫子はお互いに見つめ合い、手と手を合わせて小躍りした。それもその筈、葵に会うには俺のナイフからこちらの世界に出なくてはならない。俺も迷惑だが、彼女らも不便だと不満げに言っていた。

だがトウカの許可が無くては、紋様を刻むことすら出来ないのだ。

俺はナイフを取り出し、切っ先を掴んで葵に手渡した。

「紋様は使用者の血で描くんだ。指先を傷つけて、珊瑚達にその傷口を向ける」

葵は俺の言葉に頷いて、受け取ったナイフで指先を突いた。

痛み之余り指を摘んで顔を顰める葵。その指先からポトリと血が滴った。

テーブルに落ちた血の一滴を珊瑚と撫子が見つめ、小さな指先で掬い取ってブレスレットに文字を刻んだ。

流暢に崩した意味不明の文字、そして締め括りは桃の花びらを二つ書いて丸で囲んだ。

念の籠もった紋様は、土台を侵食するように深く刻まれた。まるでレリーフのように。

「わっ、いきなりおしゃれなブレスレットになった。珊瑚、撫子ったら凄い」

葵はブレスレットごと二人を両手で掬い、顔の高さに持ち上げて頬擦りした。

そして再びブレスレットを見つめ、何かに気が付いたように眉を顰めた。

「お兄ちゃん……、でもこれ腕に通せないよ。継ぎ目が無いもん」

乃江さんは困惑する葵の手を取って、やさしく微笑んだ。

そして可能な限り、分かり易く腕輪を虚ろにした。

桃源境のゲートを開きつつ、次元移動が完了するまでにキャンセルする技……、紅霞。

俺も使いこなせるが、乃江さんほどのキレはない。技の開発者と

伝授された者の差か、才能か……、いや努力の結晶だろう。

そして虚ろになった腕輪を手首にくぐらせ、手を離して実体化させた。

「これはこうやって取り付けるように考えた。葵がこの技をマスターせねば、一生取り外す事が出来ない」

「一生？」

俺はテーブルに置かれたナイフの血を拭い、その白刃を葵に見せた。

乃江さんも胸元からペンダントを取り出して、胸元で軽く揺らした。

「トウカ達の紋様は、物に役割を持たせる。俺のナイフや乃江さんのペンダントは、本来の役割と次元を開く門として、二つの役割を持った訳だ」

「なにそれ、わかりにくいよ」

「ナイフならば『折れ』、『刃毀れ』するかも知れないが、『門』は折れも刃毀れもしない」

「私のペンダントも同じだ。どんなに力を籠めても壊す事は出来ない」

それに気が付いたのは最近の事だ。

どんなに酷使しても刃毀れ一つしないナイフを不思議に思い、トウカに問い質したらそう言って教えてくれた。

言葉遊びのようなものだが、力のある言葉には強制力が働くのだ

そつだ。

「それって……本当なのよね？」

葵は確かめるように腕輪を掴み、目一杯の力を籠めた。

柔らかい銀で出来ているにも拘らず、腕輪はその力に応じようとし
ない。

二度三度と試して、やっとこさ本当に外せないと理解したようだ。

「良かったな、珊瑚、撫子。これからは通いたい放題だぞ」

「あい！ カオル、ありがとう」

「今まで世話になったわね……、ぐすん」

感激する撫子と、苦労を思い起こし涙する珊瑚。俺も不便に思っ
ていた……、マジで助かるよ。

俺と母は目と目を合わせ苦笑し、乃江さんは桃源境への行き方を
伝授し始めた。

だがゲートを開くのは感覚的なものだから、口で言っても分かり
難いんだけどね。

「俺からの餞別だ。一回しかやらないから、見逃すなよ」

俺は葵の手を掴み、手を介して腕輪に念を送り込んだ。

俺の靈氣に顔を顰めた葵だったが、その目は腕輪を見つめ、体の
中で起こる感覚を掴もうと必死になっている。

目の前に広がる白い光、俺はこれ以上無いというタイミングで手
を離した。

葵の手からすり抜けた腕輪が、金属音を鳴り響かせてフローリン

グの床を転げた。

俺はその腕輪を屈んで掴み、サッと葵の腕に通した。

「あつ、なぐつ、手品師みたいじゃないの!」

顔を真っ赤にした葵は、もどかしげに手首を押さえた。

だが腕輪に変化は訪れなかった。

「さて、意外と早う片付いたなあ。夕食の支度にしようか」

「お手伝いいたします」

母を追うように乃江さんが立ち上がった。

二人がキツチンに消えたのを見計らい、俺は葵に耳打ちをした。

「京都のヒマワリを思い出して、腕輪だけに靈気を注ぎ込むんだ。葵なら今日中に出来るはずだ」

丸まって腕を掴んでいる葵だったが、俺を見上げて微笑みを返した。

一度、二度と桃源境に飛べば、桃源境を思い浮かべるだけで飛べるようになる。

「極めれば身動きせず回避できるよ。回避不能の攻撃をすり抜け、防御を越えて蹴りを入れることが出来る」

「そ……、それって凄くない?」

「タイミングが重要だけどな。それもこれから教えてやるよ」

「うん！ お兄ちゃん大好き！」

葵の見せた笑顔が眩しかった。

子供の頃、俺を追いかけてきた、無邪気な頃の笑顔だ。

疎ましく思つて邪険に扱つても、泣きべそ搔いて俺のシャツ離さなかつた、あの頃の……。

今も葵は俺を追いかけているのかもしれない。いくつになつても俺の背を見つめ、憎まれ口を叩きながらも世話を焼いてくれる。

「わっ、今出来たかも！ ほら！」

「気のせいだ。全然靈気が籠もつてない」

今度の第一歩はとても険しい。

葵には甘くなりがちだが、威厳を持つて接しなくてはならない。彼女はこれから、そんな世界に身を置くのだから。

『03・Bracelet』 (後書き)

BGM jefferson starship - sara
タイソン君 > i1444 | 18 <

水の音と包丁でまな板を叩く音。談笑しながら楽しげなキッチン
の二人。

ソファーに座りほのぼのとした気持ちで見つめながら、目の前の
愚妹を見つめ直しハタと気が付いた。

「葵、乃江さん任せにしないで、手伝ったらどうだ」

葵は怪訝そうな表情を俺に向け、眉を顰めた。

そして芸掛かった溜息を吐き、人差し指を立てて怒りを抑えた声
を上げた。

「楽しそうなのに邪魔しちゃダメだよ。鈍いにも程があるよ……お
兄ちゃん」

「えっ、そうなのか。無理してないのかな……、乃江さん」

「やっぱり鈍感」

葵はブレスレットに靈気を籠めるのを止め、だらしなく脚を伸ば
して仰け反った。

そういえば桃源境へ行く為には、かなりの靈力を必要とする。

俺も最初は一往復しただけで疲れ果てたっけ。

今では呼吸をするように門を開けられるが、これは成長と考えて
もいいかもしれない。

そんな事を考えていたら、グツタリと天を仰いでいた葵が、何か
を思い出したように跳ね起きた。

急に元気になったと感心していたら、自分の部屋に駆け込み取っ

て返してきた。

テーブルの上にノートを広げて、シャープペンシルの芯をノックした。

「ねえ、退魔士の事教えて」

なるほどな。ランク試験のパンフレットには、試験の概要しか書かれていない。

いつどこで実施されるか、申請に必要な願書と送付先、受験するランクだけだもんな。

万が一、外部に流出するような事があっても……、そういう配慮からだろう。

俺も美咲さん達がいなければ困惑していただろうし、その気持ち分からんでも無い。

「退魔士のランクは、能力の発露を認められた者、ある程度の心得がある者なら、受講のみでランクFを取得できる」

「ふむ、メモメモ。受講してランクF、退魔士の端くれとなって、退魔士の情報を得る事が出来る立場で、試験をつけるのが王道よね」

真琴のとった行動がまさに王道だな。

退魔士として連絡を取り合う事が出来るし、省庁から手に入れた端末で格上に連絡を取り教えを請う。

一見遠回りに見えるが、これが上に行く最短ルートだと思う。

「試験以外に、実際に魔物を討伐した実績でも申請出来る。例えば討伐対象がランクA、自分がその退魔に見合わないランクだとしても。その場合ランクAの監督下で討伐を行わなくてはならないけどな」

「身の丈にあつた討伐を。そういう事よね」

ふむ……話が早い。

ある程度は乃江さんから情報を得ているのだろう。

「ランクにはマイナーランクがあつて、Aの中でもマイナスを－、二つ付けてA－、A－－、逆にプラスを付けるとA＋、A＋＋となる。無印のAとあわせて五段階になっている」

「お兄ちゃんはA－－、乃江さんがA－だよね。マイナーランクの差つて、物凄く実力差があるんだね」

「だな、免許皆伝と中伝くらいの差か」

これも後付けでランク付けしてきた皺寄せか。

下位ランクの間口を広げる為とも言われているが、違和感はあるかない。

弟子の俺と師匠にあたる乃江さん、美咲さん、キヨウさんが同じAランクって所に歪みを感じるし。

まあ、今後適切な格付けに変更されるといわれているけれど、どうなる事やら。

「あつ、あと物凄く気になる事があるの」

葵はスラスラとノートに要点を転記し、足りなくなった芯を下唇でノックして押し出した。

俺は葵の疑問に耳を傾けた。

「討伐対象は省庁から配布された端末で見る事が出来る、それは分

かるのよ。けどね……ちゃんと討伐したかなんて、省庁の人達には分からないと思わない？」

なるほど、俺も疑問に思った事だ。

俺の場合こんな疑問を気軽に聞けるけど、葵には力になってくれる人が少ない。

こういった疑問にはちゃんと答えてやる必要があるな。

「退魔士を司る省庁には、専門の調査部隊がいる。魔物はその地に残留瘴気を残すから、ある程度日数が経過しても、調べる事が出来る」

「ほえ……、メン・イン・ブラックみたいな人達なのかな」

「黒服かどうかは知らんが……。それとややこしい事例には、それ専門の退魔士がいるらしい」

「ややこしい？」

「退魔士同士での取り合い。部隊内でも誰の権利だとか。金が絡むと人は変わるからな」

葵はノートに走らせたシャープペンシルをピタリと止め、悲しげな表情を俺に向けた。

「仲間で争い合うなんて悲しいね。苦楽を共にするのが仲間なのに……」

「そうだな。俺達には優秀な会計役がいて、キッチリと分配するから問題ないけど、退魔士達も命懸けだからね。仲間以外にも家族や

恋人、守る人がいる訳だから」

「ふむ、納得いかない」

「じゃあ、もし葵がそういう時に遭遇したら、お前の取り分はいらないと言えればいい」

「それも納得いかない」

「ま、そういう時に専門の退魔士が調査をする。残留瘴気ではなく特別な方法で、その案件を調査するんだ」

葵は感心した目を俺に向けている。

実際俺はその人と接触している。未来を見定める力を持つ八瀬春菜。彼女がその一人だ。

春菜の仲間には過去を見定める力を持つものがいて、二人でそういった案件を処理しているらしい。

通称『時の女神』

そう言ったら春菜は顔を真っ赤にして照れていたっけ。

春菜は解決困難な案件のオプザーバー役を、過去視を持つ能力者には判定不能の事後処理を任されている。

「その人達は省庁の懐刀って言われてるらしい。どちらも鉄火場にしか顔を出さない。ご厄介にならない方がいいぞ」

「うん、仲良くやりたいもんね」

ノートに齧り付いて、先ほどまでのメモを纏める葵。

俺は必死に筆を走らせる葵に苦笑し、少し冷えたお茶で喉を潤した。

丁度一息ついたタイミングで、テーブルに置いた俺の携帯が着信を知らせた。

メールではない、独特のバイブレーション。

俺は液晶表示された名前を確認し、携帯を耳に当てた。

「お、やっと出てくれた。カオル、今日は早く帰るからって、静さんに伝えてくれないか？」

電話の相手は親父だった。

なんで母の携帯に電話を入れないのかと疑問に思ったが、母が座っていたソファアに転がる携帯を見て、なるほどと理解した。

「えらく早い帰宅じゃないか。店は20時までだろ？」

「店は雫君達しずくに任せてあるから」

雫しずくってのは西大路雫にしちみちしずくさんって、親父の店のスタッフの一人だ。

日本人形のような長い髪と、顔で選んだのかよってくらいの美人だ。

一時期、親父の浮気相手じゃなかったって勘ぐられ、家で揉めた事がある。

実際は穏やかなのんびり屋で、雫囲気は宮之阪さんに似ている気がする。

「今日お客さんが来てるんだ。騒ぎは無しで頼むよ」

「そっぴや俺も一人、客人を連れて行こうと思うんだけど」

「死にたいのか？ 自殺願望？」

「なんで俺が客人といえば、女になるんだ？」

「女だろ？」

「まあな。だが、もめる様な事にはならんよ。商談の相手だからな」

ちっ、乃江さんが家に来てるつてのに、のんびり商売の接待かよ。我が家の大黒柱の言う事だし、脛かじって生きてきた俺には何も文句は言えん。

俺は手早く電話を切り、頭を抱え溜息を吐いた。

数十分後に来るであろう客人が、母を神経を逆撫でする美人でない事を祈るしかない。

テーブルの上には我が家自慢の強火力ホットプレート。波板が立っついて鉄板焼きの雰囲気味わえる逸品だ。

大皿に盛られたチシャ菜と温野菜、そして肉、肉、肉。今日は焼肉のようだ。

そして時間を見計らったかのように帰ってきた親父が、客人を食卓に招き入れた。

石化する乃江さんと俺。

そんな二人を別世界に、機嫌良くビールを親父に注ぐ母と、そして愛妻の心付けに感動し涙する親父。

腕まくりして肉を焼き始める葵。

客人はそんな異空間をもともせず、ペコリと頭を下げ自己紹介を始めた。

長い髪が顔を上げた瞬間に揺れた。

「ミーシャ＝アマーノ＝アレクサンドルです」

「いきなり偽名！　どこの国の人だよ、美咲さん」

親父が連れてきた客人は天野美咲さんだった。

美咲さんは俺の即ツツコミに舌打ちし、苦々しい表情を向けた。

「乃江が外食しろって命令するから、……外食」

「命令なんて……、そんな」

家以外で食べる事を行為を外食というのなら、間違いなく外食だ。けどホットプレートで焼肉なんて、かんぜんなおうちご飯じゃないか。それもかなりお手軽な。

剣呑とした表情を乃江さんに向ける美咲さんに、乃江さんはいつも通りに接しようとする。

「お嬢様、焼肉のタレにはコチュジャンを入れましょうか？」

「お嬢様、キムチサラダを取り分けましょうか？」

甲斐甲斐しく世話を焼いてくれる乃江さんに対し、美咲さんは返事を返そうとせず無言のままだった。

俺はそんな二人を見て、深い溜息を吐いた。

「あのね、美咲さん。今日乃江さんがうちに来たのは」

隣に座る葵の頭を持ち、テーブルに押し付けて二人で頭を下げた。ことの顛末を聞くにつれ、美咲さんの表情が微笑を帯びてくる。

そして最後の言葉を吐ききった時、美咲さんは元気良く子皿を突き出した。

「乃江、キムチサラダ頂戴っ！」

聞けば幼馴染の乃江さんに隠し事をされたのが、相当ショックだったらしい。

外食しようとショッピングモールに足を運び、親父の店に顔を出し、意気投合して家に連れてこられたらしい。

乃江さんが竹のような性格なら、美咲さんの性格はなんだろうか。喜び、悲しみ、怒り、内に秘める。分かりやすいけど分かりにくい……。子供のような純粹さを感じる。

乃江さんと美咲さんを横目で見て、母は俺に肘打ちをいれた。

何が言いたいのか察する事は出来なかったけど、悪い評価ではない感じがする。

「お父様、乃江は……どうです？」

美咲さんは思い立ったように耳打ちし、おもむろにバットを振る素振りをした。

内容丸聞こえて事は、隠すほどの事でも無いのだろうか……。一体何を言っているのだろう。

親父は乃江さんをジッと見つめ、バットを振るうポーズを決めた。

「やや内角高め。打ちごろに見えて……つい手が出てしまう。結果内野ゴロのゲッツー。良い配球だな」

なんのこつちや。

美咲さんは満面の笑みを浮かべて、親父の背中をバンバンと叩く。俺と乃江さんはキョトンとした表情で、そんな二人を見つめるし

か出来なかった。

俺達は夕食を終え、ソファーに座り温かいお茶で人心地ついた。食事の後片付けは葵が率先し、キッチンで鼻歌交じりに洗い物をしている。

親父は美咲さんに目配せをして席を立ち、寢室の扉を開いて慌てふためいている。

同時にダンボールの崩れる音が鳴り響き、俺は苦笑しながら目を逸らした。

そして数分後に戻ってきた親父の手には、ギターケースが握られていた。

「今日の本題、商談っていったる？」

親父は俺に目配せをして、そのギターケースを美咲さんに手渡した。

美咲さんはそれを大事そうに受け取り、両手を回して抱擁した。

「美咲さん、それって？」

「お父様のカスタムメイド。金属製のエレアコなの」

そう言うとケースのジップを引き下げて、ネックとボディが露にした。

アルミ……、いや違うな。この独特の光沢は……。

「チタン？ チタンパーツを使うと音が良くなるらしいけど、これ

ってまともな音出るのか？」

チタン無垢のボディに、同じくネックもチタン。ボディとネックの結合部にはゴツイボルトが用いられ、共鳴口は掘り込まれているが、反響不足はピエゾユニットとアンプで補っている。

「バッテリー仕様、アンププラグ状態で稼動三十分」

「三十分も！」

美咲さんは感動して声を荒げた。

俺と乃江さんは目と目を合わせ、恐らく同じ事を思った。三十分しか……と。

喜々とする美咲さんに、親父は一枚の紙を手渡した。納品書、そう書かれた紙には金額が記載されていなかった。

「値段は自分で決めてくれればいいよ。以後の付き合いはその値段を見て決めるから」

「親父！ それじゃあ脅迫」

俺の言葉は美咲さんの手によって遮られた。

美咲さんはもう一度ギターを見つめ、その紙にペンを走らせた。壱千弐百萬也。そう書き記して二つ折りにして鞆に収めた。

親父は満足げに美咲さんの毅然とした態度を見つめ、もう一つ部屋から持ってきた茶封筒を手渡した。

「良い値段を付けてくれたから、サービス」

紐で封印された古臭い茶封筒。

美咲さんは紐を八の字に緩め、中を見て嘆息した。

黄ばんだ大学ノートが三冊。手にとって中を開いて見ると、手書きで書かれたギターのタブ譜だった。

「人の歌は借り物の感情だ。その楽譜を見て自分の歌を作ってみてはいかがだろうか？ それはきっと君の力になると思うよ」

俺は親父の含みを帯びた言葉を聞き、ハツとして母を見つめた。母は苦笑して俺を見つめ返し、掌を広げて天を仰いだ。

「そりゃそうや。うち隠し事嫌いやもん。付き合う前に退魔士の事言つたし、所帯持つ覚悟出来とつたしな」

親父が退魔士の世界の事を知っていた。俺にとってそれは衝撃的な事実だった。

目を凝らして見ても、人並みの靈気しか感じる事が出来ない親父。そんな親父がこんなギターを作った。

「お父さんの作る歌には、特殊な技法がなされとる。歌うと靈気が増幅されるんや。うちのお婆ちゃん直伝や」

「しごかれたからね。お婆ちゃんは厳しかった」

過去を振り返るように大笑いした。

俺はそんな親父の笑顔が、とてつもなく頼もしく映った。

親父と俺は、趣味思考が良く似ている。バイクの好み、食べ物の好き嫌い……。

好きな女性が出来たとして、その女性が危険な職を営んでいると知ったら、俺も同じ事をするだろう。

「そのノートにはそのあたりのノウハウが書かれている。嵯峨野家の古の術、技法について」

美咲さんは驚いて顔を上げた。

それもその筈、お婆ちゃんは嵯峨野家の直系にあたる。

そして、その直伝のノウハウを手渡す……、その価値に気が付いたのだらう。

「そんな……、いただけません」

受け取れないと拒絶する美咲さんを、親父は静かに見つめ返した。そしていつもの笑顔で、とんでもない事を言い出した。

「今は問題かも知れないけど、将来的には問題なくなるんじゃないかな」

親父の言葉の真意に気が付く事は出来なかった。

そんな事を考える間も与えず、親父はもう一つの物をテーブルに置いた。

「商談は今ので終わりにしよう。これからは仕事の話だ」

親父がテーブルに置いたのは、型後れの小さな音楽端末とSDメモリーだった。

俺はメモリーを摘んでじっくりと見たが、今時こんな容量の……と思わせる、何の変哲も無いSDメモリーだった。

「カオルも……、乃江くんも聞いてくれるかな。これは退魔の仕事でもない、対人の仕事だ」

「対人……、能力者？」

乃江さんの表情が強張った。

対人って単語に反応したというより、親父の口調に気圧された。いや、それほどの重要性を感じ取ったのだ。

「そのチップは音楽麻薬。聞けば人に多大な影響を及ぼす音が収められている」

「音楽……麻薬？」

ちよつと前に『サイバー麻薬』なんて眉唾もののデータがインターネットで話題になった。

あんな感じの似非データ？ 好奇心で一度聞いた事があるが、そんな力のあるものだと思えなかった。

乃江さんはチップを睨み、確信を持って親父に問いかけた。

「このチップはあと何回再生出来るのですか？」

「聡いね。乃江さんの良さはこういう所か……」

親父は感心したように乃江さんの顔を見つめ、なぜか嬉しそうに髭を弄った。

「なるほど、再生回数か。」

無限に再生する事が出来るのなら、その麻薬の価値は暴落する。同じくコピーを可能にしても同じ。

ある程度の使用回数で、その能力が失われる。コピーは出来ない。そういった物ではないと私服を肥やす事は出来ない。

手に入れやすい値段で味を占め、もう一度買いたいと思わせる物

でなければならぬ。

「再生回数は13回、このチップはあと5回残っている。デジタル素材なのにコピーしても効果は無くなる」

美咲さんは音楽端末を手元に引き寄せ、チップを本体に挿入した。そしてヘッドフォンを耳に当て、何の躊躇いもなく再生操作を行った。

「み、美咲さん！」

麻薬だった！

そう口を開こうとして、異様な光景に目を奪われた。

ディスプレイが点灯し、イコライザーが激しく動き出した時、音楽端末を霊気が包み込んだのだ。

同時に蠢く線虫が数え切れないほど這い出し、音楽端末を持った美咲さんの手をめがけて蠢きだした。

「！」

乃江さんと俺が身構えたが、美咲さんは俺達に掌を向けて静止させ、その線虫をジッと見つめた。

手首を這う線虫は、美咲さんの動脈めがけて頭を突き刺した。

一匹、二匹と血管内に身を潜らせ、線虫達は姿を消していった。同時に美咲さんの体に変化が起こった。

荒い息を定期的に吐き、膝を擦り合わせるように身悶えた。

「あっ……、くっ……」

同年代の男が聞けば卒倒するほど艶っぽい声。

抗うように膝に爪を立てたが、陥落してしまうまでに時間が掛からなかった。

美咲さんは頬を赤らめ、最後の抵抗を試み、ヘッドフォンに手を掛けた。だが音楽再生を止めようとせず、虚ろな目を俺に向けた。細い手が俺を求めようとした時、乃江さんの手刀が美咲さんの首元に落とされた。

そして糸の切れた人形のように崩れる体を抱きとめた。

「怖いね」

親父は表情一つ変えず、ソファで介抱される美咲さんを見つめた。

乃江さんはヘッドフォンを外して背中から気を入れ、うめき声と共に美咲さんの睫毛が揺れた。

「一般的な性的快楽の数十倍が、曲の間続くといわれている。心得のある美咲ちゃんだからこの状態だが、普通の人間が聞いてしまえば」

狂ってしまうのではないか。

仮に狂わずとも、もう一度聞きたいと思ってしまえば、人として終わってしまう。

美咲さんは頭を押さえ、手渡された水を喉を鳴らして飲み干した。

「霊気で具現化された蟲が、音に合わせて頭で蠢く。同時に体が痺れてしまっ……」

「体に入った虫達は？」

俺はあの線虫たちがまだ体に潜んでいると思うと、居ても立っても

もいれなかった。

だが美咲さんは微笑を返し、首を振ってそれを否定してくれた。

「音楽の間だけ靈氣を保てる感じ……。ヘッドフォンを外したら消えたわ」

俺は頭の中で何かが符合した。数分前に聞いた単語と合致したのだ。

乃江さんも目を見開き、親父の顔を見つめている。

もとより美咲さんは確信を持って言ったのだらう、俺たちと同じく親父の言葉を待っている。

「うん、門外不出のはずの嵯峨野の技法が、その麻薬に使われているんだ。偶然なのか必然なのか……」

親父はそう言うと、苦虫を噛み潰したような顔して腕を組んだ。

『04・Sound Drug』(後書き)

BGM サディステックミカバンド&桐島カレン
ファンキーマージャン、タイムマシンにお願い

『05・Magical Antique』

放課後、私と由佳姉さんは残暑厳しい街を歩いていた。

唐草模様の風呂敷を背負い、この街で商う骨董品屋を巡りつつ、小物の類たくいを買い漁っていた。

「なんや？ 真琴。唐草模様はお気に召さんのか？」

「うぐ……、泥棒さんみたい」

「唐草は吉祥文様やで？ 縁起がええねんで？」

「知ってますよ。成長が早く茎が延々と伸びるから、長寿、繁栄の象徴って事も……」

うちの義姉、山科由佳は意外な所で古風な人だ。

コンビニエンスストアのレジ袋を固辞し、手早く風呂敷で包んで持って帰る。

その為に常日頃から風呂敷を持ち歩いているというから感心する。由佳姉さんの持つ花鳥風月、私の唐草も自慢のコレクションだ。

「鞆は空っぽでもかさばるけど、風呂敷やったら折りたたんでポケットに入れておけるやろ？」

確かに風呂敷は機能性に優れている。

四角い物だけではなく、西瓜の様な丸い物や一升瓶などを包む結び方が存在する。

物の大きさに合わせて結べるから、無用にかさばってしまう事も無い。

だが背負う形に結んでくれたのが災いし、泥棒さんみたいに見えるようだ。

すれ違う人達が振り返り、くすくすと笑い過ぎ去っていく。もう……、恥ずかしくて仕方ないです。

「さ、真琴。この店で最後や」

由佳義姉さんが見つめる先には、大黒堂と冠された老舗風の骨董屋。

いい味を出した紺の本染め暖簾を軒に張り、通りから商品に目垢が付くのを防いでいる。

第一印象は、入りにくい。そして手ごわい店のよう感じた。

「お邪魔します」

由佳義姉さんは物怖じせず暖簾をくぐり、私はその後を追いかけた。

カビの匂いがほんのりと香る店内の空気。

この店は和物の骨董をメインに扱っているようだ。

店内をぐるりと見回すと、絵画や掛軸、古書籍の類は壁際に、茶碗などの陶磁器は木棚の上、目当ての小物はショーケースに納められていた。

「真琴！ 修行の成果を見せてみ」

「あいな！」

含みを持たせた由佳義姉さんの合図にあわせ、私はポケットから手帳を取り出した。

手帳には漢字かな混じりで書かれた難読の文字列。

由佳義姉さんから教えてもらった、神道の祭事で詠む祝詞だった。店の店員に悟られぬよう、しっかりと念をこめ詠唱した。

高天原に神留坐す

神漏岐神漏美の命以ちて

皇親神伊邪那岐の命

筑紫日向の橘の小門の阿波岐原に

襖被ひ給ふ時に生坐せる祓戸の大神等

諸々禍事罪穢を祓へ給ひ清め給ふと申す事の由を

天つ神地つ神八百万神等共に

天の斑駒の耳振立て聞食せと畏み畏みも白す

修行中の身なれど、祝詞を骨董品達に届ける事が出来たようだ。

店に置かれた骨董品の内、いくつかが薄ぼんやりと光を帯びた。

大事に展示された志野茶碗がコトコトと揺れ、細い手足がニョッキリと伸びた。

壁に展示された掛け軸からは、薄ぼんやりと人の顔が覗かせている。

付喪神。つくもがみ 室町時代から江戸時代の初期にかけて編選された、御伽草子という書物に書き記されている。

器物百年を経て、化して精霊を得てより、人の心を誑かす……と神道では長きに渡り使われた物を神聖なものと扱う。

それらを八百万の神として呼び出せば、目利きの利かぬ私達でも価値を見極める事が出来る。

私と由佳義姉さんはこうやって、付喪神に変化するほど古い骨董品を探していた。

それも正當に評価されているものではなく、捨て値で出されている掘り出し物を。

「こんばんは」

私は呼び出しに応じてくれた付喪神達つくもがみに頭を下げた。
志野茶碗は胡坐を気にしたのか、正座に座り直しペコリと頭を下げた。奥の掛け軸は抜けた歯を隠すように袖で口を押さえた。

「真琴、見てみ。これ」

由佳義姉さんはショーケースに齧りつき、漆塗りの和櫛を指差した。

値段は二万八千円。歯が綺麗に揃い傷一つない櫛だった。

特筆すべきは付喪神の姿であろう。綺麗な着物姿の女童。まるでカナタを思い起こさせる清廉さを感じる。

カナタほどの力を感じられないが、物の素性はかなり良いと見た。

「さて、商談開始や、半値を目標に値切るか」

由佳義姉さんのメガネがキラリと光った。

街の明かりが夜を昼に変えているが、腹の虫は誤魔化せない。
ギョルギョルと唸りを上げるお腹を押さえ、私と由佳義姉さんは目的地に到着した。

『魔法ショップ まりりん』

こんな屋号を堂々と掲げて大丈夫なのかと疑問に感じてしまう。
仲間の総評は『程よい怪電波を発して、ナイス!』とか……。

小綺麗な洋風の喫茶店だった物件を、アクセサリーショップ風に改装したお店である。

学生向けの小さな小物に混じり、霊的なアイテムを売りさばいている。

今日仕入れたアンティーク達も、この店の為に仕入れた物なのだ。私は扉のカウベルを鳴らし、由佳義姉さん共々店内になだれ込んだ。

背の高いガラスケースが六つ、テーブルが二つの小さな店だが、店の中には靈気が満ち溢れている。

店主であるマリリンさんはカウンターの所でパソコンを操作し、テーブルの上では三毛猫のタマさんが丸くなっている。

「たまにゃん、こんばんは〜」

「にゃん」

機嫌良く返答してくれたタマさんを撫でて、マシンガンのようにキーを叩くマリリンさんに会釈した。

マリリンさんと呼ばせて貰っているが、本名は宮之阪まりえさん。英国籍のハンターで日本の退魔士と言う所のランクA。イギリス人と日本人のクォーターで、とっても綺麗な人です。

正確にはMarie Miyanosakaなので、皆さんは愛情を込めてマリリンと呼んでいるのです。

「どや？ マリリン」

「通販の申し込み……6件。靈気封じの退魔札が……品切れ」

「あちゃー、また書かなあかなあ」

見渡すと廉価な学生向けのアクセサリも数点姿を消している。私達が仕入れに行っている間に、何人が来客があった様だ。

この店の売り上げは九割九分がインターネットサイトでの売り上げだが、サイトをリニューアルしてから来客も多い。

スタッフの紹介でマリリンさん達の画像を見て、実際に足を運んでくれる方が多いのだ。

ちなみに私は中学生なので、正規のスタッフではありません。こき使われてるけど……。

「ぼちつとな」

マリリンさんは肩をほぐしつつ、パソコンのキーを押した。

同時に店の奥にあるプリンターが稼動して、配送先の住所氏名をタックシールに印刷し始めた。

私と由佳義姉さんは荷を解き、買い占めたアンティークをカウンタ―に広げた。

蝶の金細工、自然石の根付、色褪せた懐中時計に宝石箱。そして閉店まで粘って半値近くまで値切り倒した和櫛だ。

「まあ」

マリリンさんは少女の姿を見て、嬉しそうに目を細めた。

「うちらみたいいな人間には、補助的に霊力を底上げしてくれるアイテムは欠かせへんからな」

「この子のかわいらしさを加味すると、いい値段で売れるかも知れないですね」

マリリンさんは値札に¥2,000,000と書き、商品説明

の所に美しい少女の御霊が見守る櫛と書いた。

そしてガラスケースに赤いフェルトの布を置き、その上に和櫛を置いて値札を添えた。

私達の価値観は物の良し悪しではない。そのアイテムがどのように作用するか、それだけである。

捨て値で売られたアンティークであろうと、人によっては数百万の価値を見出す。この店はそういった物を取り扱っているのだ。

マリリンさんは残りの品物に見合った値段を付けて、ショーケースに並べていった。

「そう言えば……、美咲と乃江がここに来るって」

「そうなんや。経理担当のお出ましか？」

「ううん、……違うと思う。多分……仕事……かな」

梱包された商品に宛名の印字されたタックシールを張り、振り返ると毒々しいオーラを身に纏った。

ゾツとする様な殺気に満ちた気。私と由佳義姉さんは本能的に腰が引けた。

「そんな事は問題じゃない。カオルのお家から電話があった。それが問題」

「な、なんやとー！」

マリリンさんの殺気に負けなくらいのオーラを身に纏う由佳義姉さん。

私は事の重大さに気が付くのに一歩遅れた。

乃江さんと美咲さんがカオル先生の家から電話。

カオル先生の家に、こんな時間まで。

「なっ、なんと！」

天然美少女と完璧超人のタッグ。

二人掛りで共闘するなんて考えていなかった……。

ペンタゴンとブラックホールの四次元殺法コンビ並に手強いじゃないか。

「にゃん」

毒を吐きまくる三人を他所に、タマさんが一鳴きして来客を伝えた。

店の前に停車するタクシーから、美咲さんと乃江さん、そしてカオル先生が降りてきた。

走り去るタクシーと共に、ドアのカウベルが鳴り響いた。

「こんばんは」

にこやかに挨拶をする美咲さん。

ギターのケースを背負い、制服姿で登場した。

艶のある綺麗な長髪は腰まで伸びていて、背が高くてモデルさんみたい。

女の子の理想を具現化した人、それが我らの隊長、天野美咲さんだ。

「よしー」

この愛想のない挨拶はカオル先生。

私が初めて教えを受けた師匠にあたる人、だから敬愛の気持ち

こめて先生と呼んでいる。

洗いざらしのジーンズに白のシャツ。アクアブルーのシャツを羽織っているだけなのにカッコいい。

「……」

最後、無言で登場したのは完璧超人。もとい真倉乃江さんだ。ショートカットで涼やかな目、クールビューティな感じ。

性差を感じさせないサツパリとした性格をしている癖に、料理、洗濯家事全般の達人なのだ。

「差し入れた。夜遅くまで済まないな」

乃江さんはそういうと、手に持ったタツパを手で開いた。

形の良いおにぎり焼き肉と野菜をサツと炒めたおかず。私は反射的によだれを拭った。

おにぎりに群がる手と手、それを押しつけておにぎりを掴み取った。

まだ硬さが残る海苔と、絶妙の塩加減で握られたお米。素朴な味のはずなのに、どうしてこんなに美味しいのだろう。

瞬く間におにぎり達は胃の中に収まり、遅れておかず達も姿を消した。

私達三人は美咲さんの煎れてくれたお茶を啜り、幸せな気分で人心地ついた。

なんだか食べ物で誤魔化された気がするけど……、幸せだからまあいいか。

「さて、本題に入りましょうか」

店のテーブルを引き寄せ、二つ合わせて椅子を並べた。

それぞれが形の違う椅子に腰掛け、テーブルに置かれた携帯音楽端末を見つめた。

端末とSDメモリーが一枚。

音楽端末は曲そのものの著作権問題からか、外部メモリーを許容する端末は少ない。

ほとんどの場合、内蔵されたハードディスクかメモリーにダウンロードするタイプが多いのだが、この機種はメモリーを外付けで使用する。

国産のメーカー品だが、ひと昔前のタイプに見える。

「音楽麻薬？ そないなモンあるんや……」

由佳義姉さんは指先でメモリーを突付き、興味津々の眼差しを向けている。

ジツと黙って見つめていたマリリンさんだったが、何か思い当たる事があったかのように口を開いた。

「悪魔の歌……。人を死に導く楽譜があると聞いたことがあります……。教義に反する物として永久封印されていますが、それに似たモノかも……」

「なっ、聞いてみてもええやるか」

警戒するマリリンさんを尻目に、由佳義姉さんは目を輝かせた。

同時に苦々しい顔をして、頭を掻くカオル先生。

笑いを堪えている美咲さんと乃江さんに目を向けた後、椅子を摺り席を立った。

「真琴……、席を外せ」

カオル先生は私の首に腕を回し、引き摺るように店を出た。
そして店の階段に腰掛けて、堪えきれないとばかりに笑い出した。
私はその笑いの意味が分からずにいたら、店内で泣き声に似た悲
鳴が轟いた。

「ぎゃ〜っ　うおっ！　寄生虫っ！　気色悪っ！」

ガラス越しに店内を見つめ、転げまわる義姉の情けない姿を確認
し、ホッと胸を撫で下ろした。

『05・Magical Antique』(後書き)

BGM 菅原露見 - Littlestone

苦笑していたカオル先生が、ふと物憂げな表情を作った。どこか遠くの方を見つめ、こちらを振り返るうともしない。そして私ではない誰かに話しかけるように口を開いた。

「なあ、真琴。少し話をしないか？」

不器用な先生の事だから、大勢の前で話が出来なかったのだろう。由佳義姉さんを理由に、私を外に連れ出してくれたのだ。私はそんなシャイな先生の横に座り、同じ様に通りを行き交う車の流れを見つめた。

「真琴は仇を討つ事を目標に、退魔士の世界に入ったんだよね？」

「司法取引という側面もあるけど、本音は……そうですね」

「その案件が解決して、目標を見失っていないか？」

確信めいたカオル先生の言葉に、喉から心臓が飛び出すほど驚かされた。

心の中を覗かれたような驚きと恐怖を感じてしまったのだ。

「お父さんを殺した魂喰いに、同じ報いを受けさせてやりたい」
傷を負い病院に運び込まれた私は、病室の天井を見つめてそう誓った。

能力開花と成長の糧は人を憎む憎悪だった。
けれどみんなの温かさに触れて変わったと思う。

憎しみは更なる憎しみを生む。

憎んでいたはずの私が、いつしか誰かに憎まれる立場になる事だ
って有り得るのだ。

もう憎しみの連鎖は断ち切ろう、そう思えるようになった。

だけどそう考えると共に、私の成長は止まってしまった。

技量は教わる事で上がっているけれど、強くなりたいという渴望
が無くなった。

あの頃の……、貪欲に力を欲した私はいなくなってしまった。

「あの終り方で良かったと思っています。けれど目標を見失って伸
び悩んでいるのも確かです」

「そうか……。俺も壁にぶち当たっていて悩んでいる」

カオル先生は自虐の笑みを浮かべ、長い前髪を掻き揚げた。

綺麗に通った鼻筋と綺麗な瞳。だが、その言葉が嘘ではないと堅
く閉じた口元が言っている。

「俺は美咲さん達と出会ってから、成すべき事は何なのかと自問自
答しつつ今日まで来た」

その言葉、分かる気がする。

私も憎悪に駆り立てられ、ここまでやってきた。

けれど負の連鎖を虚しく感じた時、自分の立ち位置が分からなく
なった。

今までの私を否定する事と同義だから……。

足元にあると思っていた階段が無くなり、降りる事もままならず
に、崩れていく階段を走り続けていた気がする。

「仲間の存在が俺を支えている。動機もそこに見出している。けれ

どそんな動機でこうしていいのかと……悩む時もある」

私とカオル先生は同じ時期に美咲小隊に入った。

けれど近いようで遠い。同じようで全然違っていると思っていた。だけど……、似てる所もあるんだ。ちよつとホツとした。

「私、それでも走り続けて良かったと思ってます。一生掛かっても見つけられない、大切な仲間を見つけたもん」

カオル先生は思い詰めた表情で、ジツと私を見つめ返した。

私より背が高くってお兄さん。だけど私に視線を合わせてくれる、そこが先生のいい所だと思う。

「私ね、思うんです。多分何年経っても同じ様な事を考えているんじゃないかって」

「成長しないって事か？」

カオル先生はへの字口になり、拗ねた様な表情を作った。

私はそんな子供っぽいカオル先生を見て、思わず笑ってしまった。

「違います！ 成長したいから悩むんですよ。常に悩みを持てるって凄くいい事だと思います。悩む事、考える事を止めれば成長も止まると思っから……」

カオル先生の頬杖がガクツと折れた。

私の答えが気にいらなないのかなと思ったら、クスクスと笑い肩を震わせている。

そして突然スクツと立ち上がり、まだ座り込んでいる私に手を差し伸べた。

「なるほど。答えは見いだせなかったが、真琴に相談して良かったよ」

ひっ、相談だったのですか。

私の悩みを聞いてくれていているものとはかり思っていました。

恐縮して縮こまった私の手を引き、背中をポンと叩いて店の中を指差した。

仲間が待っていると言わんばかりの笑顔で。

「元気出してね。先生！」

私は心の中で思った事と違う言葉を口にした。

本当の気持ちは。内緒です。

「カオル、真琴。ごめんな、氣い使わせて」

店の扉を開けると、由佳義姉さんが私達に手を合わせていた。

カオル先生は曖昧に笑いテーブルに着いた。私も先生に合わせ、苦笑いをして誤魔化した。

テーブルの上には音楽端末、そして美咲さんのノートパソコンが広げられていた。

覗き込むと相変わらず文字ばかりの画面で、操作する本人だけは涼しい顔でキーを叩いている。

「恐ろしく情報が少ないわ。テストの段階かしら？」

美咲さんの呟く声に無言で頷いている乃江さん。

カオル先生や義姉さん達も、その言葉を理解しているようで眉一つ動かさない。

私は恐る恐る手を上げて疑問を口にした。

「テストってなんです?」

私に向けられる十の瞳。

その中で乃江さんだけはピクリと眉を吊り上げた。

「日本でよく耳にするのは覚醒剤。覚醒作用と陶酔感を得ることが出来るが、多用すると幻覚や妄想を引き起こす。静注、加熱吸引等で服用する」

「は、はひっ」

「次に大麻。マリファナや草と呼ばれることが多い。独特の陶酔感、トリップ感が特徴。タバコと同じ様に燃焼吸引する」

「ふひ……」

「あとはコカイン、MDMA、LSD……。姿は濡れた紙片や錠剤、粉末状。それぞれが違った効能があり摂取方法も色々だ」

「ほへ……」

「純粋にマーケティングを行い、こういった人種に受け入れられるのかを調べるには、既存のバイヤーや定期購入する客が少ない所が望ましい」

「あつっ、なるほどです」

「ついでにいうと、この手の麻薬は口コミで広がる。昼間8時間拘

束されるビジネス街より、ベッドタウンの方が売りやすいんだ」

「もう一つ質問が……、なんでそんなに詳しいんです？」

「人の行動を考察すれば、おのずと答えは出る。人目を憚るものは壁を隔てた場所、例えば家、車の中、ホテル……、長く過ごせる場所でしか使用できん」

麻薬というのは効能と依存性がクローズアップされがちだ。

しかし持続時間を忘れてはならない。その時間に出歩かない方が身の為だろう。

短いもので数十分、長いもので十時間ほど効果が続くと聞いている。

日本の警察は優秀で勤勉だ。恍惚感に酔った状態で街をさ迷い歩けば、間違いなく警察に職務質問される。

テストというのは、こういったものが受け入れられるかに加え、価格設定と販売ルートの確立する手法を得る為か。

既に確立した販売網や開拓した客に、混乱を招く余計な物を与えない方がいい……、そういう事か。

「それに音楽麻薬は恍惚感、多幸感を与えるものではない。実世界で得ることの出来ない性的快楽を与える。その……、なんだ……、色々と気を使わなくてはならないだろう？」

あ、あは……、残念ながらよく分かりません。

多分……だけど、下着とか汚れるんでしょうね。

カオル先生が席を外した意味がなんとなく分かりました。

「依頼人から入手先はある程度情報を得ています。ここからそう遠くないけど、通いで調査は厳しいわ」

美咲さんが顔を曇らせた。

「調査の間は学校を休まなくてはならない……か。しばらくホテル住まいになりそうだ。」

美咲さんはカオル先生の方へ目を移し口を開いた。

「今回はカオルさんに作戦立案をお願いしたいの。」

「お、俺が？」

突然大役を言い渡されたカオル先生は、あたふたと慌てふためいた。

助け舟をとマリリンさんと義姉さんに目を向けたが、二人とも救いの手を差し伸べず、ニコニコと頷いている。

先生は観念したように溜息を一つ吐き、ボリボリと頭を掻いた。

「目標が定まっていますから、全員一纏まりで動くのは効率が悪い。個々に動きたい所だけど、一人で動き回る危険は避けたい。隊を三つに割って成果を連絡しあう。」

「なるほど。」

美咲さんは満足げに頷き、話を引き出すように相槌を打った。

先生は腕を組んで暫らく考え込み、ニヤリと笑って仲間の顔を見た。

「美咲さんは宮之阪さんと特殊任務。乃江さんと山科さんは二人のバックアップを。俺と真琴はみんなと別に動きます。」

意外な作戦立案に全員の目が見開かれた。

特殊任務という言葉に反応した美咲さんとマリリンさん。
分隊といつつバックアップを言い渡された乃江さんと義姉さん
も同じ。

一番驚いたのは私。私なんかでカオル先生のペアが勤まるのだから。
うか。

「美咲さんはあの音楽麻薬を聞きましたよね。ヘッドフォンから漏れた音で判断すると、あれは曲でしたよね」

「確かに……、耳触りの良い普通の曲のように聞こえました」

カオル先生は立て掛けられたギターケースを手に取り、中からギターを取り出した。

そして組んだ脚にギターを置いて、弦を爪弾いた。

一本一本を丁寧に爪弾く弾き方で、私の知るギターの弾き方とはちよっと違う。

クラシック演奏で耳にするギターの扱い方のように思える。

「確かこんな曲だったかな」

そういつて軽やかに触りを弾き、美咲さんに微笑み返した。

まず反応したのは乃江さん。手をポンと叩いてなるほどと頷き、由佳義姉さんに耳打ちして聞かせた。

キョトンとしたままの当事者の二人だったが、次第にその意味が分かり始めたようだ。

「音楽麻薬の曲を人前で演奏しろって事？ 疑似餌？ ルアーフィッシングですか！」

「そう。美咲さんならアレンジして歌詞を付ける事が出来る。それ

に入手先と言われた街は、ストリートミュージシャンの聖地です」

屈託無く笑うカオルさん。

マリリンさんは頭にハテナマークを三つ付け、テーブルにへたり込んだ美咲さんを見つめた。

そして手を上げて疑問を口にした。

「私の……役割が分かりません」

「宮之阪さんがボーカルで、美咲さんがリードギター」

カオル先生は予測していたように即答で答えた。

その返答にマリリンさんは涙目になり、美咲さんがゾンビのように起き上がった。

歌は私の十八番と言わんばかりの表情だ。

「だって美咲さんの歌だと力がありすぎて問題が多い。それに前から思ってたんだけど、宮之阪さんの声って凄く綺麗だと思うんだ」

「絶対不可能　むぐっ」

「それおもしろいな。乃江とうちは美咲らの安全を確保しつつ、不審者を見極める役目か」

由佳義姉さんはマリリンさんを羽交い絞めにして、反論を封じてしまった。

それにしてもカオル先生の発想は面白い。無茶苦茶なようでペアの人選も考えている。

まず美咲さんとマリリンさんは同じ特性を持つ能力者だ。

近距離から中距離をカバーし、近接戦闘もこなせる美咲さん、広

範囲の魔法を行使できるマリリンさん。

一見全く違うように見えるけど、攻撃は自分を中心とした円形だ。次に乃江さんと由佳義姉さん。近接の乃江さんとピンポイント足止めできる義姉さんは相性抜群だ。

分からないのは私。未熟だし足を引つ張りそうで適切な配役だと思えない。

落ち込んでいる私を気にして、相棒に選んでくれたのだとすると。

「先生！　なんで私なんです？　お情けですか？」

私はつい声を荒げてしまった。

お情けでも一緒に居るのが嬉しいのに……。視線を合わせて私を見てくれる、いつもの先生じゃないように思えてしまった。

暴れるマリリンさんが目を見張り、他のみんなもギョツとした顔で私を見つめた。

私は知らず知らずの内に、唇を噛んでカオル先生を見つめていた。

「違う。俺はまず相棒誰にするか考えて真琴を選んだ」

カオル先生は席を立ち、椅子にギターを座らせた。

そして一歩二歩と後ずさり、何事かと見つめる視線を無視しジッと私だけを見つめた。

口元が開かれ私に何かを伝えようと動く。

そして同時にアクアブルーのシャツが跳ね上がった。

「！」

投擲された守り刀とナイフ。その切っ先は間違いなく私を指していた。

瞬き一つするほどの時間で到達する切っ先を見つめ、何故か心は落ち着いていた。

いつもと同じ。

私は剣のアルカナを操作するように手を翳し、二つの短剣に命令を下した。

二本の剣よ、私の命に従えと。

同時に意を持った二振りは、手の動きに合わせて急制動の後、向きを変えた。

そして守護するように私の前に位置し、次の命令を待っている。

私はその二振りを手にとってその重みを感じた。

「な？」

カオル先生は私の前で腰を落として、呆然とする私の頭を撫でた。そして震える手からナイフと守り刀を取り、腰に差してもう一度椅子に腰掛けた。

「前の案件の時、現実操作の可能性として見えたんだ。俺のナイフを操作する真琴の姿」

やっぱりカオル先生は面白い。

奇抜なようでの的を射ている発想や、機転が利く頭の回転の速さ。

実の所乃江さんより頭がいいのじゃないかと思えてしまう。

やっぱり先生は……私の先生だ。

「それに……」

ナイフを投げる前に私に伝えてくれた言葉。

俺は真琴を信頼していると、そう私に伝えてくれたのだ。
私は湧き上がった気持ちと高鳴る鼓動を手で押さえ込んだ。

『06・The Two of Swords』(後書き)

BGM JITTERIN・JINN 夏休み

『07・Intermission』

「うっよっよ……」

耳元で囁くような小さな声が聞こえ、深夜ふと目が覚めてしまった。

重い瞼をこじ開けて部屋を見回すと、薄暗がりの中時計の針は2時を指していた。

眠りについてから二時間も経っていない。着替えもせず横になったから眠りが浅かったのかもしれない。

宮之阪さん達の店を出た時には十二時を過ぎ、疲れ果てた俺はベッドに倒れこむ様に眠ってしまった。

明日は朝が早い、早く眠らねば……。

目を閉じて眠ろうとした時、再び声が耳に届いた。目を凝らして声の主を探すと、机の上で飛び跳ねる小さな人影があった。

守り刀に宿る精霊カナタと、ナイフを依り代にしている桃の仙女トウカの姿だった。

人差し指ほどの背丈をした二人は、パソコンの画面を見つめてなにやらヒソヒソ話をしている。

普段なら気持ちが悪わるカナタだが、余程話に夢中なのか目を覚ましている事に気づいていない。

「カオルが向かう先は」

「我らも調査せねばの」

二人はキーボード上を飛び跳ねてキーを打ち、街の名前を入力して検索を開始した。

神格化した精霊や仙女であっても、現代の情報を網羅している訳ではない。

いつも二人が適切な助言をくれるのは、こういった影の努力をしているからなのか。

「港町のようじゃの」

「風情があるのう」

検索結果の上位、都市情報を見つめて話し合う二人。

街の画像を見ては感嘆の声を上げる。

そして一通り見終わると、検索条件に追記した。

「スイーツ……と」

「ご当地の甘い物を検索し始めた。

二人の努力に対し覚えた感動は失せ、落胆のあまり脱力してしまっ
った。

「こいつらのスイーツ情報はこうやって培われているのか……」。

「どこの店に行っても」この店はこれが一番美味い』と即答するから、鼻が利くのかと思っていたが。

「……………」

カナタとトウカは画像を眺め、しばし無言になった。

ヒソヒソと話されても眠れないが、急に黙られても逆に気になる
気づかれぬよう薄目を開けて二人を確認し、また脱力してしまっ
た。

画面一杯に拡大されたフルータルトの画像を見つめ、呆けた表情で涎を垂らす二人。

普段の姿とのギャップが大きすぎて、見てはいけないモノを見てしまった気がしてしまう。

俺は悪い夢でも見たと思い、再び眠りに就こうとした。

「これは……」

「なんとも……」

二人は一言そう呟くと、再び黙り込んでしまった。

ええい！ 黙るんじゃない。気になるじゃないか！

喋っても黙っても眠りを妨げる二人。俺は仕方なく観察を続ける事にした。

二人は再びページを遷移し、和菓子屋のホームページを閲覧した。

「水饅頭とな」

「涼しげじゃのう」

葛の中に餡が仕込まれた水饅頭を見て、二人は手を叩いて喜んでいる。

氷に冷やされた葛がとても上品で、見た目にも涼しげ。これはかなり美味そうだ。

カナタは涎を拭い、いつもの表情でトウカへ話しかけた。

「今回は退魔ではなく事件の調査じゃ。魔物からの栄養補給は望めないからのう……」

「我らはカオルの霊気を吸っておるし、少しでも負担を少なくせねばな」

なるほど、ご当地スイーツを調査していたのは俺への負担を考慮しての事が。

彼女らが現世で姿を保つには、瘴気や靈気を補給し続けなくてはならない。

代替となる補給手段は甘い物を食べる事、それも高級菓子を食う事で補う事が出来る。

過去に砂糖を与える実験を試みたが、思ったほど靈気は補給出来なかった。

恐らく彼女らは糖分だけを補給しているのではない。高級菓子を食う事による『感動』と『満足感』が必要なのだ。

「むっ？」

見られている視線に気づいたのか、トウカが怪訝そうな表情で振り返った。

俺は気取られぬように目を閉じてやり過ごした。

「どうかしたのか、トウカ？」

「いや、気のせいじゃ」

俺はそのやり取りを聞いて、ホッと胸を撫で下ろした。

だがいきなり目を開ける事も出来ず、聞き耳を立てて様子を窺った。

「……………」

「……………」

ええい！ 黙るんじゃない。気になる！

どうせ甘い物の画像を見つめて呆けてるんだ。警戒する事もあるまい。

俺はコッソリと目を開けて様子を窺った。

「ん？」

パソコンの前に二人の姿は無く、代わりに耳元をくすぐる吐息が二つ。

俺はゾツとする殺気を感じつつ、固く目を閉じて冷や汗を垂らした。

「おなごの会話に聞き耳を立てるとは……」

左右からハモる二人。

俺は最後の悪あがきをして、激しく寝息を立てた。

「起きておるのじゃろ？」

「すみません、寝ています」

「起きておるではないか！」

「すみません、これは寝言です」

耳元でがなり立てる二人を他所に、俺は狸寝入りを決め込んだ。

二人はしばらくの間俺の愚行を咎め続けたが、ある時を境にピタリと声が止んだ。

「……………」

「……」

口を開いても、閉じていても俺の眠りを妨げるとは……、やるな
ちびっ子。

だがこれは罠だ。目を開けたら死が待っている。

「水饅頭」

「フルーツタルト」

今度は俺を洗脳し始めた。いや睡眠学習かもしれない。

先ほどの二人が見せた呆けた表情を思い出し、歯を食いしばって
笑いを堪えた。

「甘い〜、甘い〜」

「うるさい！ これは寝言です」

かくして貴重な睡眠時間はどんどんと削られ、気が付くと外は明
るく白み始めていた。

『07・Intermission』(後書)

BGM

Shakatak - Night Birds

高中正義 COVERS Live at the Copie

X - Night Birds

ふと誰かに呼ばれたような気がして、目を覚まして辺りを見回した。

つい先ほどまでベッドに寝ていた筈なのに、目覚めれば広々とした和室に寝転がっていた。

足元には手触りのよい畳が敷かれ、開け放たれた障子戸からは心地よい風が流れこんでくる。

手入れの行き届いた庭の緑が目優しい。日本人に生まれて良かったと感じる和の風雅だった。

『カオル!』

『起きよ!』

部屋の真ん中に置かれた座卓の上で、カナタとトウカが騒ぎ立っている。

俺は枕代わりの座布団を敷き直し、寝ぼけまなこで座卓の上を見下ろした。

カナタが指差す先にはガラスの器が三つ、水饅頭に竹製の和菓子切りが添えられてある。

漉し餡を半透明の葛餅で包んだ水饅頭、つい先ほどまで泳がせていたかのように瑞々しい。

『く、食つても良いのである?』

『駄目と言われも聞けぬぞ! もう待てぬ!』

そう告げると二人は水饅頭へと突撃した。
野性味溢れる食いつぶりに苦笑しつつ、俺も目の前の水饅頭に手を伸ばした。

しかしこのプルプルとした水饅頭、すぐさま竹串で割ってしまうのは惜しい。

まずは触感を確かめるべく指で軽く突付いてみた。

『 ころら！ 寝ぼけるな！ 』

なぜか叱責する葵の声が耳に届いた。

だが声はすれども姿は見えず。葵よ、もしかしてお前も食いたかったのか？

幼い頃から仲良く分けて食べると育てられたから、罪悪感が幻聴を引き起こしたのであるうか？

それを確かめるべく、今度はしっかりと水饅頭に手を触れた。

『 いつ、一度ならず二度までも！ 』

やっぱり葵の声が頭に響いた。

だが葵に遠慮しては、この水饅頭に申し訳ない。罪悪感をかなぐり捨てて食ってしまおう。

俺は水饅頭を手に取り、もちもちとした触感をしっかりと確認した。だが想像していた葛の柔らかさは無く、微妙な感触が伝わってきた。

「むっ？ 葛の触感がアレだな。貧弱というか、もっと」

『 クズで貧弱ですって！？ 』

俺は腹部に衝撃を感じて、本日二度目の目覚めを迎えた。痛みと共に定まっていく視界には、涙目で胸を抱く葵の姿がある。しかもなぜか頬を赤らめ、俺に非難の目を向けている。なにがなんだか分からんが、本能的にとてつもなく不利な状況に感じた。

すぐさま起きあがって事の次第を確かめたいが、くの字に折れたベッドに押し潰されて身動きが取れない。

「なんでベッドが壊れてるんでしょうか？」

「天誅が下ったのよ。お兄ちゃんのエッチ！ セクハラマスター！」
葵はブンとそっぽを向き、怒気を放ったまま部屋から出て行った。訳も分からず呆気にとられていたが、扉を閉める前にもう一度こちらを振り返った。

「40秒待つてあげる。起きないと大声出して人生終らせるわよ」
そう言い残して扉を閉めてしまった。

あの確信に満ちた口調……。兄妹だからこそ理解できる凄み。アイツは今、なにか得体の知れぬ切り札を持っている。とんでもない切り札を……。

「十七年で人生を終えるとか、勘弁してくれよ」

幸若舞の『敦盛』では人間じんかん僅か五十年と謡われている、俺の人生はその三分の一で終るのか？

慌ててカナタとトウ力を拾い上げ、机の上にある武器を腰に差した。

最後に寝癖の髪を撫でつけ、急ぎ足で部屋を出た。

「お兄ちゃん、遅い！」

葵は玄関を出た所で仁王立ちして待っていた。その横には自転車がスタンバイ済み。どうやら何処かに連れて行かれるようだ。

「で、俺は何故叩き起こされたのだ？」

「昨日お兄ちゃん言ったでしょ？ 技を教えてくれるって！」

有無を言わせぬ表情で自転車の後ろ座席を指差した。

まさに『エンジン音を聞くだけでダンプカーと分かる』凄み、こは葵に身を委ねるのが得策か。

自転車を漕ぎ出す葵の背を見つつ、昨日の記憶を辿った。

そついや『教えてやるよ』なんて安請け合いをってしまったな。妹に甘い兄はそろそろ卒業しないといけない。

葵は軽快にペダルを漕ぎながら、不機嫌だった事など忘れたかのように振りかえった。

「昨日の続き、退魔士の疑問について聞いていい？」

「俺の知ってる範囲ならな」

「なんで退魔士って男女比率に偏りがあるの？ 統計情報では7：3と女性が多いみたいだけど……」

「そういえば退魔士試験のパンフレットに統計情報が記載されていたっけ。」

日本の総人口での統計比率は、数百万人単位で女性の方が多い。

出生率にそれほどの差があるかといえはそうでもなく、逆に出生率は男の方が多いといわれている。

理由は明白、単に女性の平均寿命が長いのだ。

ならば比率はニアリーイコールなはずだが、現実には女性の比率が圧倒的に高い。

この差には明確な理由が存在するのだ。

「子を成す役割を担う女性には、幽世かくりよとの結び付きが生まれ持つて強い。潜在的に見鬼の力を得やすいんだ」

俺も最初は業界に疎く、周りに女性が多い事に気が付かなかった。美咲隊に女性が多いのも、連携しやすいようにそう選んだのだと思っていたのだ。

だが美咲さんの答えは違っていた。

『男性の退魔士が少ないからですよ。女性では立ち入れない場所もありますし、カオルさんが入ってくれて助かっています』

うーん、割と重宝されていて嬉しい限りだ。

俺の周りには牧野やキヨウさんがいるし、あまり違和感を抱かなかったというのが本音かな。

葵は自転車を漕ぎつつ、空を見上げて唸り声を上げている。

「なるほど、心当たりがあるな。私もソレっばい」

「初潮を境に霊が見えるようになったのか？」

「妹とはいえ言葉を選べ！ オブライトに包むのだ！ セクハラマスタ―！」

言葉を選べとは、難しい要求を突きつけてくる。
医学的に言った方が無難でクールだと思ったのだが……。

「色気の無いパンツが物干し竿に」

「振り落とすわよ！」

怒気を含んだ葵の一喝に、言葉を飲み込んでしまった。

兄妹ならではのぶっちゃけ話だと思ったのだが、著しく気分を害されてしまった。

ここはさり気無く話を元へ戻そう。

「一見有利に見える女性退魔士だが、月経周期で霊力が変動したりすると聞く。色々と大変らしいぞ」

「ほんと？」

こついったぶっちゃけ話は乃江さんから聞かされることが多い。
性差の観念が薄いというか、こちらが困ってしまう内容を平然と話してくれる。

それが良いのか悪いのかはさておき、分け隔てなく接してくれるのは嬉しいのだが。

「憂鬱だし面倒だしお腹痛いの、その上霊気も変化するの？ 女って損！」

「残念ながら男には理解出来ん」

これも乃江さんに聞いた話だが、霊力は低まるばかりではないらしい。

月に一度冴え渡るタイミングがあるらしく、一概に損とばかりは言えないと思う。

こういった感覚は自分自身で理解する方が早いだろうし、男の俺では説明しきれない気がする。

「到着！」

けたたましくブレーキの音を響かせて自転車が止まった。

ここは昔、俺と葵がよく遊びに来た河川敷だ。

遊歩道から一段降りた場所は雑草が芝生のように生え、子供らが遊んでいる場所は土が剥き出しになり、いい感じの広場になっている。

「ここは昔と変わらないな」

自転車を停めて、石階段を下りた。

葵は体を動かしたくてウズウズしている様だが、あえてゆっくりと柔軟体操を始めた。

「怪我しないように柔軟をやっとけよ」

氣勢をそがれた表情をした葵だったが、俺を真似て手足を動かした。始めた。

実践では柔軟などする時間は与えてくれないが、出来る時にはやっておかないと。

練習で怪我をしたら本末転倒だ。

「ねえ？ お兄ちゃんの必殺技ってどんなの？」

「現実操作の事か？」

「銀行の預金を変えたりして、大金持ちになれるとか？」

「いや、そんな事は出来ない。それは不正操作の類だ」

「アイスクリームのアタリを引けるとか？」

「庶民レベルに落としても、無理なものは無理」

俺は柔軟を続けつつ、かいつまんで説明を試みた。

まず現実操作を発動するためには、あらかじめ霊気で弾丸を具現化しておかなければならない。

弾丸は霊気が満ちている状態で一、二発を具現化するのが精一杯。それほど膨大な霊気を消費する。

使用するリボルバーは装弾数六発、故に全弾装弾する為には最低でも数日必要となる。

「葵が風呂に入ってる時に、浴槽の半分ほどのお湯を足したらどうなる？」

「そんなの溢れるに決まってるじゃない」

「俺の能力も同じ、弾丸は霊気のサブタンクのような物。過剰な霊気を取り込めば、体内で処理しきれず飽和状態になる。現実操作はそんな状態でしか発動しない」

ただ現実操作を行うには、もう一つ大きなハードルがある。

現実是不変という固定概念を打ち破るために、ハードルをクリアしなくてはならない設定になってる。

「ロシアンルーレットで発動難度を上げている」

「リスクを背負えば能力を高めることが出来るって事？」

「まあ、そういう精神集中の方法もあるって事だ。窮鼠猫を噛むってか、追い込まれると頭が冴えるだろ？」

「むう、それはお兄ちゃんだけだよ」

このルールを設けたのは八瀬春菜の副人格ハルナだが、俺も理に適っていると感じている。

不安定だからこそ成功時の価値が高いと感じるのだ。

「全弾装弾すれば発動率100パーセントだが、切り札を使い切るリスクがあるよな」

「次に何があるか分からないんだから、使うにも勇気がいるよね」

「逆に一発つつ撃てば発動の確率を下げちゃうし、ミスった時は絶好の隙を作ってしまう事になる」

「ややこしい設定なのね……」

正直こんな難解なスキル使いにくい。

だが逆にこんなに頼りになるスキルはないと思える自分もいる。ワンチャンスポーカーで五枚手札を捨て、ストレートかフラッシュを狙うような感覚だ。

手札が揃えば無敵のスキルになる。

「はあ……、私にもそういう能力、身に付くのかな？」

葵はガツクリと肩を落とす、力なく呟いた。

俺はつい甘い側面を見せてしまっそうになる。だが心を鬼にして口を閉ざした。

葵の能力は眠りを誘う霊気の方。

知らずのうちに脳内物質や脳波をコントロールしているなんて、葵は気付いてないのだろう。

麻酔医がなぜ必要なのか、なぜ睡眠薬を大量に服用すれば危険なのか。

その事に葵はまだ気づいていない。

「特殊スキルより体術が生命線だぞ？ 軽く手合わせしてみようか」

俺は葵の前に立ち、右手を前に突き出して左手を腰に据えた。

刀を使うには右を腰に置いた方が動きやすいが、今回は防御主体の構えで様子を見る。

葵は神妙な面持ちで距離を取った。

拳では遠いが脚なら届く絶好の立ち位置。逆にどう攻めてくるか読める位置でもある。

「行くよ！」

軽くステップを踏んだ葵は、身を振り右足の牽制打と、時間差で腰の入った左足を蹴り込んで来た。

だが脚から来ると分かっている。

つま先が加速し切る前に膝を押さえれば、回転で力を得る前に霧散して消える。

俺は葵の左足を脇に抱えて、よろける葵を無理矢理立たせた。

「ジーンズで正解だったな。スカートだったら恥ずかしい事になっ

てるぞ?」

「じゃこい!」

脚をバタつかせて振り解こうとするが、片足でやっと立っている状態だ、振りほどく事すらままならないでいる。

俺は脚を離して、もう一度距離を取った。

「もう一度チャンスやる。同じ事を繰り返したら退魔士試験なんて認めないぞ」

「厳しいよ、お兄ちゃん!」

頬を膨らませて非難の目を向ける葵。

俺にこういう態度を取るのはいいが、まさかキョウさんにまで甘えていたのだろうか。

その時のキョウさんを察して軽い頭痛を感じつつ、同じ構えで葵を見据えた。

「弧を描く動きは力を溜めやすいが、その分予備動作が大きくなる」
為にならないと分かっているけど、ついつい助言をしてしまう。

葵は先ほどと同じ立ち位置で構え、同じ様に右足の蹴りと、遅れて左足を蹴り込んで来た。

だが先ほどと違う自信に満ちた葵の表情。俺は本能的に危険を感じ取った。

右手は反射的に葵の膝を取りに動いたが、虚ろになった脚は手を素通りした。

わき腹に突き刺さりかけた脚を左肘で咄嗟にガードをして、次に来る攻撃を背後へ飛んで避した。

「紅霞か……」

同じ動きをして見せたのは畏だった。

一度目と同じルーチンを見せる事で、俺の慢心を呼び起こしたのだ。

こいつがボードゲームの達人で、知略に長けている事を忘れていた。

昨日紅霞を訓練していたあの必死な姿も、今思えばこいつの作戦だと思えてくる。

「いつからだ？」

「ノーコメント」

やっぱり昨日の内にコツを見出していたのだ。

まあ会得のタイミングはこの際いいとして、気になるのが門を開けている時間だ。

俺や乃江さんは瞬きほどの時間しか紅霞を発動出来ない。だが葵はこうしてる間も、桃源境への門を開け続けている。

才能か、それとも……。

「忠告として言うておくが、紅霞は靈気を消費して門をこじ開ける技だ。あと数十秒そうしていたら、立てなくなるぞ？」

「え？ わわっ！」

葵はギョツとして自分の脚を見た。

そして透けて見える膝を手で触れようとして、何度も手を往復させている。

天然か……。コントロールしているのではないのか。

葵は次第に実体化していく脚を手で抱え、その場にへたり込んだ。

「覚えたての技を見せたい気持ちは分かるが、今はそんな段階ではないと分かるだろ？ 真摯に教えを請うべきじゃないか？」

「あう……、その通りです」

俺はへたり込む葵に手を貸し、引き起こしてジーンズの汚れを掃った。

中学三年でも華奢な体型をしているから、大振りの技に固執するのは理解できる。

だが見え見えの技は、相手に避けてくださいって言っているようなものだ。

「葵、見てろよ」

手の届く間合いに葵を立たせ、ゆつくりと膝蹴りのモーションを見せた。

手で肩を押さえ込める程の近接距離だ、膝は真っ直ぐ腹部へ目掛けて動いていく。

「ゆつくりだから分かるだろ？ 葵はどう考える？」

「うん。手でガードをするか、半歩下がって回避する」

俺は膝を腹部に当たる手前で止め、縦の動きに捻りを入れ、脚をわき腹へと向き変えた。

「これなら手のガードも役に立たないし、半歩下がった敵を追い込

む事が出来る」

「ほう」

葵は色々なガードを試し、半歩下がってつま先の位置を確認した。俺は蹴りの間合いまで下がった葵に対し、喉元へ拳を突き入れた。

「脚を踏み込めばこの位置でも手が届く。葵ならばどうする？」

「むっ、こっかな？」

葵は肘を立てて両手を交差させ、俺の拳を受けに回った。

お手本のような回避術、これが葵の良さであり欠点でもある。

俺はガード手前で手を止め、体を反転させ背を向けた。

「ガードは上半身、受けに回ったから両足は止まってるよな？」

「あい、その通り」

「両手両足が動かない事を確認し背を向けた。背中を攻撃されるリスクは少ない。葵が俺ならどうする？」

「その捻りを生かして回し蹴りを決める」

俺は葵が言うとおりに腹部に脚を動かした。

体を薙ぐ動きを見せ、体の手前で脚を止めた。

「先の先、後の先の考え方だ。お前なら分かるだろ？」

「ボードゲームと同じだね。先に動いて敵をかく乱、後手に回って

「一步先の手を打つ」

「読み違えて窮地に陥った場合は紅霞で回避を試みる。先に切り札を見せたら負けるぞ？」

葵は腕を組んで考え込み、納得の表情でコクコクと頷いた。

飲み込みの早い弟子だと感心しつつ、次の段階へと葵を導いた。

「お前さ、キヨウさんに師事してだろ？ 教わっていて面白くなかったんじゃないか？」

「うん、後手に回るばかりで防戦一方。息を吐いた瞬間にズドン、それで終わり」

正直葵ではキヨウさんの動きを追いきれない。

目一杯手加減してくれたとして、それでも目で追うのが精一杯だと思っ。

「キヨウさんは葵より速く動けるから、葵は受け手に回るしかないもんな」

「うん、いつもキヨウちゃんのターンだった」

「紅霞を使えば攻撃を回避し、前に出て打って出る事が出来る。けど、初撃を回避するために使うべきではないかもな」

「なるほど……」

正直キヨウさんなら、それでも当ててくるだろう。

A++レベルの人に、びっくり箱は通用しない。

「虚を突くのは準備が必要。ヒマラヤ、ヒマラヤ、ヒマラヤ……、世界で一番高い山はなんだって要領だ」

「ふみゆ、必殺技なんだね。紅霞って……」

正直戦闘というのは力と力の競い合いではない。カードゲームという駆け引きの要素が大きい。

相手が好手を持っていれば、可能な限りそれを封じる事を念頭に置く。

それでも封じきれない時は力の差と諦めがつく、だが頭一つ上の力量ならばひっくり返す事が出来ると思っている。

「まずは自分の切り札は隠したまま、敵の性格や行動パターンを読む。そして体術、戦術、切り札を駆使して勝てばいい」

「私、そういうの得意かも……」

「それにはまず、手札の一つ『体術』を磨かないとな」

「はい」

それから小一時間ほど体術の基礎訓練を施した。

手解きをしながら、自分でも疎かになってる部分に気が付く。

それを再確認出来た事は、俺にとっても有益だった。

「これから毎日教えてね」

微笑む葵を目にして、重大な事を思い出した。

天使のスマイルをぶち壊すのは忍びないが、断腸の思いで伝えね

ばならぬ。

「俺は仕事でしばらく家に帰らない」

「え、その間は私はどうなるの？」

予想通り葵の表情は曇った。

葵の後見人となる件など全く考慮していなかった。さてさてどうしたものか。

「葵、あしたのジョーって漫画を知ってるか？ 打つべしってやつ」

「あしたのためにその1……。ジャブは攻撃の突破口を開くため、敵の出足を止めるため左パンチを小刻みに打つ」

「よく知ってるな、さすが我が妹だ。その方法でいこう」

かの有名な漫画、あしたのジョーの一幕だ。

肉親でもない丹下段平は、少年院に入ったジョーに面会する事が出来ない。

段平は葉書きを使って、塀の内側にいるジョーにボクシングを教えたというエピソードがある。

「メールで修行メニューを送るから、それを実践してくれまいか？」

「仕方ないな、ちゃんと教えてよね……。約束だよ？」

苦肉の策で提案した連絡手段だったが、それ以前に重大な問題がある事に気付いてしまった。

メールで訓練メニューを示唆するのは俺。

葵の能力を判定するのも俺だ。

これって『俺の教え方が悪い』なんてごねられてもおかしくない状況じゃないか？

「お兄ちゃん、物凄く困った顔してるけど？」

「い、いや、大丈夫だ、なんでもない」

「大丈夫そうじゃないよ？ 青ざめた顔してるもん」

葵が頭の回転が鈍い子で助かった。

心配げな葵の肩を叩き、家路に向かう方向を指差した。

さあ、家に帰ろうぞ、我が妹よ。

「よく考えると……」

「考えなくていい！」

なにも考えてくれるな。せめて俺が旅立つ前まで気付かないでいてくれ。

妹に甘い兄を続けるのは大変だ。そう実感した朝だった。

『08・Tomorrow's Joe』(後書き)

BGM 尾藤イサオ 明日のジョー

BGV ハイキックガール 武田梨奈

『09・Generation Gap』

葵との朝練を終え、俺達は帰路へ就いた。
訓練メニューについて色々考えてみたが、試験に目標を定め育てるのは良くないと思う。

やはり長い目で見て基礎から教えていくべきだ。

上機嫌で自転車を漕ぐ妹へ、最初の特訓メニューを伝える事にした。

「葵は蹴り主体の距離を取った戦い方をする、チェスのナイトみたいだと思わないか」

「ふむ……、縦横四方向に桂馬飛び、トリッキーな動きが出来るけど、逆に近づかれると弱い……ナイト？」

ナイトは縦横四方向に飛び、変則的な動きをする駒だ。

将棋の桂馬に似ているが、縦横に動けて使い勝手が良い。

接近を許せば反撃することが出来ず、逃げる事しか出来ない駒。

だが変則的な駒の動きを駆使すれば、最強の駒であるクイーンでさえ手玉に取る事が出来る。

葵の戦い方をナイトに例えたが、駒と同様に弱点はぶつちやけ近接戦闘だ。

組み伏せられたら打つ手が無い。

「もしかして……、弱点を克服しろって事？」

「いや逆だよ。小器用に纏まる必要はない。まずは長所を伸ばすべきだと思う」

弱点を知りつつ得意な距離で戦う……、それは戦闘する上で重要な事だ。

近接戦闘を得意とする俺にも不得意な間合いがある。それは乃江さんも同じ事。

俺や乃江さんだけじゃない、美咲隊のみんなも同様に得手不得手を持っている。

それを理解して有利な条件で戦い、不利な状況は仲間でカバーしあっている。

葵もそういう特性を理解するべきだと思う。

「癖や欠点を理解するって事は結構重要なんだ。その時々 of 戦い方を知れば、どんな状況でも戦い様はある」

「ふむう……、道は険しいね」

俺も乃江さんに癖や欠点を指摘された事は無い。

欠点は利点の裏返し。そう一言だけ伝えて何も言わずに教えてくれた。

葵は近接短打を覚えれば強くなれる。けれどそれは対処方法の一つでしかない。

葵はまだ白紙のキャンパスのようなもの。得意としていた蹴り技を殺す事に繋がりがかねない。

「算数が苦手なら得意な国語で点を取れば良い。苦手な算数に費やす時間があれば、国語で100点を取る事だって出来る」

「言われてみたらそうよね。得意科目で勝負すれば負けないんだもん」

葵は納得したように頷き、ペダルを漕ぐ足を早めた。

何か吹っ切れたような雰囲気伝わってくる。

「人に何かを教えるつてのは、案外大変なもんなんだな」

「ん？　なんか言った？」

キョトンとした表情で振り返る葵に、俺は苦笑いを返した。

短期間ながら真琴に教えた。だが、あの時も神経を使わされた。与えた課題をやり遂げるまで家に帰らないし、あんなに思いつめていとは思ひもなかった。

葵はあんな事はしないとと思うが、一応釘を刺しておいたほうが良いか。

「葵、訓練は朝と放課後の二回にしておくように。長くやっても集中力が伴わないと意味が無いからな。分かったか？」

「うん、分かつ……」

葵が生返事を返したと思った途端、勢い良くブレーキをかけた。突然の急制動に対処できず、俺は葵の背中に鼻を打ちつけた。痛む鼻を撫でながら、葵の背から顔を引き剥がした。

「お兄ちゃん、アレ」

葵が指差す先は俺達の家の方角だった。

目を凝らすと門の前に小さな人影があった。

家の前で腕を組み、右へ左へウロウロ。かなり拳動不審な振る舞いをしている。

「真琴？」

「真琴だよな」

今日から真琴と行動を共にする予定だが、約束した時間はまだ先のはず。

それに駅前で待ち合わせたはずだが……。

首を傾げる俺に対し、葵は八工を追う様に手をブンブンと振った

「なんだ？」

「自転車を降りて！」

「なんで？」

「誤解される。お兄ちゃんベッタリの妹だと思われる……」

葵はそう言って照れくさそうにそっぽを向いた。

乃江さんや美咲さんに見られても平気なくせに……。

葵にとって真琴は下級生。年上の威厳を保ちたいって心境なのだろうか。

「ほらよ。行こう」

自転車から降りて家に向かった。

葵は少し距離を取って俺の後を付いて来るようだ。

俺は構わず大股で歩き、手を振って大声を張り上げた。

「おーい、真琴！」

真琴は俺の声を聞いてツイントールを跳ね上げた。

キヨロキヨロと辺りを見回し、俺達に気が付くと元気一杯に手を振り返した。

相変わらず犬っばい動きをする奴。

「カオル先生、それに葵さんまで、早起きですね！」

真琴は俊敏な動きでダッシュし、俺達の前で踵をすり減らし急停止した。

そして俺と葵を交互に見て、目を輝かせた。

そんな無駄に明るい真琴を見て、思わず『トイレの100ワット電球』と名づけたくなった。

「日の出と共に起床し、日没と同時に眠るのは三室家の生活サイクルだからな」

「そ、そうなんですか!」

「信じるなよ……」

びっくりまなこで俺を見つめた真琴だったが、少し悲しそうに眉を顰めた。

くそう……、そんな顔をするんじゃない! お約束なのに良心が痛むじゃないか。

「葵に稽古をつけていたんだ。退魔士を目指して試験を受けるんで、恥をかかない程度に鍛えておかないとな」

「葵さんが退魔士に?」

真琴は葵に向き直り、ハンドルを掴んでいた手を引き剥がして握

り締めた。

葵は照れくさそうな表情をしつつ、顔を引き攣らせて真琴を見つめている。

「葵さんならきつと優秀な退魔士になれます！ オーストラリアと一緒に戦った私が保証します！」

「そ……、そうかな」

そういえばそんな事があつたな。

葵と真琴はラビットフット狙いのハンターに狙われたんだつた。

その時は桃の仙女撫子の羅経盤による占いをうい、最大の戦果を収められる場所を探した。

そして珊瑚の剪紙成兵術で撃退したのだ。

「あの式神を操る葵さんのカッコ良さ、今でも忘れられません！」

「あ……、あはは……。あの時は最後霊気切れで、お兄ちゃん達に助けられたんだけどね」

そう言つて謙遜しているが、霊気切れを予測して式神を使い助けを求めたのも葵だ。

こういつ知略に富んだ発想は退魔士向きだと思えるのだが。

「人の裏をかく狡猾さ！ 勝つたと思わせて逆転勝利！ 敵に屈辱感を与えた時の葵さんの顔つたら……」

「そこ！ それ褒めてない！」

息の合ったボケとツツコミ。

中学生同士のオーラっていうか、高校生の俺には近寄りがたい何かがある。

世代間ギャップって奴だろうか……。

「汗掻いたからシャワー浴びてくる。葵は真琴を家に招いて茶でも入れて差し上げる」

「はい」

俺は加齢のショックを払拭すべく、家に戻って風呂場に直行した。そついや旅の準備も、今後の対策だって済ませていない。……難題は山積みのままだ。

肌にピリピリと痛みを感じる熱いシャワー。

葵の蹴りをガードした箇所が、内出血を起こし赤く腫れ上がっている。

俺はその傷を撫でながら、気持ちはもう数時間先の事を考えていた。

「やはり中之島刑事を頼るか。霊的事案専門だけど、麻薬やヤクザの動向も調べるツテを持っている」

シャワーを浴び終え、脱衣場でバスタオルを首に引っ掛けた。

そして銀色の携帯を取り出し、中之島刑事のメールアドレスに言付けた。

携帯を二つに折り畳み着替えを済ませて、まだ濡れた頭をタオルで拭った。

風呂場を出てリビングに向かうと、葵と真琴が紅茶を飲み、母さんが眠そつに目を擦っていた。

「いいですか葵さん。物質具現化っていうのは」

「ふむっ」

葵はテーブルに身を乗り出し、向かいの真琴にかぶり付いている。真琴は目を閉じながら人差し指を立て、目の前の空間に8の字を描いた。

指先から放出された靈気は空間に固定され、薄っすらと黄緑の光を放っていた。

だが驚嘆すべきは空間に靈気を留める技ではなかった。描かれた靈気は蝶を模り、ゆっくりと空を舞い始めたのだ。

「若いのに器用な子やな。その年で鬼神召喚の法を使いこなせるとは……」

母は空を飛ばたく蝶を見つめ、呆れたように溜息を吐いた。

幻獣召喚という言葉は嫌と言うほど聞かされたが、鬼神召喚の法は初めて聞く。

興味津々の俺達を見つめ、やれやれと言わんばかりに口を開いた。

「式神の本来の姿や。紙を媒介にする場合、式神は力は弱く、送りこんだ気の続く限り使役できる」

「珊瑚の剪纸成兵術と一緒にだね」

「けど鬼神召喚はちょっと違ってて、外界から鬼をそのまま召喚させて術者の思いのままに操る術や」

真琴も初めて耳にするのか、興味深々で目を見開いている。

母はそんな真琴に聞かせるように解説し始めた。

「鬼神を呼ぶ代償は己の霊気なんや。身の丈に合わん強い鬼神を呼べば、逆に自分が食い殺される事もあるんや」

「へえ……。じゃあ私が大アルカナを呼べないのは、身の丈に合っていないからでしょうか？」

「いや、鬼神召喚に必要なのは霊力と想像力や。目を閉じればそれが思い描けるほどのな。それが蝶であり剣なんやろと思う」

母はそう言いつつ、何かを思い出したように手を叩いた。

そしてじつくりと、真琴を包み込む霊気を探るように目を細めた。

「それにあんたの霊気は木行が強いから、相性がええんやろ。西洋理論でいうと剣は風、同系統の属性やもん。蝶も同じく風やし」

そういえば山科さんも同じ事を言っていたような。

うちと真琴が相性ええのは、属性が一緒やからもあるんやで。グラビティも真琴に良う懐いとる……って。

「ほええ、お義母さんと同じ事を言われちゃった……」

真琴は目を丸くして、尊敬の眼差しで母を見つめ返した。

母はコキリと首を傾げ、俺と葵に目を向けた。

「この子は山科家の子だよ。元は藤森姓だけど、今は山科を名乗っている」

母と山科さんのお母さんは同じ京都出身で年も一緒。同じ女学校に通った同級生だった。

同じ京都で退魔行を営む家系だから、もしかして関係あるのでは

と聞いてみたが、まさかそんな縁があつたとは正直驚かされた。

「そつか。さつき紹介された時、なんか嫌な予感がしとつたんや。あゝ、なんや……、なんと云つたらいいか分からん……」

「?????」

真琴は頭の上にクエスチョンマークを幾つも並べ、齒切れの悪い言葉を並べる母に小首を傾げた。

母は真琴の肩に手を置いて、憐れむ様な目を向けた。

「ほんま不幸やな。挫けんと生きていくんやで？　なんかあつたら相談乗つたるからな！」

「ええ〜っ！」

真琴は不幸少女認定され、驚きの声を上げた。

素直な真琴をからかうんじゃないと思つたが、母も真実味溢れる表情して涙さえ浮かべている。そんな表情をされると何も言えない。

「うちはあの子の騒動に巻き込まれて、何度も死ぬ思いをしたんや

……。本人は自覚してないけど、天性のトラブルメーカーやねん……」

「……」

俺は目を閉じて山科さんのお母さんを想像してみた。

だが貧困な想像力では山科さんの顔しか思い浮かばない。

けど……母の言っているイメージって、まんま山科さんに当てはまってしまう気がする。

山科さんて母親似なんだろうか。

「いいえ、お義母さんも山科の家の人達も、みんないい人ですよ。私は幸せ者です」

「ええ〜っ！ そうなん？ 年とって落ちついたんやるか？」

今度は母が驚きの声を上げた。

うちの母にここまで言わせる山科さんのお母さんって……、ちょっと怖いかも。

そんな折、葵が俺を指差してなにか合図を送ってきた。

俺の胸ポケットを指差し、携帯の着信を知らせてくれたのだ。

無音無振でいつも使っているから、肝心の時電話を取り損なってしまう。携帯の着信に気が付かないとは、修行不足なり。

見れば音声着信が三回、最後にメールが一通届いていた。

相手の名は中之島刑事からだった。

From nakano shima
To kaoru mimuro

>電話を取れない状況みただから、メールで連絡しておきます。

>大体の事情は理解したけど、正直警察には守秘義務って奴があるって、リーク出来そうな情報は無いに等しいんだ。

>代わりと言ってはなんだけどに現地の案内人を用意しておきます。

>あー、俺の甥っ子で身内だからビビシとシゴいてやってほしい。

>場所は

メールの続きには待ち合わせ場所と時間が記載されていた。

俺は感謝の言葉を文字に表し、メールを返送しておいた。

壁の時計に目をやり、頭の中で路線図を広げてみた。

「12時待ち合わせなのに現在9時過ぎ。ちょっとと言うか、かなりヤバイ時間かも知れんな」

俺は真琴に事情を説明し、慌てて自室に飛び込んだ。

タンスを開けてTシャツを数枚、トランクスを目分量、靴下を一掴みリュックに放り込んだ。

クローゼットを開けて上着を引っ張り出し、お気に入りのジーンズを数本見繕った。

そして机の上に置いていたナイフと守り刀を腰に差し、乃江さんから頂いた手袋をポケットに突っ込んだ。

「相変わらず雑な用意じゃの。色合いとか気にせんのか？」

呆れた表情を向けるカナタとトウカだったが、軽く跳躍して頭の上に乗るとそれ以上何も言わなかった。

だがこいつらの本心は理解している。

その気が無いフリをして、その実旅行気分でいる事を……。

こいつらの頭の中は水饅頭で埋め尽くされているに違いない。

「行くぞ、水饅頭」

頭の上で音符が二個飛んだような気がした。

だが俺達には時間がないのだ。急げ！ 三室カオル。

俺はリビングに取って返すと、まだ話し込む真琴を抱えて家を飛び出した。

葵と母が見送りに出てくれそんな気がしたが、振り返る余裕すらなかった。

「真琴の荷物は？ マンションか？」

「あう……、店の商品を配送するついでに、現地へ送っちゃいました」

さすがというか機転が利く。

昨日インターネットで予約したホテルに直送したのか。

そついや今時宅配は、コンビニなどで24時間配送受付を行っている。くれている。

よくよく考えれば便利な世の中なんだな。

「俺も今度からそつする」

肩からずり落ちそうなりリュックをたくし上げ、真琴の手を引き駅へと急いだ。

今日は土曜日で休日ダイヤ、電車の本数はいつもと違うはず。ここから乗り換えの駅まで一時間。さらにそこから一時間以上。単純計算して考えると余裕で間に合う。

しかし電車の乗り換えに発生する時間ロスや、土地勘の無い場所で待ち合わせ場所を探す時間を考えれば……。

「行くぞ、真琴」

「はいっ!」

目的地の場所は俺たちの住む地区から二つ県を跨った場所にある。近くて遠いというか、俺も新幹線で通り過ぎた記憶しか残っていない。

新幹線で行く京都と同じ時間がかかるけれど、距離で言うとそれほど離れていない。不思議な場所だ。

俺達は可能な限り早く着ける電車に乗り継ぎ、現地に辿り付いた

時には十二時を少し過ぎていた。

「乗り継ぎの駅でホームを間違えたのが痛かったな。アレが無ければ……」

急行発着のホームと各駅停車のホームが別に分けられていた。

俺達は目の前で扉が閉まる急行を見送ってしまったのだ。

悔やんでも仕方ない。早速駅前の案内図を見てメールを再確認した。

「約束の場所は……大黒橋つと」

大黒橋はこの土地では有名な待ち合わせ場所らしい。

駅からそう離れていない場所に、大きく太い字で『大黒橋』と書かれていた。

「真つ直ぐ行って、右、左つと」

俺達は人の流れを掻い潜り、急ぎ足で目的地まで向かった。

駅前の商店街を抜け大きな車道を渡りきった場所に、流れの緩やかな川が流れていた。

繁華街と駅との中間地点に位置する場所は、人の流れも多く活気に満ち溢れていた。

橋の上には数人の人影があり、そわそわと時計に目を落としている。

「うわっ……、先生……アレ」

真琴が俺の袖を引っ張り、声を震わせ硬直した。

微笑ましく立つ男女とは明らかに別種の人物がそこにいた。

怒気とも取れるオーラを放ち、腕を組んで仁王立ちしている男。綺麗に染め上げた金髪をおっ立てて、よく手入れされた細い眉毛、口元にはうっすらと髭。クラツシュジーンズに白のシャツ……。薄っすらとシャツ越しに窺える色鮮やかなタトゥ。何より人を威嚇する目が怖い。彼の周りにだけぽっかりと無人の空間が出来上がっている。

「不良さんかな……。ちょっと怖いカモ」

「あ……、やっぱりアレかな」

なんとなく顔立ちが中之島刑事に似てる。

それより何より手に持ったプラカードらしき厚紙には、やる気の無い字で『三室薫、山科真琴様 歓迎』と書かれていた。

俺は嫌がる真琴を引き摺り、最高の羞恥プレイに耐えている彼のもとへ歩き出した。

近づく俺達に気が付き、彼は迎え撃つように身構えた。

そして俺と向き合うと射抜くが如く見つめ、後ろに隠れる真琴にゆっくりと目を移した。

正直このまま近づけば、ぶん殴られてしまうような剣呑な雰囲気。歩み寄る足が戸惑い、鈍ってしまう。

折れてしまいそんな心を奮い起こし、頭を下げた時間に遅れた非礼を詫びた。

「お願いする立場なのに待たせてしまい、申し訳ありません」

相手は見るからに俺より年上の風格……、自然と口調も丁寧になっってしまう。

ここで愚痴の一つでも聞かされるかと思っただが、彼は予想に反し俺より深く頭を下げた。

45度の角度でピタリと停止し、程よい時間で頭を上げる。お手本のような最敬礼だった。

詫びるべき相手に頭を下げられ、俺は言葉を失ってしまった。それと共に自分の礼儀がなっていないと思いき知らされた。

「叔父貴から優秀な退魔士と聞かされてたんで、人間離れたゴツイ人かと氣イ張ってたんすよ」

見かけよりノリのいい人のようだ。

先程までの警戒した様子もなく、安堵の溜息について背中を丸めた。

彼は中之島刑事に脅かされてここまで来たのだろう。

面識の無い退魔士と聞かされれば誰でも警戒するだろうし、一般

人の彼なら尚更だ。

「人間離れた退魔士なら知ってますが、その人も見た目は普通の人間です。容姿風体は関係ないと思いますよ」

人間離れた人つてのはキョウさんの事だ。

荒事に縁がなさそうに見える風体。どちらかという雑誌のモデルをやっつていそうにさえ見える。

だがいざ戦闘になると、人間離れた強さを誇るのだから性質が悪い。

羊の皮を被った狼とよく耳にするが、キョウさんを例えるのに相応しい言葉ではないかと思える。

「みたいツスね」

彼は真琴に目を移し、そうであろうと感慨深げに頷いた。

どうやら真琴の情報も伝わっているらしい。

彼女が中学生でありながら退魔士ランクB++、人並外れた退魔士だということを理解している……、そう言わんばかりの表情だ。

彼は硬い表情を崩すと、もう一度頭を下げ照れ臭そうに顔を上げた。

「姫島虎鉄ツス。ご指導よろしくツス」

歯切れの良い言葉とその場の勢いに流され、思わず頭を下げた。まいそうになった。

いや、実は半分ほど頭を下げてしまっていた。

だが、ちよつと待てよ。

腑に落ちない言葉を聞かされ、寸での所で生返事を飲み込んだ。

「……指導？」

気になる言葉を反芻し、頭の中で何かが弾けた。

そうあって欲しくないと祈りつつ携帯を開け、中之島刑事のメールを再確認した。

>あー、俺の甥っ子で身内だからビビビシとシゴいてやってほしい。

シゴく。

【扱く】

細長い物を片手で握り、もう一方の手で強く引き抜く。
いたためつける。転じて、厳しく訓練する。

文脈から察するに、厳しく訓練するという言葉に取っついていい。
と同時にしてやられた感が押し寄せ、脱力してガツクリと突っ伏してしまった。

「やられた。ロリコン刑事め……」

文章の雰囲気だけを読み、中之島刑事の意図を読み違えた。いや、むしろそうなる様に書いている気がする。

俺はそつと携帯を閉じ、期待に満ちた目を向ける彼、姫島虎鉄に目を向けた。

「あ……、あの姫島さん？俺達がここに来た理由はご存知ですよ
ね？」

「呼び名は虎鉄でいいッスよ。叔父貴から大体の事は聞いてるッス。

優秀な退魔士が出張^{ては}る仕事ツスから、かなり危険な仕事なんスよね
?」

ならばボランティア活動などではなく、荒事だのご理解いただけ
ているようだ。

そうなると尚更『シゴク』という意味が理解し難い。

小首を傾げ思案に暮れていると、真琴が袖を引っ張り合図を送っ
てきた。

そして俺の腕を強引に引っ張り、姫島虎鉄に聞かれぬよう距離を
取って耳打ちをした。

「退魔士を目指している方ではないでしょうか？」

「……まさか」

いやしかし、そう考えると合点いく。

俺と真琴は遠巻きに姫島虎鉄を見つめ、彼の風体を再確認した。

天高くそそり立つ金色の髪、若干和らいだとはいえ、未だ鋭く感
じられる目つき。

その全てが無用に注意を引き、隠密活動に全く向いていない。

俺の知る退魔士像とかけ離れたものだった。

「あ、虎鉄さん？」

「なんでそんな遠い所から話かけるんスか？」

姫島虎鉄は居心地悪そうに首の後ろを掻き、ずかずかと俺達に歩
み寄った。

本人には悪気はないのだろうが、見た目で気圧されてしまいそう
になる。

「もしかしてその道を目指しているとか……？」

「そうツスよ。叔父貴がアレだし、影響された……って訳じゃないツスけど、自然とその道を目指すようになったツス」

中之島刑事は一般の警察官と違い、霊的案件を扱っている特殊な立場にいる。

なにかしら特別な才能を見出され、その部署に配属されたと考えれば……。

そういえば『犬神案件』の時、常人では考えられない程の瘴気を帯びていながら、ケロツとした様子で別所姉妹ん家に来てたっけ。

内に秘めた才能が眠っていて、瘴気に耐性が強いのかも知れない。もしかすると、もしかするかもな……。

そうなるかと近親である姫島虎鉄にも、同様の才能があっても不思議ではない。

俺は目を凝らして姫島虎鉄の霊気を探った。

確かに一般人より霊気が潤沢、しかも淀みなく体の周囲を循環している。

真琴も同じく霊気を探っていたのか、自論を裏付ける結果に納得した表情を見せた。

「あの、虎鉄さん？ 俺達は案件調査で一杯一杯なのです。人に教えるほどの余裕はないのですが……」

「その点は理解してるツス。先輩方の仕事っぷりを見て、明日への糧にしたいだけツスから！」

あ、そう。

やんわりと断ろうと思ったのだが、思いのほか食い下がってくる。

彼の表情を見る限り、決して悪気はないのだろうけど……、手ごわいな。

「あ、それと……」

「はい？」

「俺、年下ツスから『さん』付けじゃなく、呼び捨てでイイツスよ？」

「はい？」

二度目の『はい』は尻上がりのイントネーション。

どう見ても年上の風格　と思っていたが、意外な言葉が虎鉄の口から出た。

俺も言われてすぐ心の中で虎鉄と呼び変えるあたり、たいがいい性格をしていると思うが。

だが相手の言つまま鵜呑みにするのはどうか？

「俺は二十歳過ぎじゃないぞ？」

「知ってますよ。高二って聞いてますから、俺より一つ年上ツスよね？」

俺は真琴と見つめ合い、ムンクの叫びに似たポーズを取った。

橋を行き交う人が通り過ぎる中、俺と真琴の周りだけ灰色に染まり、時間が止まった様に静止した。

「　高校一年？」

俺と真琴は同時に口を開き、信じられぬといった表情を向けた。虎鉄は顔を真っ赤にして口元を引き攣らせ、憤慨した様子で手を腰に当てた。

「いい加減失礼ツスよ。これでも気にしてるんスから！」

そう言ってふて腐れる表情には、年相応の若さを感じる事が出来た。

俺は虎鉄の肩をポンポンと叩き、笑いを堪え口を開いた。

「虎鉄、聞きたい事が山ほどある。落ち着ける場所に案内してくれ」

「三室さんって、案外裏表の激しい性格なんスね……」

虎鉄は呆れたように天を仰ぎ、俺達を手招いて歩き出した。

大黒橋から繁華街を通り抜け、少し歩いた場所で彼は振り返った。

「八上公園やがみこうえんって言うツス。大黒橋と対になって造られた公園なんスよ」

彼はそう言って笑みを浮かべた。

大黒橋の由来は七福神の大黒天だろう。大黒様はおおくこぬしのみこと大国主命と同じ視されている。

八上公園は大国主命の妻であるヤガミヒメ（八上比売）の名を指すのだろう。

俺にとってはスサノオの娘スセリヒメの方が、強烈な個性を持っていて覚えが良いのだが。

「因幡の国の美しき姫……か」

その美しい姫の名に恥じめ、手入れの行き届いた緑化庭園だった。季節毎に目を楽しませる草花が植えられ、中央には花崗岩で出来た大きな噴水が配置されている。

子供たちが走り回る公園というより、大人が楽しめ憩う場所のように思える。

「こっちツス！」

虎鉄は遊歩道の脇に設置された東屋に向かった。

木の切り株に見立てたテーブルが一つ、その周りに腰掛けられるよう椅子が配置されていた。

「叔父貴が言ってたツス。人に聞かれない話は、こっという場所で話すものだって」

「守秘を重んじる組織では、飲食店やエレベータ内、電車などでの会話を禁じている。」

誰もが経験した事があるだろうが、喫茶店などの会話は聞かれないようで、隣席に話の内容は筒抜けだ。

こないだ喫茶店で涼を取っていたら、隣席でカップルが別れ話をしていたのを覚えている。

俺も退魔士になってから、主語抜きで話したり隠語を用いたり、変な癖が付き始めている。

「じゃあまず、この街の情報を聞かせてくれないか？」

駅の売店で買っておいた地図を取り出した。

本の形に綴じられた地図帳ではなく、大きな紙一枚の地図。

歩きながら見るには適していないが、作戦会議をするのに非常に便利なのだ。

「まずは……」

思いつく限りの場所を聞き出し始めた。

まずは繁華街の中でも特にディープな地区。一般人が立ち寄らない風俗街などを聞き出した。

そういう地区には用途が限定されたホテルが多い。

最近は無店舗型の風俗店が多く、サービスを提供する場所としてそういったホテルを利用するからだ。

快楽を刺激する音楽麻薬を試すには、うってつけ場所と言えるだろう。

次に人の流れを問い質した。

活発に利用される駅などから、住民が多く住む地区へのルート。

裕福層から一般層の住む場所と、利用する交通機関をつぶさに聞き出し、惜しげもなく地図上にペンを走らせた。

尋問に似た作戦会議は、時計の針が一回りするまで続けられた。

「ん、まあ。今の所はこんなものか」

俺は真琴に聞き漏らしがないか確認し、ペンをテーブルに置いた。さすがの虎鉄も疲れ果て、テーブルに突っ伏してグッタリとしている。

そんな彼を労うべく、公園内を見回してポケットの小銭を右手で探った。

「先生、私を買ってきます」

真琴には俺の心の中が読み取れるらしい。

ポケットから探り出した500円玉を手渡して、察しの良い相棒に頭を下げた。

「俺は」

「先生はコーラでしょうか？ 虎鉄さんは？」

「すみません、気が利かなくて……、俺が買ってきてきますよ」

虎鉄が気を利かせて買いに立とうとしたが、真琴はきっぱりと首を振った。

そして少し意地悪な表情を浮かべた。

「オーダーしてくれないと、とんでもない飲み物を買ってきますよ？」

「あ、それは勘弁ツス。日本茶を！」

真琴はほくそ笑んで席を立ち、鼻歌混じりの軽やかな足取りで買いに走った。

虎鉄はそんな真琴の後姿を見つめ、感心したように目を細めた。

「俺が気を使わないように、あんな態度を取ってくれてるンすね」

「虎鉄って意外と鋭いな。真琴はああ見えて凄く大人だよ」

もしかすると俺より精神的に大人かもしれない。

見かけは小さな女の子だが、舐めて掛かるとしつぺ返しを食らう。

「そういう些細な事を見抜く感性って、退魔士に必要な要素だと思
う」

俺は小さくなつていく真琴の姿を目で追い、神妙な面持ちでいる虎鉄にそう聞かせた。

中之島刑事にいう『シゴク』ってのは、こういう事なのかも知れないな。

体を苛め抜くような修行ではなく、心を育てるような修行……。

「三室さん！ 物凄く不安になつて来たツス。俺なんかが退魔士になれるんスかね？」

虎鉄は急に不安そうな表情をして、テーブルに身を乗り出した。いきなり優等生の真琴を見たら、不安になるのも分かる気がする。

「結構いい体つきしてるけど、鍛えてるのか？」

最初は虎鉄の事を押し付けられたお荷物だと思っていた。

だが礼儀を重んじる態度や、こういった繊細な心に触れ、少しずつだが彼の事を気に入りはじめた。

中之島刑事に言われたからではなく、なにか彼の為に役立つのなら……、そう思い始めていた。

「軽く手合わせしてみるか？」

俺はそう言い、ナイフと守り刀を腰から外して、テーブルに置いて武装解除した。

虎鉄はテーブルに置かれた武器を見て、強張った表情で生唾を飲んでた。

だが彼は恐怖で臆してしまつたわけではなかった。

強張った表情が少しずつ変化し、好奇心に満ちた目を俺に向けてきた。

「いいッスよ。というか願ったり叶ったりッス」

虎鉄は掌に拳をぶつけ、ニンマリを笑って立ち上がった。

こついうノリは嫌いじゃない。逆にやる前から負ける理由を探す……、そういうタイプは好きじゃない。

そういう意味で彼は合格。前のめりの姿勢があれば、これからも伸びていくだろう。

俺と虎鉄は適度な距離を取り向かい合った。

「遠慮して手加減なんてしたら、教える気が失せてしまうぞ？」

「ういッス」

虎鉄はそう返事をすると共に、力強く踏み込んできた。

野獣の咆哮に似た掛け声と共に、思い切って引き絞った拳を顔めがけて打って来た。

常人の拳よりキレはあるものの、俺の見てきた拳と比べると格段に劣る。

それに耳の後ろに構えた拳も、馬鹿正直な踏み込み位置も、腰の入れ方も、全てが予測してくださいといわんばかりだった。

俺は掌で拳を受け流し、脚を少し動かして身を振り、拳と共に突っ込んでくる虎鉄を受け流した。

「体重を乗せたい気持ちは分かるけど、動作が大きくて予測しやす
い」

「んなッ！」

そんなはずは……、彼はそう言いたかったのだと思う。

だが拳が空を切って、乗せた体重がそのまま仇となって体勢を崩

している。

正直彼は戦闘の素人だ。人よりほんの少し腕っぷしが強い程度だろう。

彼は振り返り、もう一度拳を振るった。

先程より慎重に狙いを定めているようだが、まだまだ甘い。

俺は彼の射程内で足を止め、上体だけで拳を回避した。

渾身の攻撃を幾度と無く避けられ、虎鉄は息を荒げて膝に手を置いた。

「虎鉄は卵を掴む時、力一杯で握り締めるか？」

「え？ い、いや、そっと掴むッス」

「技術の時間とかで釘を打つ時あるだろ？ 釘を支えた指を見て、力一杯金槌で打てるか？」

「最初はコンコンと打って、手を離して叩くッスよ」

俺は満足のいく答えを貰い、彼の目の前に立った。

そして無防備な彼に、大きく手を振りかぶって殴るポーズを見せた。

常人なら頬を叩かれると思いきや身を固める。彼も同様に手で頭を覆い、俺の手を避そうとした。

「な？ 反射的に身構えるだろ？ 誰でも本能でそうする」

「は、はあ……」

「虎鉄の戦い方は、弱い者に対する戦い方だ。大きな声を上げて手を振れば、弱い者は身を竦ませる。動きの止まった標的は誰でも殴

れるんだよ」

「……」

「逆に恐怖に耐性のある者だとどうだろう？ 打つタイミングを知らせてくれ、殴るぞと言わんばかりのパンチが来れば……」

「それが今の状況って訳ッスね」

「大振りのパンチはカウンターを合わせやすい。虎鉄は踏み込んだ勢いをそのままダメージに変えられ、足が止まった所でトドメを刺される」

俺は胸元に構えた拳をそつと伸ばし、虎鉄の胸元に触れさせた。力を抜いた弱々しい力で、蚊を殺す事すら出来ないパンチを打った。

「これが最小の攻撃だ。最初から大きく結果を求めるのではなく、小さく短く当てて行くのが基本形」

そして二発目は少し強めに、少しだけ早く打ち込んだ。

ポスツと音を立て、その拳は虎鉄の胸に収まり、虎鉄は怪訝そうな表情でそれを見つめている。

「行くぞ、段々と速くなるからガードしろよ」

右、左、右と徐々に拳速を速めていく。

最初は軽々と掌で受け止めていた虎鉄であったが、徐々に表情が険しくなっていく。

そして虎鉄の掌が音を立て、拳を受け損ない大きく弾かれた。

「力を込めれば筋肉は固くなる。強く打とうとすれば速度が失われ、速く打てば力が失われる。筋肉つてのは強さと速さは両立しにくく出来ているんだ」

「なるほど……、俺は最初一発当ててやろうと力んだッス。それがそもそもの間違いって訳ッスね？」

「正解」

距離を取ったのなら、体重を乗せる事だけを考え、速く動く事だけに専念すべきだ。

拳は手を伸ばし、相手に当たる瞬間に伸ばしきれば良い。

タイミングがピッタリ合えば、その拳には加速した体重が乗り、力一杯殴らなくても同等の力を出せる。

「本職のボクサーなんかは、胸の前から伸びきるまで最短最速を求め、相手に拳が触れるか触れないかのタイミングで腰を軸に回転させて、破壊力に変えるんだ」

俺は虎鉄の胸元にゆっくり手を伸ばし、触れる手前でワンステップ踏み込んで腰の回転を拳に伝えた。

虎鉄はドンと突き飛ばされるように後ずさり、胸に残る衝撃を手で撫でながら感じている。

「不思議な感じっすね。全然体を動かしているように見えないのに、いっぱしのパンチと同じ威力ッス」

「釘打ちは力じゃなくタイミングとインパクト」

丁度良いタイミングで真琴が缶ジュースを抱き帰ってきた。
そしてジュースの缶をテーブルに置き、振り返って満面の笑みを
浮かべた。

「私も一つお教えしましょう」

真琴は手を伸ばし虎鉄の腕を取った。そのまま腕を持ち上げて、
魔法でも使ったかのように投げ飛ばした。

合気道に似た理屈だと理解できるが、素人相手とはいえ、警戒す
る相手になかなか出来るものではない。

「人の体の動き、力の流れを読んで、それを導くだけで人は倒れる
んですよ」

「全然力を込めてなかったのに、気が付くと天地がひっくり返って
いたッス」

「そういう事。力が全てじゃないって分かった？」

真琴の魔法はそれだけじゃない。

無意識に身構える虎鉄に、手を掴んで体の軸をほんの少しずらす。

そして真琴と面識の薄い虎鉄が、女の真琴に対し臆する体の動き
まで計算に入れた。

真琴もかなり修行を積んでいるようだ。

「さあ、飲もうぜ」

俺はジュースを二つ取り、真琴達に投げ渡した。

真琴は缶を受け取り喉を潤したが、虎鉄は神妙な面持ちで缶を見
つめている。

「どうした、虎鉄？」

「やられっぱなしでへこんでるんす」

虎鉄は缶を開け、豪快に喉を鳴らした。

そして缶を椅子に置くと、挑戦的な目を俺に向けた。

負けん気の強さも退魔士向きだ。これ位で俯くのなら退魔士なんか慣れっこ無い。

「あれで俺の力量を測られると困るツス。武器を持ってない相手に卑怯かと思ってたツスけど……」

虎鉄の靈気が膨らんでいく。

体内に内包した靈気が増えている訳ではない。周囲の気を取り込んでいるのだ。

「俺の隠し玉ツス。その地の力つてか、なんか説明出来ないっすけど、靈気に乗せ出来るツスよ」

俺はコーラの缶をテーブルに置き、ナイフと守り刀を腰に差した。彼が見た目と相反し、土地の由来に詳しい理由が分かった。

彼はその土地に帯びた靈気を借り、能力を発現させる。彼なりに土地に纏う気の強弱を調べているのだろう。

ここは神話の世界の姫の名を冠した公園だ。どれ程の力を帯びているか楽しみだ。

「行くツスよ」

虎鉄は地に掌を押し付け、地の気を集めた。

そして掌をそつと引き離すと、神々しい光を纏った何かを取り出した。

物質化能力。真琴と同じ系統の能力だ。

まばゆいばかりの光が弾け、虎鉄の手には物質化した武器が携えられていた。

黒光りするパイプ椅子。クッション材もチープなウレタン素材、会議室等によく用いられている椅子だ。

「……」

「……」

俺は氣勢を殺がれ、椅子に座り直してコーラの缶を口に運んだ。

真琴は見て見ぬ振りをして、目を逸らしている。

「あ、いや、これは……」

これは何かの間違いだと言わんばかりに、もう一度公園の気を集める虎鉄。

そして再び具現化を試みた。

今度は先程より綺麗なパイプ椅子が出て来た。打突武器としては使える気がするが、プロレスの凶器じゃないんだから……。

二つ目の椅子を具現化し、力尽きて突つ伏す虎鉄。

「人工的な構造物だと、ハズレが出る事が多いんすよ」

彼の能力は未だ未知数。

大当たりを引けば手強そうだが、人工的構造物以外の、自然に満ちた場所を探すのは難しいだろうに……。

俺は憐れむような目を虎鉄へ向けた。

俺達は情報収集の後、虎鉄と一旦別れてホテルへ向かった。
正直後に合流する手間を考えたなら同行して貰った方が省ける。
そう言っっては見たものの、虎鉄曰く。

「いや、俺はそんな野暮じゃないツスよ」

彼は真琴にウインクを一発決め、メールアドレスを交換して街に消えていった。

言っている意味が全く理解できなかったが、調査までゆっくりしろって事ではないかと察した。

長旅でお疲れでしょう、ではごゆるりと……みたいなものか。

ホテルは大黒橋から程近く、かなり便のいい場所にあった。

俺はホテルの前に立ち看板を見上げた時、怖気に似た何かを感じ取った。

「あつ、奈良で宿泊したホテルと同じ系列ですね。予約した時は気が付かなかつたです」

残念なことに俺も気が付かなかつた。

気が付いていればこのホテルなんか選ばなかつたのに……。

俺はあれ以来ホテルに宿泊するに当たり、細心の注意を払うようになった。

今回は勘繰られぬように、俺と真琴は兄妹という設定にしてある。ホテルに到着し、チェックインの手続きをすべくフロントへと向かった。

フロントカウンターは光沢のある大理石で高級感に溢れていた。フロントでは紺の制服にスカートのタイ、凜とした女性がニコリ

と微笑み応対してくれた。

さすが一流ホテル。フロントに配置している女性も隙が無いと思
った。

ここであるのフロント係が出てくれば笑えるのだが、流石にそれは
無いようだ。

「予約していた三室です。チェックインの手続きお願いします」

予約した部屋はデラックスツインの洋室。

シングル二部屋を予約するべきなのだろうが、意見交換をしたり
と、一緒に居るとなにかと便利なのでツインを選択した。

一緒の部屋に泊まり雑魚寝も経験してるし、変に気遣えば逆に勘
繰られそうで怖い。

「デ・ラ・ツ・ク・ス・ツ・イ・ン！ のご予約でしたね。こちら
へサインをお願いいたします」

「その滑舌の良さと声の大きさは社風ですか!？」

涼しい顔で好戦的な言葉を発するフロントに、思わずツッコミを
入れてしまった。

何度も言うようだが、こういう時はフランス人を見習って聞き取
りにくく。

シニエ イシ シルブレ Signez ici, s'il
vous plait だ。聞こえないように喋りやがってくだ
さい。

「妹なんですけど?」

「はい、存じ上げております」

なぜこういった時には小声で喋るんだろうか。

かくして中高生カップルに見える俺達が、『デラックスツイン』に泊まるというのは、ロビー中の人々へ周知の事実となった。

隣接するカフェでは、『最初は背伸びして、いい部屋取るんだよな』と感慨深い声が聞こえてきた。

あーあ、また俺達をネタに話が弾んでいる……。

「『朝食』は2階のカフェで、6時から10時まで。『』宿泊

プランにはビュッフェ形式の『朝食』を含んでおりますので、このカードキーを提示していただければ結構です」

そう説明を受けながら、カードキーを二枚手渡された。

なぜに『朝食』『宿泊』を強調するかなあ。

鈍い真琴も少しソワソワしたような素振りを見せ、辺りを見回している。

俺はカードキーを受け取り、そそくさとその場を離れようとした。だがフロント係はなにか物足りないような表情をして、俺達に訴えかけるような視線を送ってきた。

えっと、この後なんて言っただけか……。

「えと？　なんでしたっけ？」

「お食事は当ホテルのラウンジ階に美味しい和食の店がございます。

『ドラッグストア』でしたら表へ出られて左手にございます」

思い出した。これが……。

相変わらずフロント嬢のニヤリと笑う口元が憎たらしい。

「薬局？」

真琴が小首を傾げ、俺とフロント係を交互に見つめる。
俺は真琴には気付いて欲しく無いと、首を振って否定した。

『ザワツ』

無垢な表情で立つ真琴を見て、ロビー中の客達に火が付いた。

『なんも知らない子じゃないか』、『あれは不味いだろ?』、『
通報しろ』、『かわいそう』的な言葉が飛び交う。

このホテルの客層は相変わらず最悪だ。

「あつ、先生……じゃなかった。お兄ちゃん。荷物……」

真琴はそわそわしつつも、大事な事を忘れていなかった。

俺は今すぐ立ち去りたい気持ちをグツと堪え、フロント係に声を掛けた。

「荷物が届いていると思いますが」

「はい、お預かりいたしております。ですが受取人が山科真琴様と
なっているようですね……」

しまった。真琴の奴いつも通りに本名を書いたのか。

ここで慌てては益々疑われるばかり、ここはドンと落ち着いて対
応せねば。

「妹と俺は腹違いの兄妹で……。話せば長くなるのですが……」

そんな事聞いちゃいない態度で、真琴から身分証明を受け取り確
認するフロント係。

カウンターの中から大きなスーツケースを取り出して、真琴の足元へと運んだ。

「じゅっくり」

フロント係の挨拶も程々に、俺は真琴の手を引きエレベーターへ逃げ込んだ。

部屋へ到着してカードキーを挿し、辺りを見回して部屋の中へ入った。

テーブルの上へリュックを下ろし、ベッドに座ったときには戦いを終えたような疲労が押し寄せてきた。

「もう嫌だ」

「なにがです？ 調査はまだ始まったばかりですよ？」

真琴には俺の気苦労なんか分からない。

へこんだ俺とは対照的に、服が皺にならないようにクローゼットに収納したり、テキパキと動き回る真琴。

最後にパソコンを取り出して、机の上へ設置した。

「真琴はマック使いなんだ」

真琴が持って来たのはデザイナーなんか好んで使うパソコンだった。

それもPROの名が付くハイエンド機。美咲さんの影響だろうか。

「難しいパソコンは苦手なもので……。なんとなく私に合っている気がします」

手早くDHCPの設定を変更させ、ネットを開通させる手早さ。パソコンが苦手なんて言葉が嘘の様だ。

真琴は早速メールを開き、虎鉄から聞き出した情報を仲間へ送信した。

「メール早いな。あれだけの情報量をそんなに打てるのか？」

「いえいえ、携帯であらかじめメモっていた内容を、私宛に送信しておいたんですよ。それを転送しただけですから」

そういえば虎鉄と俺がやり取りしている間、真琴は片手で携帯を握り締めていたっけ。

小中学生って携帯が当たり前で育ってきたから、打つのも早いっというけど。

これも世代間ギャップ？ それとも単に俺が鈍臭いだけなのだろうか。

「皆さんからも近況報告来てますよ。先生にも届いているんじゃないですか？」

ポケットから携帯を取り出し確認したが、メール着信はゼロだった。

退魔士用に配布されたPDAを使ったのか。そういえば仕事に絡むメールは退魔士アドレスを使うように言われてたっけ。

俺はリュックからPDAを取り出し、IP-VPN経由で退魔士サーバへと接続した。

真琴は寝そべったままの俺を見て、メールの内容を読み上げてくれた。

「義姉さんからのメールです。元気にやっとなるか？ こちらは乃江

と二人で駅まで来たで。ご当地ものの店を探してるトコ、ですって」

俺のPDAに届いたメールと内容が違う気がする。
ちなみに俺に届いた内容はこうだ。

『真琴をよろしく頼むわな。お風呂とか覗いたらアカンで〜』

全然信用されていない気がする。

覗くなどいわれたら『鶴の恩返し理論』でつい覗いてしまうのではないか。

真琴は次のメールをクリックし、クスクスと笑いながら声を上げた。

「美咲さんからです。マリリンの発声練習に付き合って徹夜しました。歌の披露は明日以降になりそうです」

そういえば美咲さんは宮之阪さんを連れて、近所のカラオケボックスに突撃したっけ。

この時間に開いてるスタジオなんてありません。24時間営業？むしろ好都合なんて。

泣き喚く宮之阪さんを引き摺ってタクシーに乗せる姿は怖かった。そういえば俺にも美咲さんからメールが届いている。

「即興で考えた詩ですが、こんなのでしょうか？ 自信が無いのでまずカオルさんに見て欲しい」

メールにはその後、歌の詩が二種類届けられていた。

俺は音楽麻薬のメロディを口ずさみ、頭の中で詩と重ね合わせてみた。

真琴は最初怪訝そうな表情をしたが、その意味を理解したのか苦

笑しながらパソコンに向かった。

「歌って変ですよ。歌う人が違えば伝わり方も変わるってどうか。その歌が音楽麻薬だなんて信じられない位です」

「いい詩が乗れば……、この歌は天使の歌に変わるかもしれないぞ」

俺は宮之阪さんの声と美咲さんのギターを想像して、本気でそんな思いを抱いている。

宮之阪さんには気の毒な配役だと思うが、俺なりの中毒患者達への答えだと思っている。

「最後に乃江さんとマリリンさんから……。携帯のカメラで撮られた画像が……」

それは俺には届いていない情報だ。

俺はベッドから身を起こして、真琴の背後に立った。

カラオケボックスで熱唱する美咲さんと、辟易とした表情の宮之阪さんの自画撮り。宮之阪さんのピースサインが痛々しい。

乃江さんからは旨そうな料理の画像が送られてきた。二枚目は料理にがつつく山科さんのアップだった。

「そついえばお腹空きましたね……」

「ラウンジ階に美味しい和食の店があるらしいが……」

真琴はコクコクと頷いて、パソコンを閉じ立ち上がった。

俺もPDAをポケットに突っ込み、守り刀とナイフを差し直して出発の準備をした。

折角の阿吽の呼吸だったが、この世には空気の読めない者もいる。

待つてましたとばかりに、ナイフからトウカ、守り刀からはカナタが飛び出した。

「カオル！ 水饅頭の店に行かんのか？」

「美味しい店なら知っておる。案内するぞ！」

俺の髪を掻き毟らんに、暴れまくる二人の神。

真琴はクスクスと笑い、俺にコクリと頷いて見せた。

気を使ってくれた真琴に頭を下げ、二人の神に案内され甘味処へと向かった。

ホテルを出て徒歩数分、神様お奨めの店『寿老』は、歴史を感じさせる店構えをしていた。

テーブル席が三つ、障子で仕切られた和室の席が二つあり、店員の案内で和室へと通された。

「水饅頭を二つ、抹茶と白玉餡つと……」

「私は白玉パフェとあんみつのセット」

よく食う奴だと思われたか。

表情一つ変えずに対応する所を見れば、甘味処ではそれくらい当たり前なのだろうか。

真琴はクスクスと笑いつつ、携帯を取り出し口を開いた。

「水饅頭と白玉餡、パフェとあんみつの画像を乃江さんに送っちゃおう。甘い物好きだから卒倒するかも」

そついえばうちの母にも同じような事を言われていたな。

冷やししるこ白玉増量、駆けつけ三杯食ったとか……。

それだけ食ってあのプロポーションを保っている乃江さんの不思議。やっぱり訓練の賜物かな？

少しばかりの時間待たされ、意中の甘味が運ばれてきた。

真琴はテールブルに運ばれた甘味を携帯で撮り、いそいそとメールを打ち込んでいる。

俺は苦笑する店員が奥へと下がったのを見計らい、障子を閉めて待ちきれないとウズウズしている神の前に水饅頭を運んだ。

プルプルと瑞々しい葛餅。つぶ餡をそっと包み込むような上品な感じだ。

カナタとトウカは竹包丁を小脇に抱え、水饅頭に飛び込んだ。

俺は抹茶で喉を潤し、二人の満足げな表情を見つめた。

「さて、カオル先生。これからどうしましょうか？ そろそろ相棒の私に教えてくださいね」

真琴そう言っつて、膨れっ面をしてパフェをつついてる。

悪気は無いのだが、行動に関して口数が少なすぎた。

俺の欠点は自分の思考内で完結してしまうこと。察しのいい真琴に頼りきっている自己中心的な所だ。

頭を掻きながら頭を下げ、これからの行動を口にした。

「繁華街は夜、虎鉄と合流してから探ろうと思う。土地勘の無い俺達だけじゃ、無駄足を踏みそうだからな」

「ふむふむ。じゃあ虎鉄さんと合流するまで三時間ほど時間が余りますよね」

「でだ……その合間を利用して、この土地を仕切ってるヤクザの事務所を訪問しようかと思うんだが」

真琴はパフェの白玉を喉に詰まらせ、目を白黒としている。

目の前にあつた俺の抹茶を鷺掴みし、ゴクゴクと喉を鳴らせて飲み干した。

そして音高く抹茶の器をテーブルに置き、マジかと言わんばかりに見つめ返して来た。

「この甘味は美味いだろ？ それを手土産に情報の一つでも聞けたらなあ、なんて」

俺はメニューにある「お持ち帰りも出来ます」の文字を指差した。

『12・Communication』

甘味処『寿老』の座敷部屋。

テーブルに並べられた皿の枚数を数えつつ、先ほど見せた店員の苦笑いを思い出した。

カナタ達は二つ目の水饅頭では飽き足らず、抹茶アイスを平らげて満足そうに刀の中に姿を消していった。

一般人にはカナタとトウカの姿を見ることは出来ない。きっと良く食う客だと呆れていたに違いない。

真琴はといえばテーブルの上に置かれた包みを見つめ、複雑な表情をして唸り声を上げている。

「むづう……、やっぱり行くんですか？」

どうやら真琴はヤクザ屋さんが苦手らしい。

荒事を生業としている方々だが、俺達は殴り込みに行く訳じゃない。そう怖がる事も無いと思うのだが。

俺としては異能力者の方がよっぽど怖い。そこらの感覚にズレがあるのかも知れない。

例えば眼前にブチ切れた綾乃さん、背後はナイアガラの滝があるとしよう。

俺は間違いないと滝目掛けて逃げ出すだろう。

過去に二人生還記録が残っている。狂戦士と正面切って戦うより生存確率が高いからな。

「ここから風俗街に向かう途中にあるし、この案件にかかわる上で避けては通れない。様子を探るだけと割り切ろう」

この地のヤクザに拘るのには訳がある。

麻薬の売買にヤクザが絡んでいるなら、今回の案件はここを叩けば全てが終わる。

もし音楽麻薬に絡んでいなくとも、縄張りの中で動く第三勢力に対し、何らかの情報を持っていると考えていいだろう。

余所者である俺達は彼らにとって目障りな存在。それらを団子一箱で済ませようというのだ……、安いものだと思う。

「俺達が動かないなら、その役目を山科さん達に託すことになる。不得手だから人に任せるってのはどうかな？」

「うぐぐ……」

「それに、想像してみなよ、山科さんと乃江さんの行動パターンを」

一見思慮深そうに見えるがキレると怖い乃江さんと、熱いハートを胸に秘めたイケイケの関西娘のペアだぞ。

乃江さんの才能を見出したのは山科さんだと聞くと、言葉の端々で尊敬の念が伝わってくる。

まあ、あれだ。あのペアのリーダーは山科さんって事……。当然の事ながらイケイケ路線なのだ。

真琴は神妙な面持ちで指を顎に当て、二人の行動パターンを予測している。

そして軽く咳払いを一つ入れ、声色を変えて山科さんの口調を真似だした。

「なあな、乃江ちゃん？　うちってこういうチマチマした行動苦手やねんな。風弾でドカン、それでええやん？」

流石は義妹、まるで山科さんが話していると錯覚するほど特徴を捉えている。

真琴はチラリと俺を見て、何かを訴えかけるように見つめている。

「……ゴホン」

もしかして乃江さんパートを俺が？

俺の表情を読んだのか、真琴はコクリを頷いてニヤリと笑った。

乃江さんの特徴か……。ぶっきらぼうだが端的、過不足無い台詞
回しだな。

「敵対勢力ならばそれも一つの手段だ。しかし今は様子見……、制
圧行動に出るのはまだ早い」

真琴はプツと吹き出し、涙目でテーブルを叩いた。

似ているという事が……。それとも俺が滑稽に見えるのだろうか？
真琴は続けて山科さんの声色を真似た。

「せやな。ここは乃江ちゃんが前衛で、うちは一キロ先から後方支援
……で、ボケてんねんから最後まで聞いてや！」

「由佳の与太話に付き合っていたら日が暮れる。行くぞ！」

「ピンポンって押したらダッシュしたくならへん？ ああつ、無
視せんといて〜」

そこで真琴は更に声色を変え、ドスの効いた声を出した。

真琴の隠された才能を垣間見た気がして、感心しその様子を見つ
める事しか出来ない。

戸田なつちゃんの意識もそうだが、真琴は役者の素質があるのか
もしれない。

「なんじゃい姉ちゃんら？　ここがどいう所か分かつとるんか？
おおっ？。」

「そう言いながらおっちゃん！　気安く乃江ちゃんに触るんやない！
乃江はうちのんやっ！」

ああ、ここからの展開はもうイイ。予想できるバットエンディングだ。

迫真の演技をし続ける真琴を横目に、残りの抹茶で喉を潤した。
真琴は我を忘れて一人三役の演技を続けている。

「乃江ちゃん！」

「由佳っ！」

バイオレンスシーンを経てタカラヅカワールドへ。
もはや表現すら憚られる所まで到達してしまっている。

口を突き出し一人抱擁する真琴を放置し、座敷の襖を開けて土間
へと降りた。

「行くぞ？」

「ああっ、先生！　ボケてんねんから最後まで聞いてや！」

真琴……、山科さんが混じってる。

虎鉄から聞き出した情報通り、組事務所は寿老から徒歩で20分

程の距離にあった。

航空会社経営のホテルに隣接し、閑静なオフィス街の一角にひっそりと建っていた。

建物を覆い隠すように常緑樹が植えられ、なおかつ手入れも行き届いている。

アイボリーのタイルを敷き詰めた外壁は、全体的に落ち着いた雰囲気を与えている。暴力団の組事務所というより、瀟洒な大使館を思わせる造りだ。

一階部分は駐車場になっており、全体で三階建て。贅沢な居住空間は窓の大きさから察することが出来る。

駐車場には黒塗りの高級車が数台。ありふれた欧米車ではなく、皇族も使用している国産の高級車って所が粹な感じ。

「ヤクザ屋さんって儲かってるんですね。あのホテルと同じくらいの敷地面積ですよ……」

「それより、感じないか？ 建物を包み込む妙な気配……」

常緑樹の隙間から建物を除き見ると、殺気立った黒服が数人、敷地内を窺い歩き回っている。

気楽に散歩をしている様には見えない。外敵を探る猟犬のように動き回っている。

彼らだけが殺気を放っている訳ではない。むしろ殺気は建物の中から発せられている。

だが全員が息を殺して潜んでいるような、ヤバイ気配が其処彼処から伝わってくる。

嵐の前の静けさとはこの事だ。小動物の生存本能が危険を伝えている。

同じ小動物系の真琴も危険を感じているようだ。鳥肌の立った腕をしきりに摩っている。

「玄関先にお団子置いてきましようか」

「退魔士参上、ヨロシク！ とメモ書きを残してか？」

それも名案かと思っってしまったが、ここのヤクザ達……、やはりなにかしら問題を抱えている事は確かだ。

音楽麻薬絡みかどうか、確かめずにこの場を去る訳にはいかない。

「行くか」

常緑樹で区切られた敷地内へ足を踏み入れた瞬間、刺すような視線を肌で感じた。

先ほどまでいた黒服達は、今は姿を確認できないが、確実に見られている感覚がある。

俺達を見つめる目は三つあった。

門の所に監視カメラが一つ、建物の外壁に一つ、入り口付近のインターフォン付近にも一つ。

恐らく俺達の一挙手一投足は建物内でモニターされているだろう。それは俺達にも好都合。手土産持参で来ている姿を映し出してくれていると有難い。

階段を踏みしめ二階部分へ駆け上がり、迷いもなく入り口で呼び鈴を鳴らした。

軽やかな電子音は建物の中で鳴り響き、俺達の来訪を伝えている。だが、待てど暮らせど応対の声は聞こえてこない。

「真琴」

「はいな！」

真琴は『寿老』の串団子をぎゅっと抱きしめ、次に起こるであろうアクシヨンに対し身構えている。

返答は無いが扉の向こうから気配がピンピンに伝わってくる。

アドレナリン全開の成人男子が数人、興奮した呼吸音と抑えきれぬ心拍音を鳴り響かせている。

俺は何気ない風を装い、扉のノブに手を掛けた。

「すいませ〜ん、誰かいらっしやいませんか？」

のんびりとした声とは裏腹に、扉を勢い良く開け、驚愕した表情をした男達と対面した。

センスの悪い派手なシャツに白のスラックス。黒服に薔薇をあしらったネクタイなど、絵に描いたような制服だった。

そして荒事になると予想していたのか、男達の手には金属バットやゴルフのアイアンが握られていた。

だが一般人と少し違う鋭いオーラは、突然の来訪者に脆さを露呈していた。

「こんにちは」

気の抜けた挨拶が引き金となり、男達は一斉に玄関を飛び出し、手に持った鈍器を振り下ろした。

俺は振り下ろされた「それら」から目を離し、深々と頭を下げて最敬礼を試みた。

激しい金属音が頭上で鳴り響いたが、気にも留めずに最敬礼を終えた。

彼らの振り下ろした鈍器は俺に届かず、ピタリと空間に縫い付けられている。

正確には真琴の『剣』で受け止めていたのだが、彼らには理解できない光景だろう。

「近くを通る予定があったので、ご挨拶にと」

俺は真琴の抱かえた甘味に目を移し、頭の上で止まったアイアンを手で払いのけた。

男達は目の前で起こる奇異を目にし、恐怖の表情へと変化させた。これが勝負ならば既に雌雄は決した。と言いたい所だったが、彼らにも面子つてもうがある。

次々に押し寄せる増援の声に後押しされ、彼らに引く事を許さない。

「おのれ、抜け抜けと……。挨拶だと？」

アイアンを持った男が戦慄き、グリップを両手に持ち替えた。

同時に守護するように剣が何本も具現化され、ノーガードを決め込んだ俺を包み込むようにガードした。

体術を用いた戦闘をする俺とは違い、真琴の能力は一般人に見えない。

まるで超能力者と対峙しているように錯覚しているのではないだろうか。

「このバケモノがつ！」

あっ、その言葉……。ちょっと傷ついた。

男の振り下ろしたアイアンが、再び剣に弾かれる。

一度で駄目なら二度三度懲りずに打ち据える。その度に形を変えていくアイアンがかわいそうだ。

その軌跡を目で追いながら、へし折れかけたアイアンを手で掴み、男の手を押さえ込んだ。

「土産を持参した客人に対し、こういった対応するのがこの流儀か？」

俺は武器を持つ男達にはなく、彼らが守ろうとしている人物に向かい声を荒げた。

二つ呼吸する間、シンと静まり返った建屋の中に耳を澄ませた。だが快い反応は返ってこない。ドラマのようには行かないか……。

「仕方ない……」

荒事は御免蒙りたい。

こんな殺気立った状況で中に入っても、有用な情報など聞けやしないだろう。

男達に背を向けて立ち去ろうかと思った時、ヤクザ達の中から耳を疑う声を聞いた。

「お前ら、三室カオルと山科真琴だな？ 丁寧に電話予告なんか入れやがって、涼しい顔で組事務所を潰しに来るなんていい度胸してるじゃないか」

彼らが俺達の名を知っている事に驚かされたが、それ以上に不可解な言葉を聞かされ頭の中が混乱をきたした。

引き攣る口元を必死で動かし、オウム返しをするのが精一杯だった。

「電話予告？ 組事務所を潰す？」

「てめえ……しらばっくれやがって！」

とぼけた舐めた態度と取られたか、激昂した彼らは堰を切ったよ

うに襲い掛かってきた。

目の前に迫る幾本もの鈍器。

バットと角材の隙間を掻い潜り、ほんの少しだけ拳に靈気を送り込む。

拳から衝撃が加わる瞬きほどの短い時間に、靈気を相手の肉体に注ぎ込む。

衝撃を受け振動した肉体では、ほんの少しの過剰靈気をも受けきれない。靈気がキャパシティオーバーを起こし衝撃が倍加する。

インパクトの瞬間だけ外さなければ、子供の力でも相手を叩き伏せる事が出来るだろう。

目の前の脅威が三つ、呻き声を上げて崩れ落ちる。足元に転がる彼らを見て、残りの脅威は一步後退りした。

俺は彼らを乗り越えて、一步中へ足を踏み入れた。

「真琴、俺達が来たとして結局はバッドエンドだったな」

「予想外の出来事です」

真琴は玄関脇に『寿老』の串団子をそつと置き、言葉とは裏腹に腕のストレッチを始めていた。

そして俺の脇をスツと通り抜けると、己の身の丈の二倍はあるであろう男を投げ飛ばした。

ヤクザの事務所はこういつた出入りに備え、通路が狭く作られている。

一斉に進入される事を予測しての事だが、それが彼らの足枷になっている。

長得物を持った彼らは、思ったようにソレを扱うことが出来ず縦一列に並び、二人係りで真琴を取り囲むことさえ出来ない。

逆に真琴は小さな体が功を奏し、その狭い空間で生き生きと躍動している。

俺は『寿老』の串団子を手に取り、死屍累々の男達を踏まぬようにつま先を立てた。

「先生！ 終わりましたよ」

真琴は男達を膝で組み伏せて、手をポンポンと叩いている。

「男達は呻き声を上げているが、外傷はそれほどではない。真琴の奴、かなり手加減をしたようだ。」

俺は転がっている男の中で、一際生きの良いのを掴み上げ、先ほどの疑問をぶつけてみた。

「さつき変な事を言っていたな？ 予告がどうの。詳しく聞かせてくれないか？」

「素直に言わないと……、もつと酷い事しちゃうぞ」

真琴の脅し文句が効いたのか、男は素直に頭を振った。

よろよると立ち上がると、廊下の端にある扉の前でネクタイを整え背筋を伸ばした。

そして背筋をピンと伸ばし、ノックをして頭を下げた。

「汐見です。すみません」

ややあつて部屋の中から威圧的な声が響き渡った。

「だらしねえ。女子供相手に足止めも出来ねえのか……。まあええ、入んな」

男は小首を振るい、俺達に合図を送ってきた。

そして扉を開け、先に部屋へと姿を消した。

俺は真琴の背をポンと叩き、深呼吸を一つ入れ男の後を追い足を踏み入れた。

部屋に入ってまず目に付いたのは、総革張りの三人掛けのソファーに陣取る大股開きの男。

日本茶を啜り、俺の顔すら気にならないように、テーブルに広げた新聞に目を落としている。

仕立ての良いダブルのスーツを着こなし、見た目にも低い立場の男ではない事をうかがわせる。

もう一人、その男の背後に立ち、眼鏡越しに理知的な視線を向ける男。

シンプルなデザイナーズブランドを着こなし、皺一つにさえ気を使いそうに見受けられる。

本格派のヤクザとインテリヤクザの対比だった。

「よう、お前。異能者だつてな？ 最近調子に乗ってシマ荒らしまわってる奴らの手下か？」

相変わらず新聞から目を離さないが、男は俺に語りかけてきた。

言葉の端々から新しい情報が聞き取れる。奴らとは敵対勢力、別の組織と言っている。

「異能ってほど特別な力がある訳じゃない。人より少し目が良いだけだ」

「ほう……。腕っ節には自信がある……。そついう言い方だな」

男はその時初めて顔を上げた。

そして手元の新聞を二つに折りたたみ、その下に隠された黒光りする拳銃を見せ付けた。

映画でよく見かけるマカロフPM。有名なトカレフの後継機種で、

中国などでライセンス生産されているモノだ。

トカレフが高火力ならばマカロフはその逆。扱いやすさを主眼に置き、日本でも押収されニュースで目にする事が多い。

彼は拳銃に手を伸ばすのかと思いきや、新聞を四つ折りにしてきちんと畳み、ソファアに深く腰を下ろした。

「何の用だ？」

「この地でしばらく動き回る。今日はその挨拶で来ただけだ」

俺は傍に立つ男に串団子の箱を手渡し、手渡せと合図を送った。

男は箱を訝しげに見つめていたが、ソファアに座る男へ静々と差し出した。

ソファアの男は小指の爪で封を開け、箱の中身を確認している。

「串団子じゃねえか」

先ほどの荒事で中身が見事に偏ってしまい、お世辞にも美味そうに見えない。だがソファアの男は手を摺りつつ団子を見つめ感嘆の声を上げた。

箱の中から一本取って、手馴れた手付きで餡を絡め、口の中に放り込んだ。

ギョツとしたのは部下達だろう。毒でも入っていたらどうすると、顔色を変えてその様子を見つめている。

「糖尿持ちに串団子とは……。殺す気か？」

くつくつと笑いを浮かべ、背後に立つ男に手を振り合図を送る。

インテリヤクザは男の背から離れ、俺と真琴に向かいのソファアへ手招いた。

そして立ちんぼ状態の男へ向かい、『茶の用意を』と端的に伝え、再び男の背後へと足を向けた。

ソファアの男は茶の用意に向かうのを見届け、ニヤリと笑う口元を手で押さえた。

「あいつは汐見。後ろのは堀江、俺は若衆を仕切ってる桜川だ」

簡潔に挨拶を済ませる桜川。

ヤクザは縦割り社会。若衆の頭って事は、若頭って立場だと予想される。

軍属に例えると少尉か大尉。年は見た感じ3〜40位だろうから、かなりの出世頭ではないだろうか。

「俺らよ、こついつた職業に就いてる訳だ。それなりの覚悟と用意をしているんだがよ？」

桜川の言葉を聞き、堀江というインテリヤクザはテーブルの上に置かれた電話を操作する。

普段お目にかからないビジネスホン。それもかなり大柄の電話機から、電話で執り行われた会話内容が再生された。

『今からそちらに三室カオルと山科真琴という能力者が伺う。訪問理由は説明する必要もないだろう』

会話内容は二度同じ言葉を繰り返し、プツリと切れてしまった。声の質や抑揚から男と分かる……ただそれだけ。

故意に機械的な会話を行っているようで、その者の個性までは伺えない。

「騒動になる15分ほど前の事だ。心当たりは？」

桜川はそう問いかけた。

彼が問いかける以上、俺達がこの電話に直接関係しているという疑いは持たれていない。

だが完全に信用されている訳でもなさそうだ。特に堀江という男はかなり疑いを持っているのが分かる。

「むづ……」

俺と真琴は同時に腕組をした。

そもそもヤクザ事務所への来訪は『寿老』で思いついた突発イベントだ。

情報をくれた虎鉄が漏らしたって線は考えにくい。そもそも彼は話す場所を厳選するほど守秘に煩い、ちよつとやそつとでは口を割るまい。

ならば『寿老』で盗み聞きされたか？

いや俺達の他に客はいなかったし、応対した店員は手付きや振る舞いを鑑みるに、かなりのベテランだろう。

その場で俺は『真琴』と、彼女は俺の事を『カオル先生』としか発言していない。

フルネームを知り、訪問のタイミングを知ることの出来る者……か。

あらかじめ俺達を知りトレースしていたとして、15分前に察知できるタイミング……。

「先生」

真琴が青褪めた顔で袖を引っ張った。

手には携帯端末が握られ、ディスプレイには『寿老』の甘味が映し出されていた。

「私……店を出てすぐに、乃江さんにメール送っちゃいました。ついでに直近の行動を書いて……」

真琴の持つ機種は一般の電話会社が売り出している物ではなく、退魔士だけが持つ事を許された専用端末だ。

暗号化されたパケットをインターネット網に流すチャチな仕組みではない。

グローバルアドレスとは別の、専用のプライベートアドレスが割り振られるIP-VPN方式だ。

サーバと端末はインターネット網を通る事無く、一対一に近い形で接続される。

美咲さんでもメールの秘匿性は特別高いと言っていたし、いつぞやIDを検索したように簡単にハッキングは出来ないはず。

「理由は不明ですが、こちらの動きを読まれていたのは確かです。申し訳ない」

「まあよ。踊らされたのはこちらと同じだ。貸し一つと言いたい所だが、痛み分けとしておくか」

高らかに笑う桜川は、もう一本団子……と手を伸ばした。

だが堀江の咳払いを耳にして手を止め、指をワキワキと動かして引っ込めた。

この様子を見て堀江は桜川の目付け役だと理解できる。

豪胆な態度で部下を取仕切るのは桜川、理知的な計略は堀江の役目なのだろう。

「俺ら半端ものの集まりだけだよ。暴対法からこの方、ヤバイ物には手を出してねえ。これも本物にそっくりなライターだからよ」

桜川はマカロフPMを手にとって、銃口を天井に向けて引き金を引いた。

彼の言うとおり電子ライターのようには音を立て、銃口からは程よい炎が揺らめいている。

「吉祥町の連れ込みホテル、ボツタクリの風俗店、席料なんぼの飲み屋なんてのはやらせてはいるがな。指定暴力団にも入ってねえ小さい組だからよ。他所様に舐められちゃ商売上がったりだ」

彼らの言う舐めた態度を取る相手、それが音楽麻薬に関与する組織なのだろう。

やはり桜川達と奴らは敵対関係にある。水面下では直接的な争いもあるのだろう。

桜川の部下達が俺達を見て『バケモノ』というワケ……、それがなんとなく理解できる。

「この地で売り捌かれている『音楽麻薬』の調査に来ました。なにが情報を持っていたら教えて貰えませんか？」

「調査……ねえ。団子の分は喋らないと駄目だろうな」

桜川は堀江に分からぬよう素早く団子を頬張り、餡で汚れた口元を吊り上げた。

桜川は絹のハンカチで口元を拭い、ソファアへ深く体を沈めると、俺と真琴の顔を交互に眺め、思わせぶりな笑みを浮かべた。

俺たちの気持ちなど察せずとも分かっている、そう言いたげな表情をして……。

喉から手が出るほど情報が欲しいと、心の内を見透かされたのかも知れない。

「堀江、サンプル持ってこいや」

「へいつー！」

堀江は部屋の奥にある金庫に向かい、手馴れた操作でダイヤルを回し、中から茶封筒を取り出した。

取って返し目の前で茶封筒を閉じていた紐を解く。

取り出されたのは小振りなビニール袋が数枚。中には小さなメモリーチップが収められ、袋には油性ペンでなにやら走り書きがなされている。

「P・T・A・H……？」

「メモリにはメーカー名や規格なんかが印刷されているだろ？ それを縦読みして隠語にしたんだろうな。巷ではプタハと呼ばれとるようやがのう」

プタハ……。古代エジプトの神の名か。

エジプトの神といえばヘリオポリスの神々が有名だが、プタハは確かメンフィスの神だったように思う。

鍛冶の神、冥府の神、呪文を用いて万物を創り出したといわれる神だ。

小首を傾げている真琴にそう説明してやると、感動したように目を輝かせ見つめ返した。

「先生つて博学！」

「ん、ああ……。子供の頃、寝入る時に聞かせて貰うたる？ 俺の場合は変なのが多くてな、こういった話をよく聞かされたんだよ」

日本を初めとする各国の神話は暗唱できるほど聞かされた。

母だけではなく親父もそうだ。表面上の扱いより本質を語る事が多い。

車ならメンテンンスの重要性や構造に内燃機関。ギターはコードや技巧よりハートや感情を……。とかな。

おかげで雑学の類はかなりの知識を溜め込めた。

今思うと、退魔士に必要な知識や心構えを、それとなく教わっていたのではないか。そう深読みしているのだが。

「プタハは緑色をした人型の神として壁画なんかに残されている。緑は植物、再生復活の象徴とされている」

「そんな神様が音楽麻薬の通り名になるなんて、ミスマッチも甚だしいですね」

憤る真琴を桜川は苦笑しながら見つめ、らくしない優しい口調で話しかけた。

「お嬢ちゃんさ……。麻薬の通り名なんていい加減なもんだ。覚せい剤は血管が収縮し冷たさを感じるからアイス。んでもって体が冷

えて寒いからシャブ、なんて呼ばれてる。その程度のもんさ」

「またも目を輝かせ桜川を見つめる真琴。

桜川は少し照れたような表情を見せ、視線から逃れようと目を逸らせた。

堀江は桜川に悟られぬよう笑みを噛み殺し、改まった口調でプタハと呼ばれるチップを手に取った。

小指の爪ほどのチップ。掌の上で裏返して意味ありげな視線を向けた。

「プタハは裏に青のマーカーが打たれたものを指すらしい。それとは別にピンクと赤色でマーカーされたものもある」

「そういえば親父から手渡されたチップには青のマーカーがなされていた。」

「あれが正統派のプタハだとすると、他の二種類は何だ？」

「ピンクは青より軽い奴で、初心者用の位置付けと耳に入っている。だが……残念ながら、赤に関してはなんの情報も入っていない」

「とするとピンク、青、赤の順にヤバイって感じだろうか。」

「プタハ青が美咲さんでさえ抗えないほどの効果を見た。初心者用のピンクがあってもおかしくない。」

「恐らくピンクは価格も安く、手に入れやすい位置付けなのだろう。」

「ピンクは初心者ってか、学生にも出回りはじめてるらしい。ピンクのプタハだからPPと呼ばれとるらしいわ」

「まさか、……学生はそんなにお金持っていないでしょ？」

親の脛を齧ってる分際で、高価な物に手が出せる筈がない。

お年玉を貯金しつつ、お小遣いが足りなければ切り崩して一年間生き延びる。それが学生つてもんだ。

大学生だと仕送りが足りなきゃ、バイトをして生活していかなきゃならない。

ちよつと蓄えが出来たとしても、遊行費であつという間に無くなってしまう。

「兄ちゃん、意外と世間を知らねえな。最近の若い奴はエグいぜ。若さを売り物に金を稼ぐ女、貢がせる男なんてザラだ」

「身に着けているものは全て金になると思っている、小便や唾、糞まで売り物にしてるクズがいるって話だからな」

桜川は呆れた表情で天を仰ぎ、堀江は吐き捨てるように言い放った。

確かにそういうニュースを目にすることがある。

大抵の場合ソレに手を出し、聖職者や立場のある者達が自滅したニュース。

だが未成年の彼らは法律に守られ表面化していないのが実情だ。

「お嬢ちゃんなんか、超が付くほど売れっ子になれる。最近は小学生つても珍しくねえし、一晩で何十万も稼げるだろうさ」

「誰が小学生ですか！ 私はこれでも中学二年生ですっ！」

真琴は声を荒げて桜川に食ってかかった。

恐らく小学生扱いされた事より、性の対象とされた事に憤慨したのだろう。

真琴は現代っ子にしては古風な考えを持っていて、そういう話に

過剰なまでに潔癖な面を見せる。

悪く言えばお子ちゃまだが、俺はそんな真琴が嫌いではない。

「まあまあ……、かなり立てるなって。悪かった……スマン」

暴れ馬をあやす従者の如く、手を上下させて真琴を落ち着かせる。真琴にかかれば強面の桜川も台無しだ。

これには堀江も我慢出来なかったようで、背中を向けて肩を震わせている。

「この街が食い物にされてるってのに、俺達やよ、末端の売人に睨みを利かせるしか出来ねえ」

「……おおつぴらに動けば当局も動く。自分の首を絞めるようなもの……ですか？」

「だな。組の構成員を動かせば、穏やかに済ませる事も出来なくなる。俺達にとっちゃ、兄ちゃんらは渡りに船って所だ」

なるほど。

一般市民にとって彼らは害悪でしかない、鼻摘みの厄介者。

だが彼らがいるお陰で、他の組織が勢力を伸ばせられないのも事実。

もし彼らがココにいなければ、極東アジアのマフィアが代わりに台頭し幅を利かせる。

もし彼らが音楽麻薬の組織を叩いたとして、騒動になれば市民は脅え、警察組織は嬉々として取り締まりを強化するだろう。

彼らがもし組織を潰されたとしても、後には別の組織がこの街を食い物にする。結局は堂々巡りの繰り返しなのだ。

膠着状態の桜川にとって、俺達は現状を打破する切り札になりう

る。

渡りに船つてのはそういうことだろう。

「だけど……、馴れ合う気はありませんよ？」

「俺達や、俺達の領分で今まで通りに睨みを利かせるさ。兄ちゃんらは好き勝手に動くといい。それだけのメリットはあるからな」

桜川……。頭の悪いフリをしているが、意外と策士だ。

盤の上を気ままに動き回る駒だが、敵に矛先を向けている限り手駒と変わらない……。そういうだろうな。

だが最低限ここに来た目的はクリアした。反目しない限り手を出さないという確約は取り付けた。

「正直兄ちゃん一人でここに来たのなら、ここまで腹を割らなかつた。お嬢ちゃんに感謝するんだな」

「真琴？」

「お嬢ちゃんみたいな無垢な子が慕っている、……って事は、心の読めねえ兄ちゃんも、本質はそう捨てたもんじゃねえと読める。まあ、太陽と月のような関係みたいなモンだな」

真琴はしばし呆然としていたが、褒められた事に気が付いて頬を赤く染めた。

確かに心の内を表に出すのが苦手だし、真琴がいるから安心できるってのは良く分かる。

俺は頼りになる相棒を肘で突付き、ペコリと頭を下げ席を立った。

「それでは」

「今度来る時も甘〜い手土産頼むわ」

軽口を叩く桜川と、複雑そうな表情で眉を顰める堀江。

彼らも俺と真琴のような関係なのだろうか。

俺は苦笑しつつ事務所を後にした。

風俗街である吉祥町までは目と鼻の先だった。

彼らがあの場合に事務所を構えているのも分かる気がする。

「ヤクザな人って言っても、普通のおじさんでしたね」

「殴りこんできた異能者相手に、落ち着いて応対できる。それだけ修羅場をくぐって来たって事だ。普通の神経ではあぁいった態度は取れないよ」

普通の神経をしていれば、玄関先で見せた手下のように慌てふためく事だろう。

だが桜川はそういった心の揺らぎを見せていない。

殺される覚悟、殺る覚悟つてもものを常に胸の内に抱えている。そんな気がした。

「彼らも俺達と同じく、非日常で生きている。そういう事だと思うよ」

自分の立場や桜川を褒め称えている訳はない。

日常を逸脱している事は褒められた行為でもないし、いきがって自慢するほどのモノでもない。

真琴もソレが分かっているだろうか。コクリと頷いただけで、なに言わずに遠い目をした。

「む、それらしい雰囲気になってきたな」

真琴とのキャッチボールが途切れたからか、俺は努めて明るく振舞って見せた。

ビジネス街を通り過ぎた辺りから、ケバケバしい原色が目に入る。ネオン街らしく、汚らしく、明るい隙間だらけの街だった。

昭和の時代から改築されていないであろう雑居ビル。

ゴミ箱は収集されているにもかかわらず溢れ返り、街を歩く者の目には強い意志を感じられない。

ビラを配る黒服やチャイナドレスを着た女が往来に立ち、飲み屋の店員は稼ぎ時に向けて準備を怠らない。

そんな街だった。

「チップの話以外に情報を聞き出せなかったですけど、これからどうするんです?」

真琴が不安そうに俺を見上げた。

桜川のイベントは筋を通し、活動する免罪符を得ただけだった。

あわよくば売人の動きを把握して、連絡経路を聞き出せれば……。そう思っていた。

だが案ずる事は無い。

「なあ? 真琴が麻薬の売人だとすれば、どうやって売る?」

俺は意地悪い笑みを浮かべ、真琴に目を落とした。

こつやってイメージネーションを働かせるのも一つの方法だ。

自分がもし敵ならば……。そう考える事によって敵の戦術を読み、敵に成りきる事により、自分を見つめ直す。

真琴は小難しく眉を潜め、腕を組んで唸り声を上げた。

「私なら一箇所に居座らず、姿を隠して人と触れ合う機会を最小限にするかな」

「まあ、半分正解だな。だが針に餌を付けずに魚は釣れないぞ」

「あ、そうか。自分の連絡先を知って貰わないとダメだね」

「そうだ。固定客を持ったら話は別だがな。だけど新規開拓を怠れば、せつかくの客も別のルートに食われるぞ」

「どんと居座る売人がいたとして、俺が新顔の売人なら足を使って売り捌く。」

「価格には底があるかも知れないが、客は今すぐ手に入れたいという願望がある。そうなれば値段を吊り上げる事も出来るだろう。」

「機動力が必要か。この狭い道幅の風俗街で、早く動き回れる足」

「いい線行っているな。ここに来るまでに一方通行が三箇所あった。道交法に縛られる乗り物はNGだ。自転車がベストだろう」

「それも目立たない自転車？」

「折りたたみの自転車や派手なマウンテンバイクは、見ていないよ。うで印象に残る。」

「俺なら乗り捨てても惜しくない安物の自転車を選ぶだろう。」

そう考えると検索対象がかなり絞られる。

スーツを着たよれよれのビジネススマンや、出勤する風俗嬢らしき女、飲み屋の女に同伴する金持ち風の男も排除。

高そうな車に乗るアイツも検索対象外だ。

そうしてフィルターを掛ければ、見えなかったものが見えてくる。

「そういつた対象を探すより、客を探す方が早いかな」

目の前の小さな公園の端に立つ、違和感たつぷりの男女を目で追った。

男はひっきりなしにタバコを吹かし、女は話もせずキョロキョロと辺りを見回している。

男の足元には数本のタバコが踏みつけられ、かなりの時間あしっているのが見受けられる。

俺はその二人に背を向け、真琴は俺と向かうようにして代わりに監視を続けた。

緊迫感に満ちた雰囲気。手には汗を握る刹那、どこからとも無く気の抜けた声が響き渡った。

「三室さあくん、真琴さあくん。酷いっすよ」

空気の読めない奴もいるものだ。

ご主人様を見つけた犬の様に、小鉄が手を振りながら走ってくる。俺はふと湧き上がる殺意を押し殺し、思わず握り締めたナイフから手を離れた。

真琴は額に青筋を立て、口元を引き攣らせワナワナと震わせている。

そして満面の笑みで走り寄る小鉄に、渾身のボディブローを打ち込み沈黙させた。

「よかった。気付かれていないようだ」

俺は足元で痙攣する小鉄を脚で踏み付け、真琴と二人額の汗を拭き去った。

小鉄は意外と打たれ強いようで、すぐさま復活して立ち上がった。

「なんすかいきなり！」

「しっ！」

俺は小鉄の頭を押さえ、公園の茂みに身を隠した。

あのカップルの挙動が変化した。

ひっきりなしに携帯を見つめていた女が、表情を変え携帯を鞆に収める仕草を見せたのだ。

「連絡がついた？」

「みたいですね」

「むぐぐ……」

少し間を置いて自転車に乗った男が近づき、自転車に跨ったままポケットの中から小袋を取り出した。

男は言葉を発せず指を立て、代わりに金をよこせとゼスチャーしている。

女は鞆の中へ手を入れ、ゴム留めされた一万円札を取り出して手渡した。

「5、6万か。遠目ではおおよそしか分かんが、そんなもんだろ」

俺は目を細めて受け渡し現場を見定めた。

女は代わりに受け取った小袋を天に翳し、袋越しに中身を探っている。

そして右手で一振りして、チップを左で受け裏返して『印』を確認する素振りを見せた。

「あの表情……、意中のものが手に入ったって顔してますね」

小鉄が声を上げた。

真琴は無言でコクリと頷き、スクツと立ち上がって鼻息を荒くした。

男と女が足早に立ち去る姿を見て、真琴は茂みを飛び越え、事もあろうか立ち去ろうとする売人の前に出た。

俺は元より状況を理解しつつある小鉄でさえ、真琴の奇行に声すら出せない。

真琴の一挙手一投足を見つめるしか出来なかった。

「はろ」

真琴は売人の前で手を振った。

警戒心バリバリの売人は、殺気に満ちた目を真琴へ向けている。

上着のポケットにソツと手を入れ……、恐らく護身用のナイフにでも手を掛けているのだろうか。

「ね？ PP売ってよ。お金持つてるからさ」

真琴はらしくない、スレた口調で身を擦った。

だが売人はまだ警戒心を解いていない。半信半疑といった所だろう。

あらかじめ仕込んでいたのだろうか、真琴はポケットの中から一

万円札を数枚取り出し、力いっぱい握り締めて懇願するような目を向けた。

「……PPP?」

「プタハって音の麻薬。あんた売人でしょ？ あたし見てたもん」

真琴の演技力には舌を巻く。

まるで別人のような、悪^{ワル}に憧れる少女の演技だ。

「子供がなんでそんな金を持つてるんだ？」

売人は警戒心を解きつつも、真琴に対する不信感を口にする。

見た目はそんな大金を持っている年齢と見られない。どうする？
チャイルド真琴。

「小さな女を自分のいいなりにしたいっておじ様が多いのよね」

膝を覆っていたスカートを意味ありげに摘み、ゆっくりとたくし上げた。

細く白い脚が露わになるにつれ、売人の目は細く鋭くなっていく。そして舐めるような視線で真琴の肌を見つめた。

ニヤリと笑うと真琴の手から札束を受け取り、代わりにポケットから小袋を取り出して手渡した。

真琴は袋を透かし、何も無かったようにポケットに仕舞った。

「ヤル時は一人で。声が出るからタオルを噛んでヤルんだな」

そう言うと男はペダルに足を掛けた。

真琴はボンと手を叩くと、走り去ろうとする男へ振り返り、さも

当然のように声を上げた。

「ハマつたら困るよ。連絡先教えて？」

ウインクをばっちり決め、小悪魔の如く蠱惑的な笑みを浮かべた。真琴の本質を知らなければ、間違いなく俺も騙されるであろう演技。真琴とのギャップに心を乱される思いがする。

男はポケットからメモを取り出して、指先でピッと弾く様に投げ渡した。

真琴はヒラヒラと舞うメモを軽やかに受け取り、大事そうに四つ折りにした。

「ねえ？ 兄さん。私さ、これから暇なんだけどな？」

「ケツの毛まで抜かれそうだ。また今度な」

男はそう吐き捨てて走り去った。

真琴は男を見送りつつ、そうと分からぬように顔を引き攣らせた。演技の限界が来たか。潔癖症の真琴だから、かなり我慢の演技だったのだろう。

俺は真琴を思いやりつつも、笑いを噛み殺し肩を震わせた。だが空気の読めない奴もいる。

小鉄は俺の隣で生唾を飲み込み、顔を真っ赤にして体をくの字に折っていた。

「真琴さん……、色っぺえ……」

その声を聞き逃さなかった真琴は、ダンボのように耳をピクリと動かした。

紅潮した顔で頬を膨らませ、茂みに隠れた小鉄目がけて飛び蹴り

を食らわせた。

『14 - Trap』

公園脇の路地を早足に歩く真琴。

小鉄は必死で追いつがり、言い訳を聞かせようとしている。

火に油を注ぐようなものだと思いが付かないのだろうか。

今は何を言っても無駄。真琴は怒っている訳ではない、ただ照れくさいだけなのだ。

「こつちに来るな！ エロ親父！」

「ちょ、誤解つすよ。話を聞いてくださいよ、真琴さん」

ピタリと歩を止め、振り返る真琴。

いい加減こんなやり取りを終えたいと思っていたのだろう。

真琴なりに落とし所を探していたのだ。

「なに？ 聞いてやるうじやないの？」

「グラビアアイドルの裸より、クラスメイトのパンチラの方が効くじゃないっすか。そういう感覚って分かるっすかね？」

小鉄の奴……。

その気持ち分かんなくてもないけど、正直に話せば許されるってものでもあるまい。

ポカンとしていた真琴の顔に怒りがチャージされていく。

俺は指で耳を塞ぎ、背を向けて次の瞬間に備えた。

「……………そんなの、分かるかつ！」

真琴の絶叫が辺りに轟き、同時に飛び蹴りが小鉄に炸裂した。にしても小鉄の奴、真琴の飛び蹴りを食らって高らかに笑ってる。先ほどの蹴りも……今も、手加減してるとはいえかなり鋭い蹴りだ。

異常なほど回復が早いってのが、小鉄の才能の一つなのかもしれない。

「真琴、行くぞ」

二人に構ってやりたい所だが、それだけの余裕は俺には無かった。ヤクザ事務所で俺達をハメようとした奴は、今も俺達を観察している。

どこからかは定かではないが、見られている感覚がチクリと肌を刺激する。

癖のようにポケットから携帯を取り出し、胸騒ぎに似た焦燥感が去来する。

「まさか」

俺は待ち受け画面を見つめ、キーを操作して発着履歴を見つめた。そしてメールの送受信履歴を確認して電源を切った。

「先生、どうしたの？」

「ちょっと気掛かりな事があってな。……真琴の携帯を見せてくれないか？」

怪訝そうに見つめる真琴だったが、鞆の中から携帯を取り出した。手渡された携帯は退魔士協会から配布された多機能携帯だった。真琴はプライベートの携帯を持たずにこの携帯を使用している。

スライド式キーボードで退魔データ検索可能、通常の音声通信までこなせて、通話料無料と目を輝かせていたのを思い出す。

「中を見るぞ」

「……うん、いいよ」

不慣れな手付きでキーを操作して、通話履歴を確認した。
俺はこう思ったのだ。

人が当たり前のように持ち歩く携帯だが、使い方を変えれば盗聴器に変わるのではないかと……と。

だが不審な通話履歴はなかった。いや通話履歴が無い事に違和感を感じた。

真琴は几帳面な性格だが、通話し終えた履歴を削除するほどマメではない。

むしろ電話をした証として残しておきたいと思うタイプだ。

俺は出来るだけ表情を変えず、真琴に履歴画面を見せた。

「ん、なに？ ……あれね？」

真琴の表情を見て全てを理解した。

異能者はこの端末にアクセスし、住所録から俺達の名前を、行動の詳細をメールから察知したのだ。

これはハッキングなんて生易しいものではない。俺達と同じく異能力を使ったのだと直感した。

「やっぱり私の携帯から情報が漏れていたって事？」

「かもな」

「かもなつて、そんなお気楽な」

真琴は俺の手から携帯を奪い、電源を切ろうと操作した。だが俺はその手を制止し首を振った。

「電源を切るのはまだ早い。相手に気付いたと教えるようなものだ」
戸惑う真琴の手から携帯を取り、頭に浮かんだ電話番号を打鍵した。

携帯のディスプレイは番号に該当した名前を表示した。
携帯から聞こえる呼び出し音。二度鳴り響き相手が電話に出た。

『真琴？ どうした？』

電話の相手は乃江さんだ。彼女なら俺の意図を読んでもくれる。
俺は携帯を耳に当てて、何気ない風を装って話し始めた。

「俺つす。携帯のバッテリーが無くなって、真琴の携帯を借りたんです」

『カオル？ どうした、急用か？』

急用以外の通話はしない。これは昨夜決定した作戦の一つ。
それをあえて破る事で、いまある危機を伝える事が出来ればと思
ったのだ。

「いえ、乃江さんの声が聞きたくなって」

『なつ！ なにを馬鹿な事を言っている……』

「電話つて『便利』ですね。『姿が見えないのに声を聞く』ことが出来る」

『……む』

俺の気持ち乃江さんに伝わりつつある、そう俺は実感した。師弟の間柄だからこそ理解しあえる阿吽の呼吸だ。

「でも、『大切な事は電話で話せません』、なので会って話したいです」

『なるほどな、その意見には私も『同意』だ』

「それと……、ヤクザの事務所で重大な証拠資料を手に入れました」

『それはお手柄だな』

「場所は大黒橋付近の八上公園^{やがみこうえん}、時間は22時で良いでしょうか」

『ふむ、了解した』

そう告げると俺は電話を切った。

真琴は口を手で覆い必死で笑いを堪えている。

必死に演技を試みたのだが、真琴にとっては大根役者の三文芝居か。

俺は真琴にデコピンを入れ、使い終えた携帯を手渡した。

小鉄は俺達の行動を理解できぬといった表情で見つめている。

「ゆっくり話せる場所で説明するよ。でもその前にもう一箇所電話をしたい」

真琴の得た売人の連絡先だ。

恐らくあの番号に掛けたところで、売人が電話に出るとは思えない。

もし俺ならばどうするかと考え、そういう結論に到達した。

恐らく別の誰かが電話に出て、時間と場所を指定して男を向かわせる。

その電話の主は事情を聞かされていない誰か。金で請け負って電話を取り次いでいるだけだろう。

逆探知対策、トカゲの尻尾きりと言った所か。

「真琴」

「はいよ」

真琴は例の紙切れを出して俺に手渡した。

公園に一台設置されている電話ボックスに歩み寄り、百円玉を入れて情報屋の電話番号を押した。

俺にとっての情報屋といえば牧野だが、こういった調査は彼女が適任だろう。

「三室カオルです」

電話を取り無言のままにいる相手に名乗った。

電話の相手は東山亜里沙。退魔士省庁のキャリアであり牧野の相棒、そして腕利きの情報屋だ。

「ああ、カオルくんじゃない？ 私の情報料は高いって言ったのに仕事くれるなんて嬉しい！」

「価格に見合った仕事をしてます。調べて貰いたい事がありました……」

東山亜里沙は退魔士達が利用するサーバの番人だ。
金さえ積めば精度の高い情報を提供してくれる。

なにせ幾万もの情報が目の前の箱に収められているのだから……。

「Ⅱが3つ、+3、-1、+3、Ⅱ、-4、-1、Ⅱ、+2」

『電話番号かな？ 共通鍵暗号？』

「ええ、奴の番号で復号してください」

俺と亜里沙さん、二人の共通の鍵とは牧野の電話番号。

子供が考えそうな暗号だが、電話を傍受されていても読み解く事は出来ない。

もう一つ聞きたい事があるのだが、彼女は理解してくれるだろうか。

「亜里沙さんのペット、最近調子はどうですか？」

「私の……ペット？ あ、うん、いまいちかな。最近風邪をひいたみたい」

亜里沙さんのペットとはサーバ達の事だ。

ペットのように溺愛していると牧野から聞いたことがある。

彼女もなんとなく理解したようで、世間話をしつつ高速で打鍵している音が微かに聞こえてくる。

そして彼女はため息を吐いて口調を変えた。

『ここ最近『凄く良く』来てくれて嬉しいんだけど、感染っちゃうから来るのはやめた方がいいわよ』

亜里沙さんはくどい言い回しをして、状況を伝えてくれた。

凄く良く来る……、恐らく不審なほどアクセス履歴が残されていたという事だろう。

感染ちゃうってのは俺達ではなく、サーバに感染るって事だろう。

「了解しました。また連絡します」

俺は用件を伝え終え、狭苦しい電話ボックスから出た。

聞き耳を立てていた真琴と小鉄は、俺の号令をソワソワしながら待っている。

「さて、圏外を探すとするか」

今時携帯電話の通じない場所を探すのは骨が折れる。

だが吉祥町は古き良き色町の名残を残している。

古臭いビルの地下にある喫茶店に入り、真琴は携帯を見つめホッと胸を撫で下ろした。

「圏外です」

店の最奥に陣取り、何も知らぬ小鉄に事の経緯を掻い摘んで聞かせた。

俺達が誰かに監視されてる事、情報が筒抜けだという事。

そして小鉄も狙われる危険性があるという事を。

「凄いつすね。吉祥のヤクザって言えば、無く子も黙るって武闘派

なんすよ」

小鉄が見つめる先には、その武闘派集団を投げ飛ばした真琴がいた。

真琴は照れくさそうに俯き、慌てて話を逸らした。

「盗聴の件ですけど、携帯はこのままで良いんですか？」

真琴は手の上の携帯を扱い辛そうに握り締めている。

小鉄も自分の携帯を見て、眉を顰めて電源を落とした。

「ヤクザ事務所で揉め事を起こさせ、俺達に行動しづらい状況を作ろうとしたんだらうな」

「ヤクザに目を付けられ、音楽麻薬の組織以外に敵を増やそうとした？」

ヤクザを敵に回していたら、吉祥町ではまともに活動出来なかったらう。

俺は真琴の頭をポンポンと叩き、その際の功労者を労った。

「乃江さんの電話は注意を促す意味だけじゃない。重大な証拠資料というキーワードを聞かせ、表舞台に引き摺り出そうと思ってる」

「出てきますかね？」

「来るさ」

まだなんの情報も得ていない音楽麻薬の組織。

俺達と麻薬組織を繋げているのは真琴の携帯だけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6563h/>

END IF;

2009年12月3日13時25分発行